宇治市埋蔵文化財発掘調査概報
第39集

―赤塚遺跡・木幡古墳群・一里山遺跡・槇島城跡―

AKATSUKA site, KOHATA No.117 tumulus, ICHIRIYAMA site, MAKISHIMA castle site

1997

宇治市教育委員会

序

近年、全国の埋蔵文化財発掘調査成果が大きく報道されることがありますが、開発などによる緊急調査中の発見であることが少なくありません。宇治市においても民間の宅地開発事業や道路建設等の開発行為は年を追うごとに増え、それに伴う埋蔵文化財の緊急調査件数も同様に増加しております。

本書は、宇治市教育委員会が平成８年度に行いました開発事業に伴う赤塚遺跡、木幡古墳群、一里山遺跡、槇島城跡の発掘調査概要をまとめたものです。

発掘調査成果の詳細は後述致しますが、赤塚遺跡では、華やかな平安王朝文化が宇治橋周辺域のみではなく、木幡地域でも展開していましたことを窺い知ることができました。木幡古墳群では、新たに古墳を発見し、このことにより従来知られる古墳群の規模が拡大する可能性が考えられるようになりました。また、一里山遺跡では、古墳時代から奈良時代にかけて、古代寺院を核とする一大集落が展開していたことが、今回の調査で初めて理解できました。槇島城跡では、城に伴う可能性のある遺物の出土がありました。

最後になりましたが、調査にご協力をいただいた開発業者の方々をはじめ、調査期間中にご協力をいただきました関係機関、ならびに各位に対して心よりのお礼を申し上げます。

平成９年３月

宇治市教育委員会

教育長　岩　本　昭　造

例　　言

1、本書は宇治市教育委員会が平成８年度に実施した、開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査概要報告書である。

2、本書は宇治市教育委員会が刊行する『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』の第39集にあたる。

3、本書で使用する方位は全て磁北である。

4、本書が収録する発掘関係資料は宇治市教育委員会が保管・管理している。

5、本発掘調査事業の組織は下記のとおりである。

調査主体者	宇治市教育委員会		
調査責任者	宇治市教育委員会	教育長	岩本昭造
調査担当者	同　社会教育課	主事	荒川史
	同		浜中邦弘
	同	嘱託	吹田直子
調査事務局	宇治市教育委員会	参事	岡本茂樹
	同　社会教育課	課長	小西吉治
	同　社会教育課	文化財保護係長	吉水利明
	同　社会教育課	主任	日原洋子

調査参加者　（調査補佐員）小川裕紀、（調査補助員）宮崎一弥・内田真雄・新井知哉・中村幸代・荒木浩一・坂本浩一、（調査整理員）吉岡美佐・河村亜由美・今西礼子・久保千恵子・和田妙子・畑陽子・宮川千代実・山下由香・佐野和恵・足立千春・坪井啓子

6、本書が収録する発掘調査対象遺跡は下記のとおりである。

名　称	所在地	調査期間	経費負担者	調査担当者
赤塚遺跡	御園69-1	Ｈ8. 8. 29～Ｈ8. 10. 31	大倉建設㈱	吹田
木幡古墳群	木幡南山1-1他	Ｈ8. 11. 20～Ｈ9. 1. 31	穴吹工務店㈱	吹田
一里山遺跡	広野町東裏45-1	Ｈ8. 10. 22～Ｈ8. 11. 11	奥田建設㈱	浜中
槇島城跡	槇島町薗場35	Ｈ8. 4. 3～Ｈ8. 4. 9	㈲古川組	荒川

7、本書に使用した遺構写真は各調査担当者が撮影した。

8、本発掘調査の実施期間中に下記の方々から専門的なご指導・ご教示ならびにご協力をいただいた。記して感謝したい。順不同、敬称略。

山田邦和（京都文化博物館）、鍬柄俊夫（大阪府教育委員会）、中井淳史（京都大学大学院）、松村英之（同志社大学学生）、藤井幸司（立命館大学学生）、中世土器研究会。

9、本書の編集は宇治市教育委員会社会教育課文化財保護係が行い、吹田が実務を担当した。本書の執筆分担は下記のとおりである。

A．赤塚遺跡　Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ……吹田直子
　　Ⅲ　……小川裕紀（立命館大学大学院生）

B．木幡古墳群　……吹田直子

C．一里山遺跡　……浜中邦弘

D．槇島城跡　……荒川　史

本 文 目 次

A．赤塚遺跡（御園69-1）発掘調査概要

Ⅰ．はじめに …… 1

Ⅱ．検出遺構 …… 2

Ⅲ．出土遺物 …… 12

Ⅳ．まとめ …… 25

B．木幡古墳群（南山1-1、南山畑19他）発掘調査概要

Ⅰ．はじめに …… 29

Ⅱ．検出遺構 …… 31

Ⅲ．出土遺物 …… 38

Ⅳ．まとめ …… 45

C．一里山遺跡（広野町東裏45-1）発掘調査概要

Ⅰ．はじめに …… 51

Ⅱ．検出遺構 …… 53

Ⅲ．出土遺物 …… 57

Ⅳ．まとめ …… 59

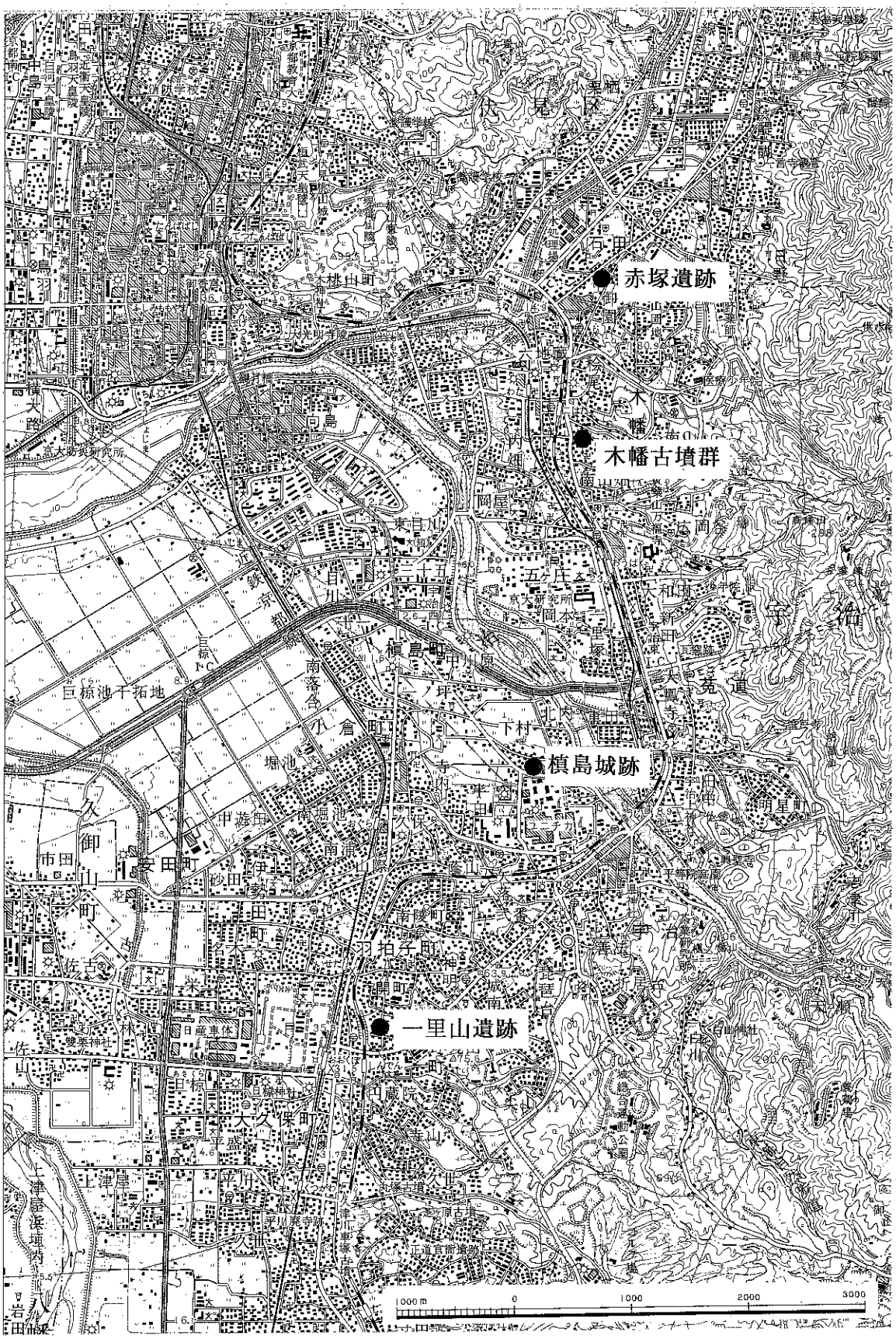
D．槙島城跡（槙島町薗場35）発掘調査概要

Ⅰ．はじめに …… 61

Ⅱ．調査の概要 …… 63

Ⅲ．まとめ …… 66

抄　録 …… 67



発掘調査地位置図

A. 赤塚遺跡 － 御園69－1 － 発掘調査概要

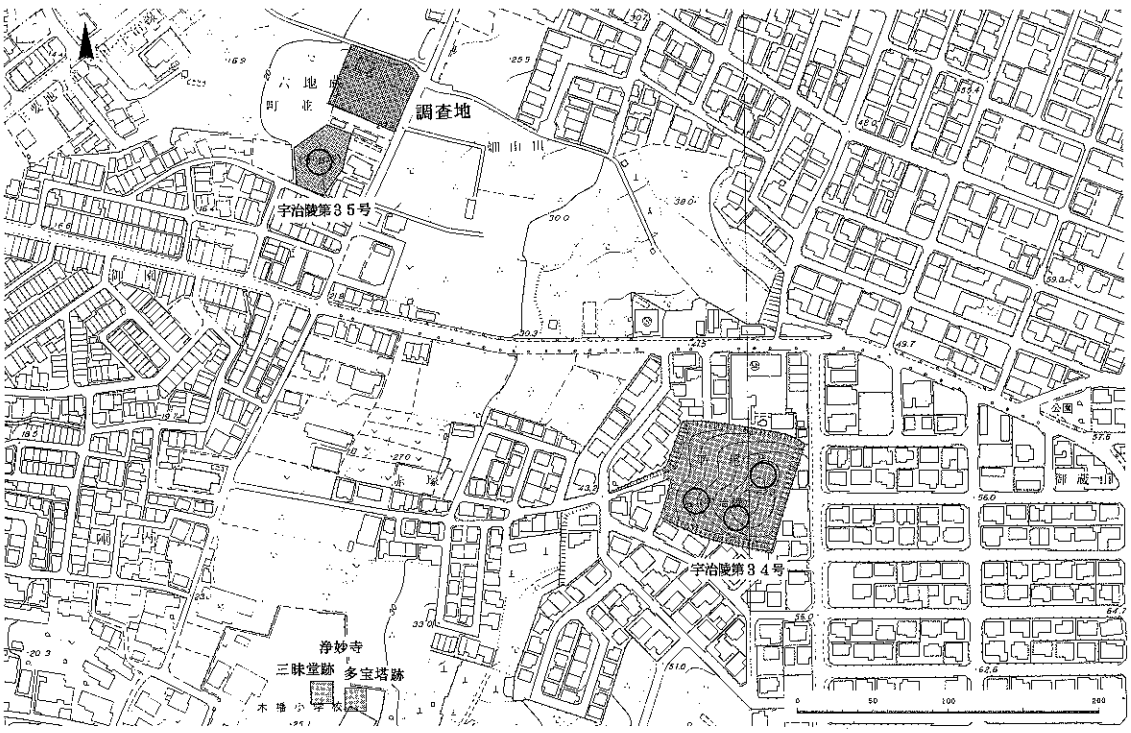
Ⅰ．は　じ　め　に

本報告は、宇治市御園69-1における共同住宅建設に先だって実施した、赤塚遺跡発掘調査成果の概要である。

赤塚遺跡は、山科盆地の沿辺に展開する低段丘上に立地しており、宇治市と京都市山科区との市境近くに位置する。周辺には後期古墳群および奈良から平安時代にかけての墳墓群を包括する宇治陵墓群、藤原道長によって建立された浄妙寺跡などの諸遺跡や、大和・宇治・大津を結ぶ北陸道・東山道として機能していた奈良街道などが存在している。このような環境から赤塚遺跡の内容は、古墳時代には墓域として、奈良時代以降には墳墓や寺院・集落などが複合する遺跡として想定していた。

現在、遺跡内の約半分の土地は茶畑や竹林として利用されているが、周辺の環境はここ数年で大きく変わりつつある。これに伴い、赤塚遺跡では過去に試掘・立会調査を重ねているが[1]、本格的な発掘調査は今回が初めてである。

今回の調査地も、昭和初期までは畑として、戦後からは竹林として利用されていたが、近年ではテニスコートとして利用されていた。調査は、アスファルト敷きと表土を機械で除去した後、人力によって遺構の掘削を行い、写真撮影と平面測量により記録を作成して終了した。調査期間は平成８年８月29日から平成８年10月31日までで、調査面積は300㎡である。

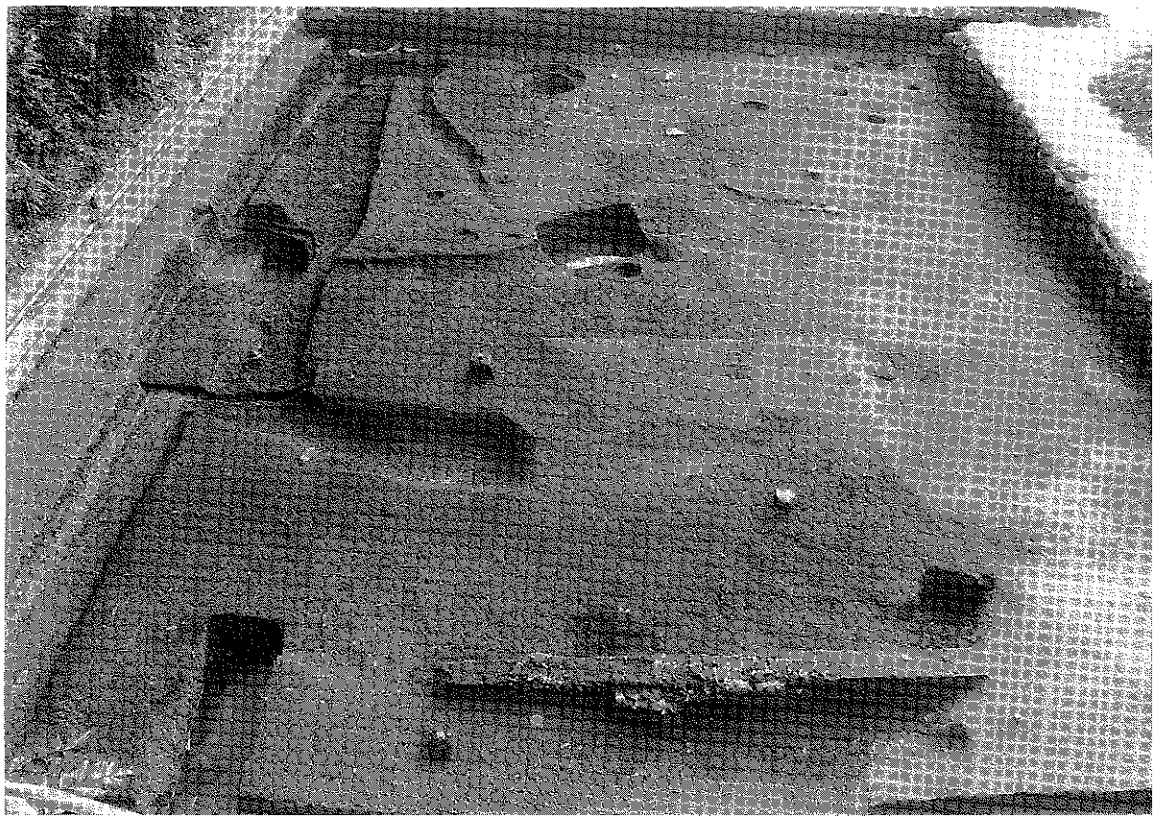


第１図　調査地の位置

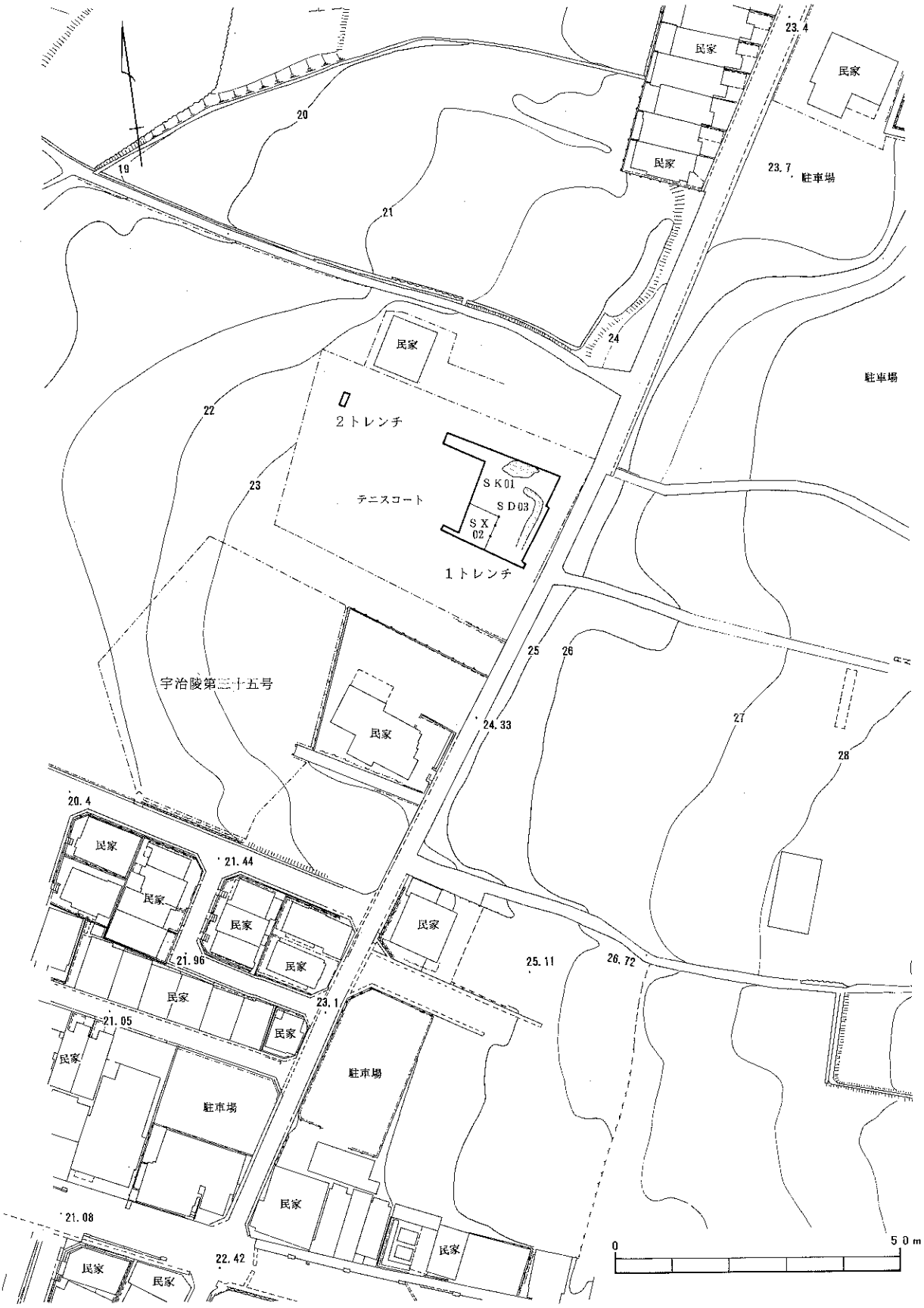
Ⅱ. 検 出 遺 構

今回の調査地は南東から北西に向かっての緩斜面上に位置するが、現状はテニスコートとして造成されており、ほぼ平坦地となっている。この平坦面は、東面する市道停車線道から1.8mほどの段差をもち急峻に低いことから、南東側斜面が切り土されて北西側に盛り土が行われている可能性を考えた。そのため、切り土の及んでいない範囲を確認する目的で、斜面に直行する３ｍ幅のトレンチを調査地北寄りに設定し、東側から掘削を開始した。ところが、掘削開始直後から表土直下で土師器皿を含む遺物包含層を確認し、さらに平安時代後期の土器溜まりを検出したため、大幅な切り土は行われておらず調査地全体が盛り土造成されていることが確認できた。

この後も、この遺構面の範囲を確認するために掘削を続けたところ、調査地中程より遺物の出土がなくなり、それとともに傾斜が強まって遺構面がとぎれた。そのため、ここまでの範囲に遺構が展開するものと判断したが、下層遺構の有無確認のため掘削を続けた。しかしその兆候が見られなかったため、一旦トレンチの掘削を停止し、北西端に２トレンチを設定して再度確認を行った。しかし、ここでも同様に下層遺構は確認できなかったため、当初検



第２図　１トレンチ全景写真（北から）


民家
民家
民家
23.4
23.7
駐車場
駐車場
20
19
21
24
民家
22
2トレンチ
23
テニスコート
SK01
SD03
SX
02
1トレンチ
25
26
宇治陵第三十五号
民家
24.33
27
28
20.4
民家
21.44
民家
民家
民家
21.96
民家
民家
25.11
26.72
23.1
民家
21.05
民家
駐車場
駐車場
民家
21.08
民家
民家
22.42
0
50m

第3図　トレンチ配置図

出したトレンチの遺構面を拡張する形で調査区（1トレンチ）を設定した。

その結果、平安時代末期、鎌倉時代の土壙、溝などをはじめとして、平安時代から江戸時代に至る各時代の遺構を検出した。以下にその概要を述べる。

A．土層の状況

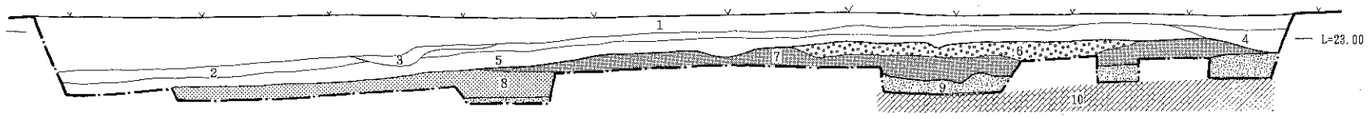
土層の堆積状況は、前述のとおり緩傾斜する斜面地を平坦にするために盛土造成を行っているため、現代置き土が南東に薄く、北西と南西にかけては厚く堆積している。以下の層序についても同様に、各地点での層の有無や、厚さなどが異なっている。

北壁側の層序は、2層の遺物包含層、平安後期以前の盛土層、旧表土、地山の順である。2層の遺物包含層のうち、上層は近現代の耕作土と考えられる薄い黒褐色土で、細片化した土器を含んでいる。下層の遺物包含層は、耕作が深く及んだことにより、平安時代後期以降の遺構面が攪乱されたものと考えられる。多くの土器や瓦などを含んでいる。北壁側に比べて比較的遺構面が深かった南壁側では、2層の遺物包含層下に2層の中世遺構面が捉えられた。これらの下層には、12～14世紀にかけての遺構面が展開する茶褐色砂質土層が存在する。この層は、トレンチ南北で約0.5mの比高差をもって南に傾斜している。東に向けても緩やかな傾斜を持っているが、トレンチ東壁付近で漸移的に灰褐色砂質土に変化し、傾斜が強まって遺構が稀薄になる。いずれの層も遺物は含まない。

第4図　2トレンチ全景（南西から）

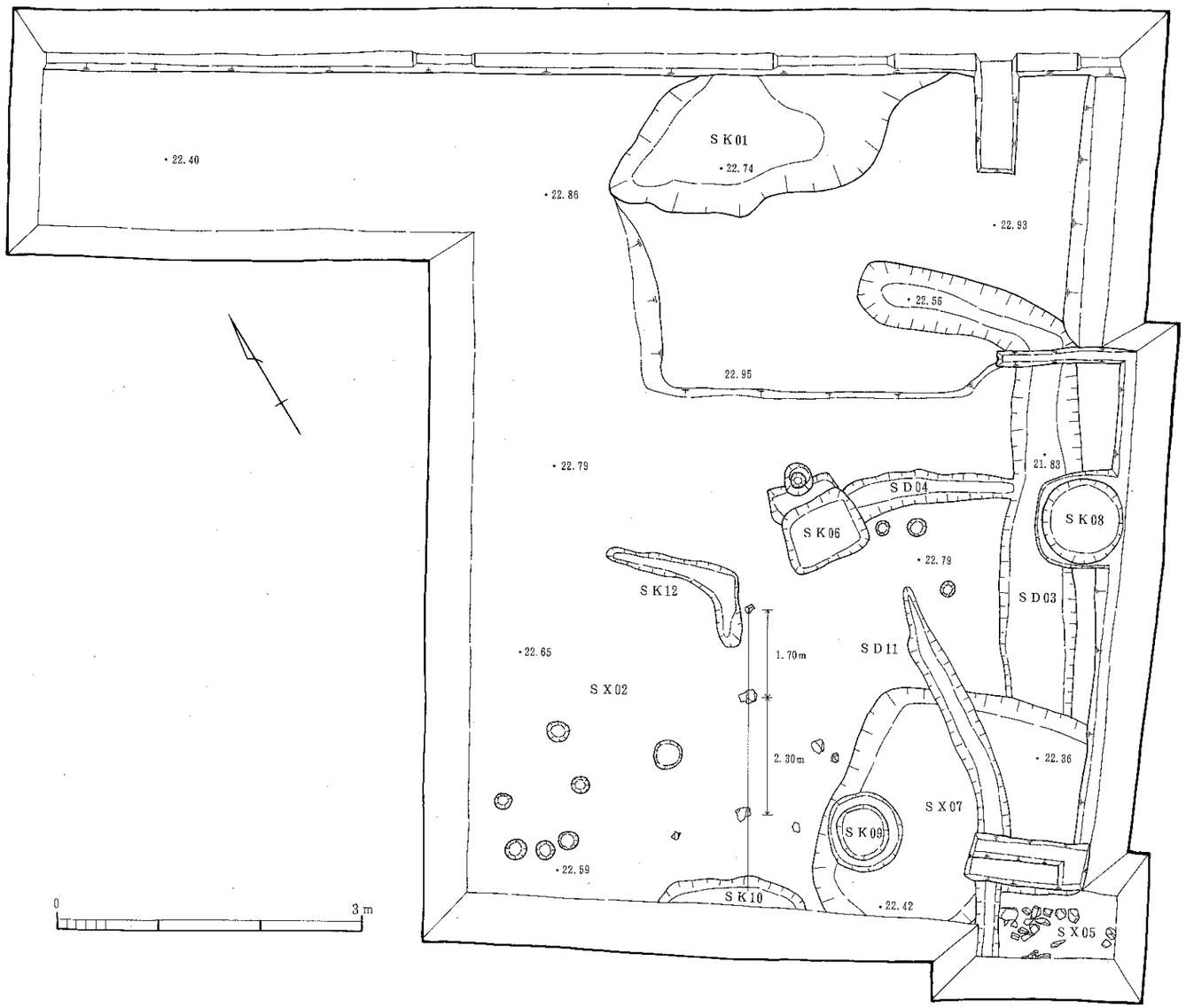
茶褐色土層下には黒褐色砂質土層、暗黄褐色土（地山）が存在する。これらの層からも遺物の出土はなかった。茶褐色砂質土下の遺構の有無については、断ち割りを数か所設定し確認を行ったが、いずれの地点においても遺構・遺物とも検出しなかった。そのため調査地全体にわたって顕著な遺構は存在しないものと判断した。なお、全出土遺物中にも平安時代末期を下る時代の遺物はない。

2トレンチは、調査地北端に設定した2m×1mのトレンチで、目的は先述のとおりである。掘削を進めたとこ



凡　例

1：テニスコート造成土　2：黒 褐 色 土（近現代耕作土）　3：褐 色 砂 質 土
4：黄 褐 色 土　5：黄褐色砂質土（土器、瓦など含む）　6：暗黄灰色砂質土（ＳＫ０１埋土）
7：黄灰色砂質土（礫を多く含む）　8：灰褐色砂質土　9：黒褐色砂質土　10：暗黄褐色土（地山）



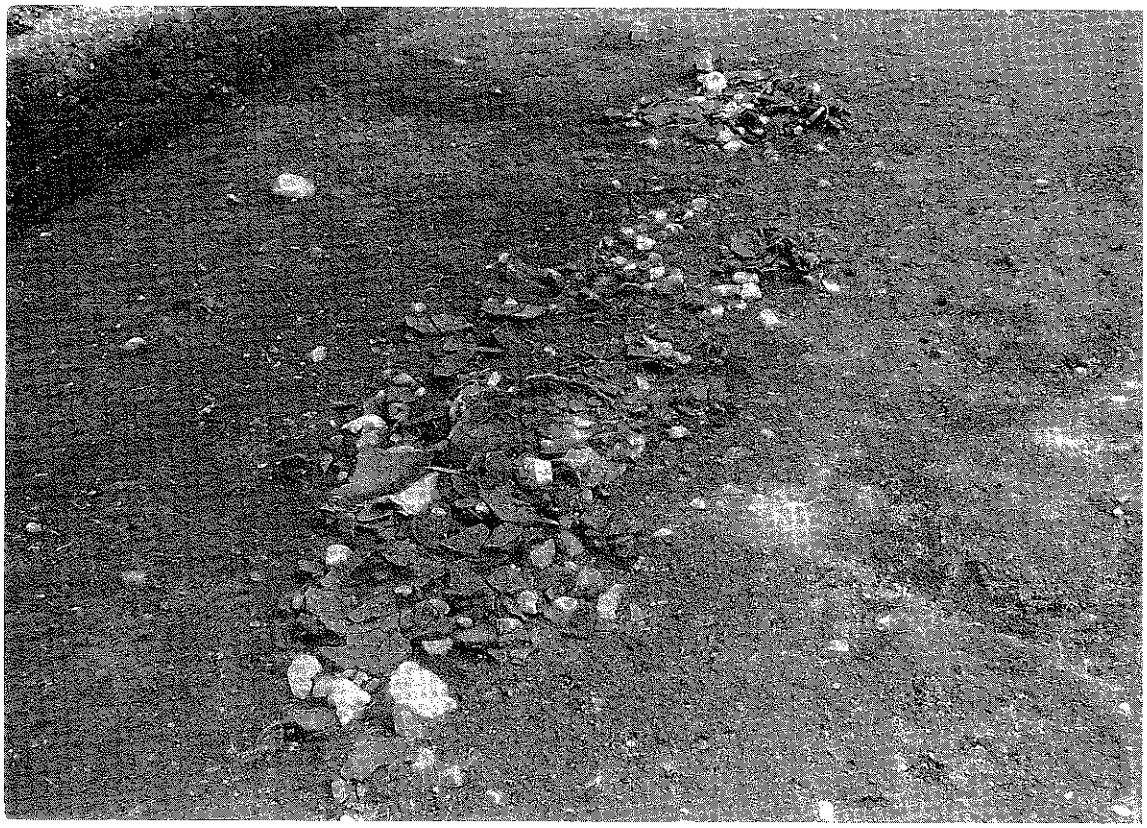
第５図　１トレンチ遺構平面図

ろ、竹林による腐植土層と茶褐色土と互層となって地表下約３ｍ堆積しており、その下層で礫質の暗褐色土（地山）を確認した。遺物は検出しなかった。

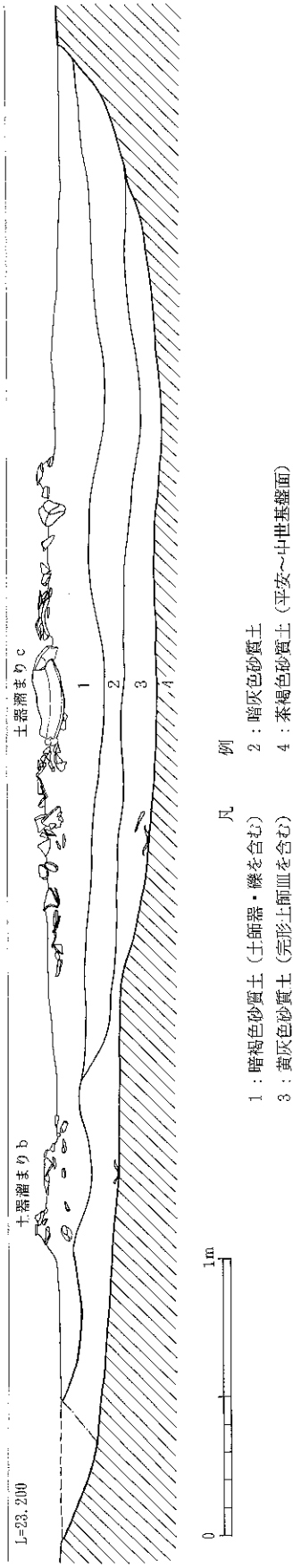
B．遺　構

土壙ＳＫ01　ＳＫ01はトレンチ北東部で検出した長さ５ｍ×幅1.5ｍ、深さ0.4ｍの皿状土壙である。この地点は旧地形においての標高が高く、近現代の耕作のため上面は削平を受けているものと考えられる。埋土は３層に分層できた。埋土上層は、こぶし大の礫を含む暗褐色砂質土で、細片化した土器（土器溜まりａ，ｂ，ｃ）を多く含んでいる。中層は暗灰色砂質土でごく少数の細片化した土器を含む。下層は黄灰色砂質土で、この層からは完形を含む土師器皿が出土している。このように、埋土中の遺物は大きくは上層遺物と下層遺物に分類でき、両者の埋没には一定の時間差があったものと考えられるが、遺物の上では大きな型式差はなく、概ね11世紀末葉から12世紀ごろのものと考えられる。

上層遺物については、検出時に土壙内で土器が集中する地点が３か所存在したため、東側より土器溜まりａ，ｂ，ｃとして取り上げた。土器溜まりａ，ｂ，ｃ間の関係については、取り上げ時に土層観察壁を設定して層序の確認を行ったが、各々は単一層に含まれており、検出時上面からほぼ20㎝までの間に不規則に集積する埋没状況についても差異は見られなかった。したがってａ，ｂ，ｃはほぼ並行する時期に投棄されたものと考えられる。なお、遺物



第６図　ＳＫ01検出状況（北東から）



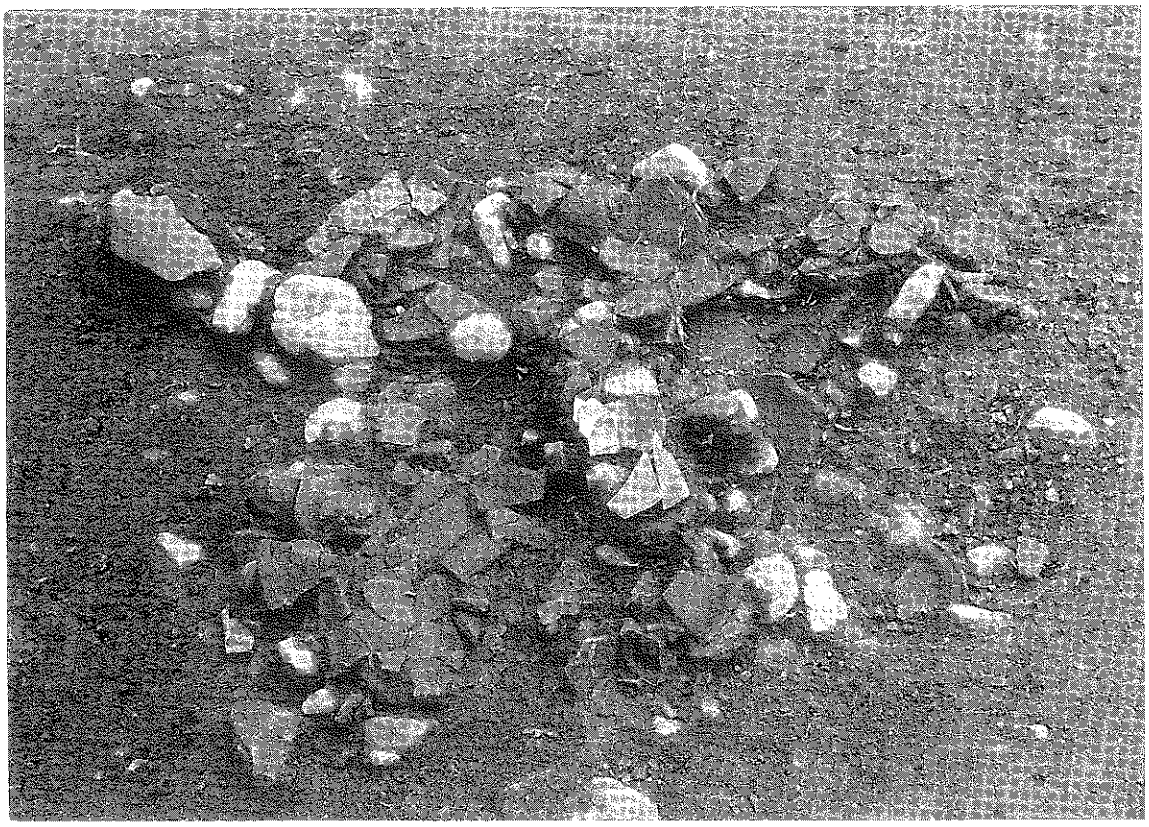
第７図　ＳＫ01土層断面図

についても明瞭な時期差は見られなかった。土器溜まりに含まれる遺物は全てが土器類で、圧倒的多数の土師器皿と少量の土師器鍋、瓦器椀、須恵器椀・鉢などがある。特に土師器皿については完形や、それに近い状況で出土したものはほとんどなかった。鍋類についても口縁部が全周する個体があるものの、底部を欠くなどして全てが破損したものであった。他の器種についても同様である。なお、整理作業時においても、接合する破片はごく少数で完形品はなかった。このような状況から、これらの遺物については、使用時もしくは投棄前に破損したものが廃棄されたと考えられる。また、土器のほとんどは土器溜まりｃに含まれており、ｂには土師器皿と瓦器椀が、ａについては少量の土師器皿破片が含まれているのみであった。

下層遺物については、土壙底面近くから完形の土師器皿を含む土師器皿片が少量出土している。上層遺物に比べ完形品を含む点などで若干の異なりはあるが、投棄時の特殊事情を伺わせる他の要素がないため、基本的には不要物を投棄したものと考えている。

石列ＳＸ02　トレンチ西でほぼ同レベルの面をもち一直線上に並ぶ石列を検出した。３石からなり、これらを結ぶラインは後述する溝ＳＤ03とほぼ平行する。何らかの構造物基礎である可能性があるが、対となって直行・平行する石列などを確認できなかったため、断定はできなかった。礫の据え付けに伴う掘方はなかった。礫の大きさは北から20×20㎝、35×30㎝、30×25㎝で、礫間の距離は北から1.70ｍ、2.30ｍである。

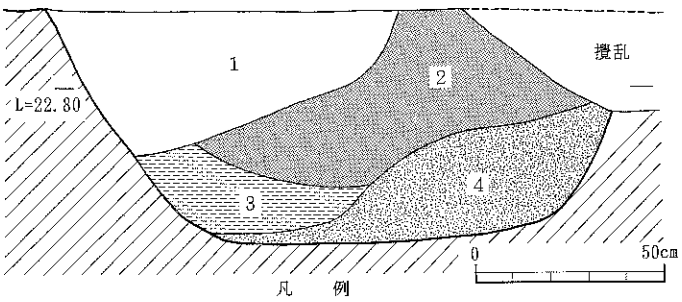
溝ＳＤ03　トレンチ東で検出したＬ字状の溝である。長さ8.5ｍ以上×幅１ｍ、深さは検出面から約0.6ｍで、南端はＳＸ07に切られている。北側は途中で西に折れ、３ｍで緩やかに立ち上がってとぎれる。このような形状から、区画溝としての性格をもつと考えている。断面形はＵ字状を呈する。埋土には砂層や泥土の堆積はなく、常時は耐水状況になかった



第８図　ＳＫ01上層土器溜りｂ（北から）

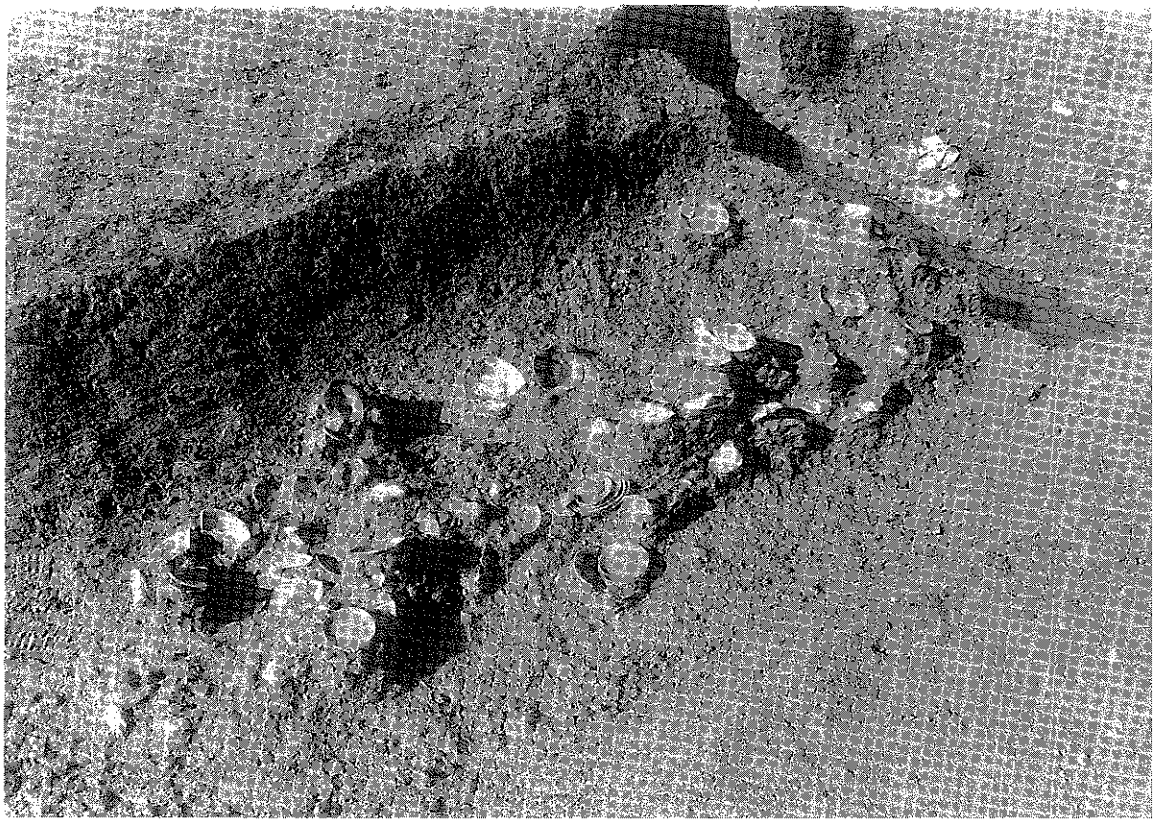
第９図　ＳＫ01上層土器溜りｃ（南から）

か、もしくは浚渫行為があったと考えられる。この溝からは、多くの土師器皿を始め、ミニチュア土器などが出土しており、14世紀中に埋没したことがわかる。埋土は、残存状況の良い屈曲部で4層に分層できた。最下層には遺物を含まない黄褐色砂質土が堆積し、溝が一定期間放置状態に置かれていたらしいことを示している。後に、遺物が投棄されるが、数か所で完形の土師器皿がまとまって出土する状況が見られた。土器と土器はほとんど間層をかまず、折り重なるような出土状況であったため、何らかの供膳行為にともなう土器がまとめて投棄されたものと考えている。数か所にわたる点は、溝が完全に埋没するまでに、同様の投棄が繰り返されたことを示すものであろう。



第10図　ＳＤ03土層断面図

溝ＳＤ04　トレンチ中央付近から東流する長さ３ｍ×幅0.6ｍの溝で、東端はＳＤ03と合流する。深さは検出面より約0.2ｍほどである。ＳＤ03とは底面の深さが違うが、両者は併存していた時期があると考えられる。西端はＳＫ06

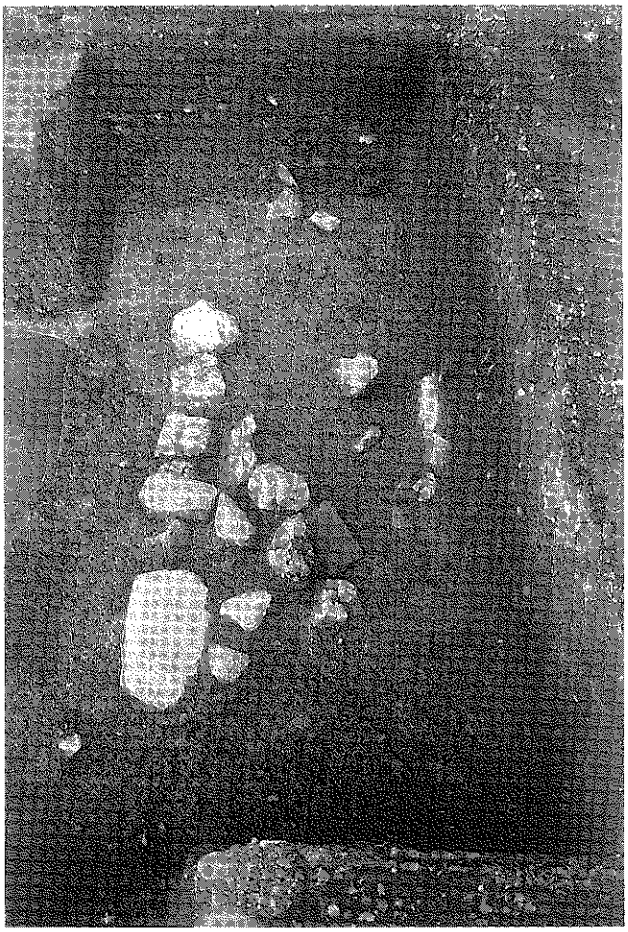


第11図　ＳＤ03土器検出状況（南から）

に切られているが、その先には続かない。土師器皿片が出土しているが図示できる遺物はない。

石列ＳＸ05　チャート、粘板岩、花崗岩からなる礫群がトレンチ南壁面に現れたため、拡張を行ったところ、石畳状に北側の面がそろえられて列をなしていた。内側となる南側には、規則性はないものの疎らに礫が散在しており、何らかの基礎構造である可能性がある。供伴遺物はないが、ＳＤ03，ＳＸ07より検出面が上層のため中世以降のものと考えられる。

土壙ＳＫ06　ＳＤ04を切る土壙で、長さ１ｍ×幅0.8ｍである。細片化した土師器片が出土しているが、時期のわかるものはない。



第12図　ＳＸ05検出状況（北東から）

落ち込みＳＸ07　5.5ｍ×4.5ｍの範囲で皿状に落ち込んでいた。明瞭な肩を検出できなかったが不正円形の土壙と考えられる。埋土には炭などの多量の有機質と遺物を含んでおり、黒褐色を呈していた。出土遺物には、土器類、瓦類、滑石製の石鍋などがある。どの遺物も細片化が進んでいる。

土壙ＳＫ08　２段の掘込みをもっていたため、井戸と考えて掘削したが約１ｍで底に達した。直径1.3ｍのほぼ正円形の土壙である。出土遺物には土器類、砥石があるがＳＤ03に伴う遺物が崩落したものと考えられる。ＳＫ08に伴う遺物はなかったが、検出面が現代耕作面下のため近世～現代のものと考えられる。

土壙ＳＫ09　ＳＫ08同様、２段の掘込みをもっていたが、約0.5ｍほどで底に達した。直径約7.0ｍ。

土壙ＳＫ10　トレンチ南壁ぎわに検出した土壙で、15世紀ごろの信楽の鉢を１点検出した。

溝ＳＤ11　ＳＸ05、ＳＸ07を切るため、近世、近代に掘削されたものと考えられる。

土壙ＳＫ12　残りが浅く遺構の形状については不明である。16世紀の土師器皿が出土している。

Ⅲ. 出 土 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、整理コンテナ約30箱分である。内訳は、土師器が最も多く、他に瓦器、瓦質土器、須恵器、国内産陶器、輸入陶磁器、滑石製石鍋、瓦も出土している。時代的には、そのほとんどが中世の範囲に収まり、大きくは12世紀を中心とした時期と、14世紀を中心とした時期の２時期に区分される。以下では、主要遺構ごとに出土遺物の概要を報告する。

Ａ．ＳＫ01－土器溜まりｂ・ｃ－(第13図・第14図)

土師器鍋４個体と、土師器皿の小破片が大量に出土した。また、これらと共に瓦器椀、須恵器椀・鉢も少量ずつ検出された。土師器鍋を除く出土遺物の量は、整理コンテナ３箱分である。

土師器皿は出土破片数に比べ、器形全体が復元できたものはごく少量である。①「ての字状口縁」皿、②二段ナデ・一段ナデ口縁皿、および③「コースター型」皿の３種類がある。

①「ての字状口縁」は、口縁端部にやや丸みを帯びた面取りを施すもの（１・３・５・９）と鋭く面取りするもの（２・６・７）の２種に細分できる。土器溜まりｃ出土のものは、概ね胎土は精良で色調は黄褐色、焼成は良である。ただし９は色調が淡橙褐色を呈する。ＳＫ01土器溜まりｂ出土のものは、３が黄褐色、７は橙褐色である。伊野氏分類のＢｂ・Ｂｃタイプが退化したものか。

②は全体のプロポーション、体部と底部との境の形態によって３種類に分類できる。

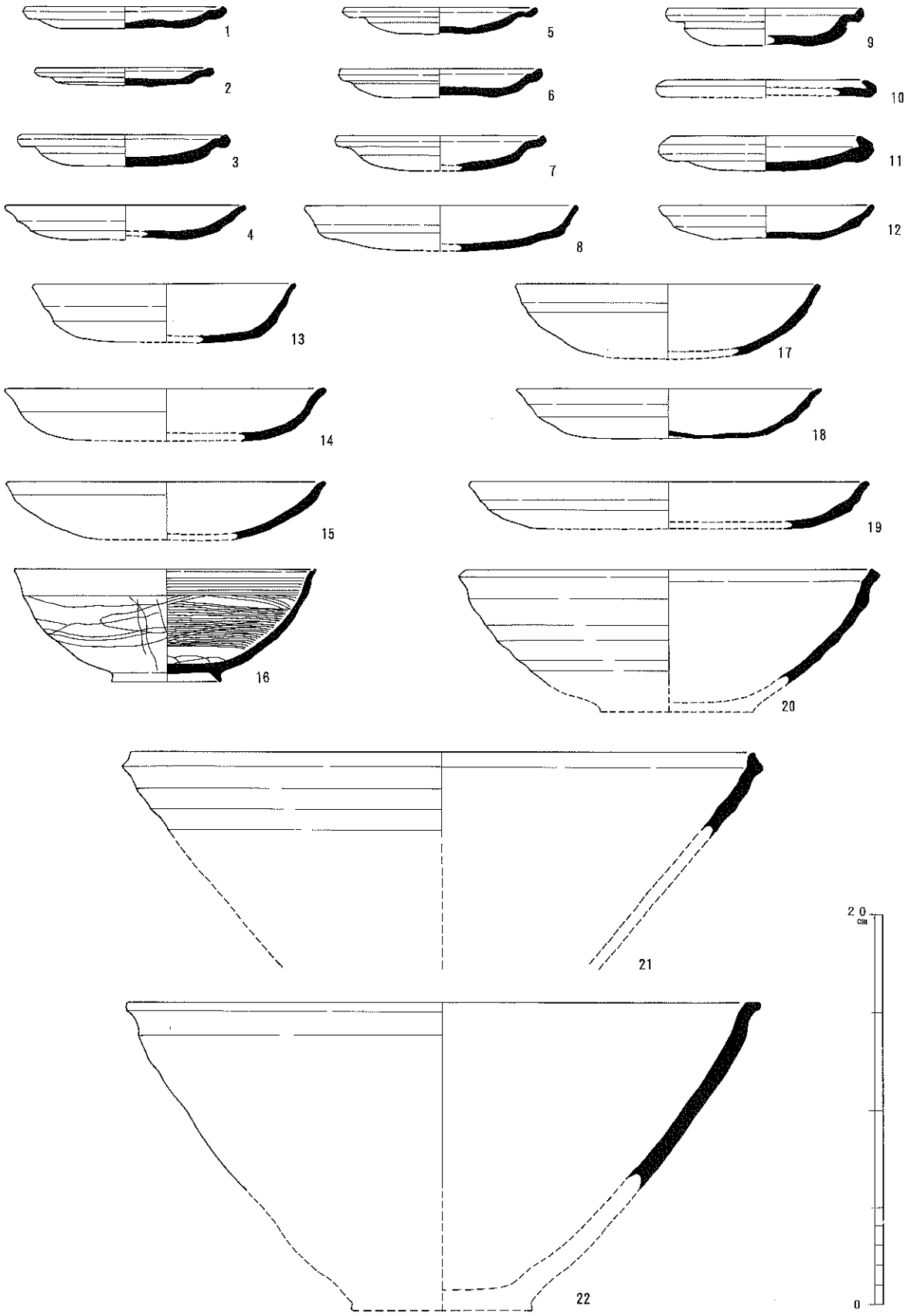
４・８・12は体部と底部との境に明確な屈曲をもつ。口径は11～14㎝、器高は約２㎝で皿形を呈する。４・12は口縁部外面に２段ナデを施す。８は２段ナデ相互の境が不明瞭。

13・14・18は体部と底部との境にゆるやかな屈曲をもつ。口径に比して器高が大きく、浅鉢状の形態をもつ。18は口縁部外面に２段ナデを施す。13は２段ナデ相互の境が不明瞭。14は１段ナデである。

15・17・19は体部と底部との境に明確な屈曲をもたないものである。器形は上述のタイプに類似するが、19のように皿形のものもある。19は口縁部外面に２段ナデを施す。17は２段ナデ相互の境が不明瞭。15は１段ナデである。

色調は12・13・15が淡橙褐色、他は淡黄褐色を呈す。前者の胎土は精良で、焼成は良。後者は径１㎜以下の砂粒を若干含み、焼成はやや不良である。これらは伊野氏分類のＡａタイプに相当する[2)]。

③「コースター型」皿の出土量は前二者に比べ、極めて少ない。11は底部中央は無調整で



第13図　ＳＫ01出土土器実測図

あるが、底部外面周縁から口縁部内面にかけて横ナデが施される。底部内面は一方向ナデか。10は小片のため詳細は不明である。色調は淡橙褐色、径1㎜以下の砂粒を若干含み、焼成は良である。

瓦器は椀が数個体分出土したが、器形全体が復元できたものはごく少ない。16は大和型瓦器椀である。横ナデによって口縁部が外反し、口縁部内面に沈線をもつ。高台は断面三角形ないし台形のしっかりしたものを貼り付ける。体部内面の圏線ヘラミガキは密であるが、見込みの暗文との切り合いを持たない。外面は体部の上位4分の3まで暗文を施すが、やや疎である。胎土は白色で精良、焼成は良好である。近江氏編年第Ⅱ段階A型式に相当か[3)]。

須恵器は椀・鉢が少量検出されている。20は椀である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は面取りされる。胎土は径2～3㎜の砂粒を若干含み、色調は青灰色。焼成は良である。21、22は鉢である。ＳＫ01出土の22は口縁端部を水平に仕上げる。土器溜まりｃ出土の21は口縁端部外面を下方にやや拡張する。前者は胎土に7㎜の砂粒を含み、色調は青灰色。焼成は良である。後者は精良、白灰色で焼成は良好である。

土師器鍋類は4個体出土している。

23・24はともに口縁部が強く外反する。口縁端部をつまみ上げて内湾させ、面取りを施す。内外面とも横ナデするが、体部外面には粘土紐の接合痕が顕著に認められる。23の色調は橙褐色、24は淡黄褐色を呈する。23・24ともに胎土に径2㎜程度の砂粒を若干含み、焼成は良好である。なお、23は口縁部の一部分が残存するのみであるが、24はほぼ一個体分の破片が出土している。

25・26は口縁部が「く」の字状に屈曲する。体部外面はタテ方向のハケ調整、内面は不定方向のナデを施す。25の外面および26の内外面には炭素が吸着し、黒色。25の内面は橙褐色を呈する。胎土は径1㎜以下の砂粒を多く含む。焼成は良である。なお、25は口縁部から頸部にかけてのみ、ほぼ全破片が残存している。26は完全には接合しなかったが、ほぼ一個体分の破片が出土している。

なお、今回は図示できなかったが、土器溜まりｃより土師器台付皿、ＳＫ01より丸瓦が極少量出土している。

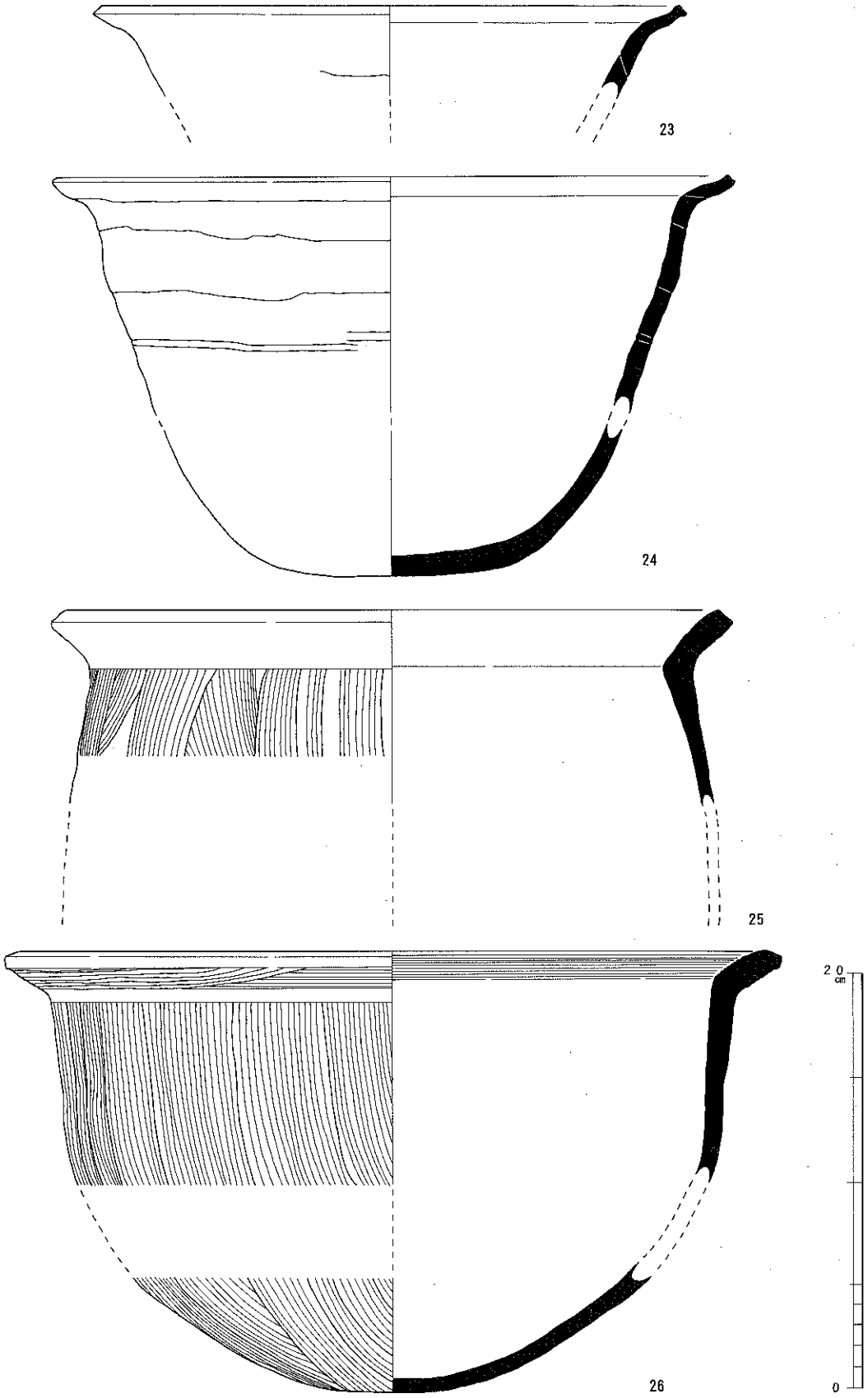
Ｂ．ＳＤ03（第15図・第16図）

土師器皿が大量に出土した他、土師質のミニチュア土器、土師質釜、瓦器椀、瓦質土器、須恵器鉢や青磁椀が検出された。

土師器食膳具の内，皿は色調が褐色系のものと、乳白色のものとの2つに大別できる。

褐色系皿は、径8㎝前後と、径11㎝前後との2法量に口径が分布する。

前者：褐色系皿小は口縁部、体部と底部の境の形態や胎土によって3種類に大別される。



第14図　ＳＫ01出土土器実測図

①27・28は底部内面に一方向ナデを施した後、口縁部内外面を強くナデる。体部と底部の境は強く屈曲し、口縁部は直線的に外方に開く。29・30・31は同様のナデ痕跡を持つが、口縁部内面のナデが特に強く施されるため、底部内面周縁から体部下端の器壁が薄くなり、底部内面中央は島状の高まりとなっている。30・31のように口縁部が外反するものもある。色調は、28が橙褐色、他は黄褐色を呈する。胎土は、27・28が径2～3㎜の砂粒を多く含むのに対し、29・30・31は精良である。焼成は全て良好である。

②37・38は①同様のナデ痕跡をもつが、体部と底部の境は明確な屈曲を持たず、ゆるやかに内湾もしくは直線的に外方に開く。径8㎝と径9㎝の2法量がある。色調は黄褐色、胎土は精良で、焼成は良である。

③32・33・34も①同様のナデ痕跡をもつが、口縁部外面のナデが弱いものである。胎土は3種類ある。32は橙褐色、33は黄褐色、34は暗黄褐色であり、それぞれ径1㎜以下の砂粒を多く含む。焼成はやや不良である。

なお上記分類のいずれからも外れる特異な資料として、36がある。口縁部内外面にナデを施し底部を軽く押し上げる。器壁が非常に薄く、全体的に歪みが大きい。色調は赤褐色を呈する。胎土は精良で、焼成は良である。

後者：褐色系皿大は口縁端部、口縁部、体部と底部の境の形態によって、5タイプに分類できる。

①39は体部と底部の境はゆるやかで、明確な屈曲をもたない。体部から口縁部は内面・外面とも内湾し、口縁端部はつまみ上げ内湾する。体部外面上半から口縁外面には横方向の1段ナデを施す。褐色系皿大の中に占める比率は極小さい。

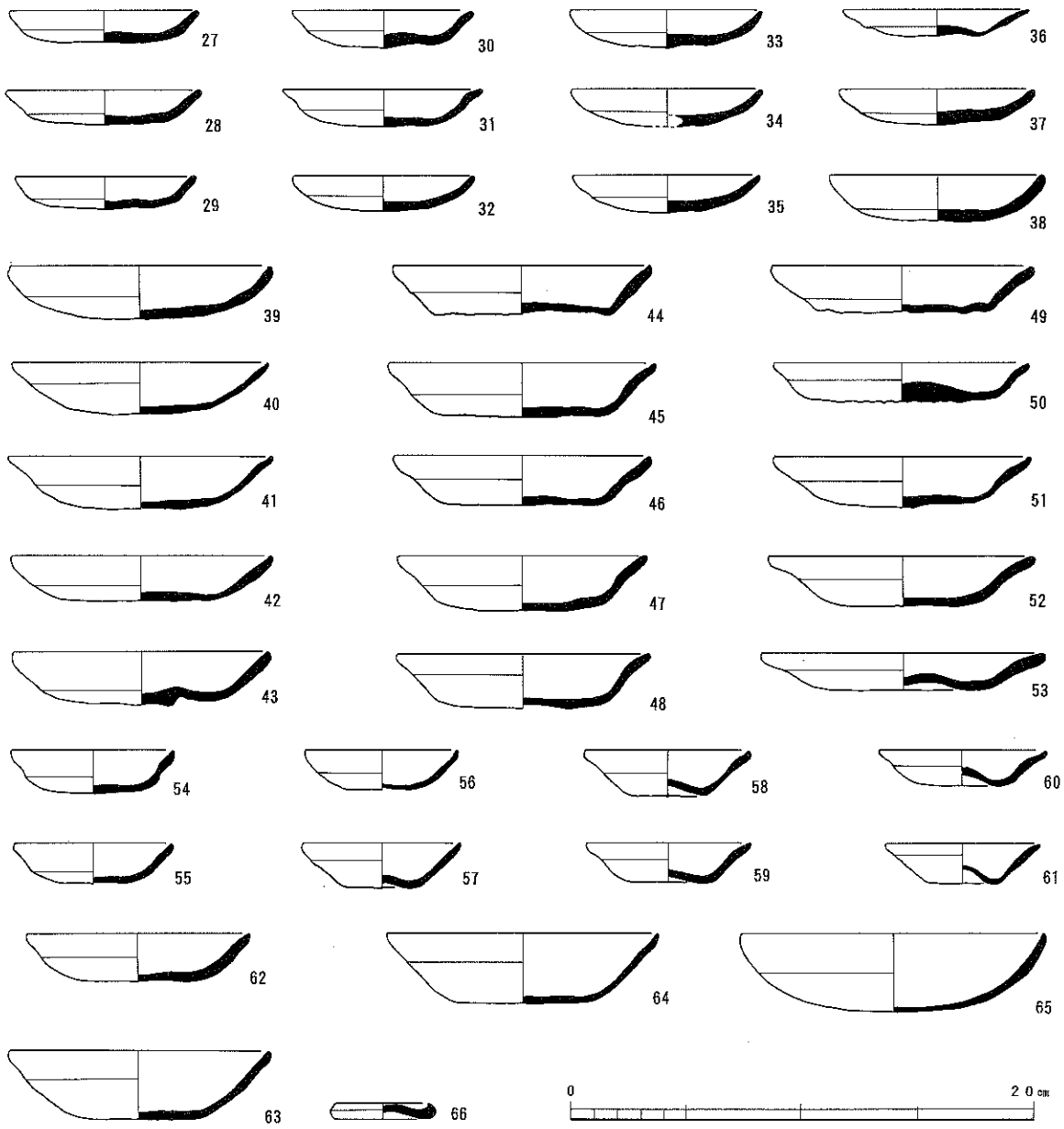
②40～43は体部と底部の境にやや明確な屈曲をもつ。体部から口縁部は直線状に開き、口縁端部はつまみ上げ内湾する。胎土は、砂粒を殆ど含まず精良のものと（41）、径2～3㎜の砂粒を多く含むもの（40・42・43）との2種がある。

③44～48は体部から口縁部内外面がやや外反し、口縁端部はつまみ上げ内湾する。胎土に砂粒を殆ど含まず、焼成良好で色調が黄褐色のもの（48）、径2～3㎜の砂粒を多く含み、焼成良好で色調が黄褐色のもの（44・45・47）および、径2～3㎜の砂粒を多く含み、焼成がやや不良で色調が淡褐色のもの（46）の3種が存在する。

④54は体部と底部の境に明確な屈曲をもつ。体部から口縁部は大きく外反し、口縁端部はつまみ上げ内湾する。褐色系皿大の中に占める比率は極小さい。

⑤52は体部と底部の境にやや明確な屈曲をもつ。体部から口縁部は外反し、口縁端部はつまみ上げずに丸く収める。褐色系皿大の中に占める比率は極小さい。

各タイプとも底部内面に一方向ナデの後、口縁部内外面に横ナデを施す。底部外面が平坦



第15図　ＳＤ03出土土器実測図

なものが多いが、これらの中には板状圧痕が認められるものもある（49・50・51）。この痕跡は底部外面の全面ないし一部に見られることが多いが、50の様に、板状圧痕が底部と体部の境の屈曲部にまで及ぶものもある。上記の分類では、②③④の各タイプに存在するが、特定の胎土・焼成状態との対応関係は認められない。これらの褐色系皿は伊野氏分類のＪｂタイプに相当するが、口縁部の面取りはほとんど施されていない。

乳白色系の皿には、いわゆる「へそ皿」を含む径約７㎝の小皿、径約10㎝、径約11㎝、径約13㎝の大皿および「コースター」型の皿がある。

最も小さい乳白色系皿（径７㎝前後）には、平底状のものと、底部中央が押し上げられた形態の、いわゆる「へそ皿」との２種類が存在する。

前者には、体部～口縁部外面に強いナデを施し、口縁端部をつまみ上げるものと（54・55）、ナデが弱く、口縁端部を丸く収めるもの（56）との２種類がある。伊野氏分類のＧａタイプに相当。

後者のいわゆる「へそ皿」は、底部中央の押し上げが小さいものが多いが、底部を明瞭に押し上げたものも存在する（60・61）。おおむね体部は直線的に外方に開くが、口縁部は直線状で、口縁端部をつまみ上げ内湾するものや、丸く収めるものの他、口縁部が直線状で、口縁端部を丸く収めるものなどバリエーションが認められる。ＳＤ03出土の「へそ皿」は胎土が精良で焼成良好であるが（58・59・60）、ＳＸ04出土のものは胎土に径１～３㎜の砂粒を多く含み、焼成がやや不良である。

径10㎝前後（62）、径11㎝前後の皿（63・64）はともに，底部と体部の境は明確に屈曲し、体部から口縁部は直線的で、口縁端部はつまみ上げ内湾する。後者は前者に比して器高が高く、杯状の形態を呈する。径13㎝前後の皿（65）は、底部と体部の境はゆるやかで明確な屈曲をもたず、体部から口縁部は内湾する。口縁端部はつまみ上げ内湾する。

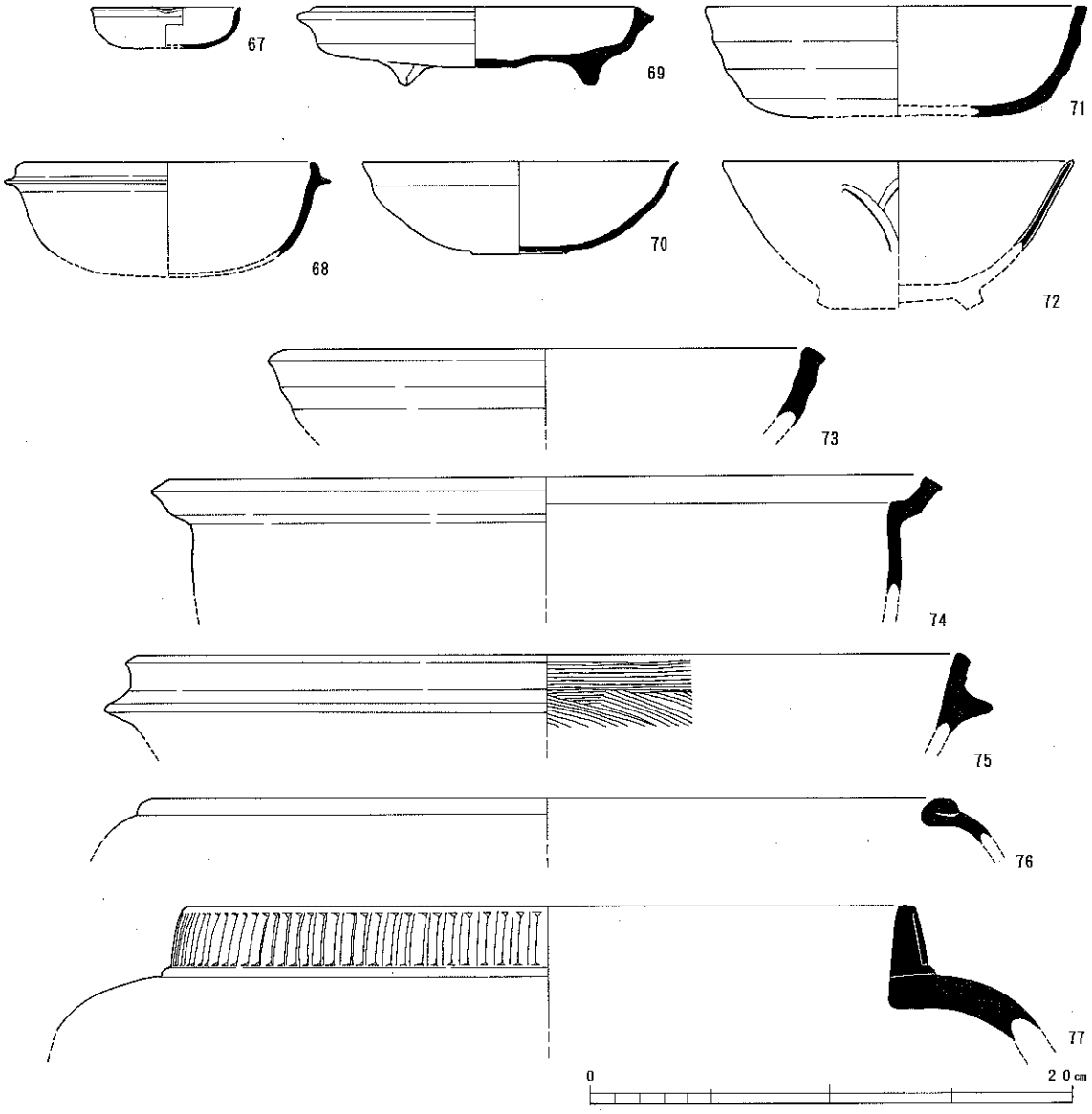
66は「コースター」型の形状を呈する。口縁部内面を強くナデ、口縁端部をつまみ上げる。底部は「へそ皿」同様に押し上げる。胎土は精良、焼成は良好である。

土師質のミニチュア土器は片口鉢形のもの（67）と羽釜形のもの（68）がある。片口鉢は口縁部内外面にナデを施した後、注口部をつまみ出す。羽釜は鍔部を張り付けた後、口縁部内外面を強くナデる。片口鉢の色調は黄褐色、羽釜は暗黄褐色である。胎土はともに精良、焼成は良である。

土師器煮炊具は釜の口縁部や鍔部の破片資料が中心である。76は口縁端部を外方に折り返しておさえ，内外面に横ナデを施す。

瓦器の出土量は極めて少ない。70は大和型瓦器椀である。横ナデによって口縁部が外反するが、口縁部内面に沈線は存在しない。高台は形骸化したもので、底部外面をわずかに押し上げることによって、機能を維持している。遺存状況が悪く、体部内外面ともミガキ痕は認められない。胎土は白色で精良、焼成はやや不良である。近江氏編年の大和型第Ⅲ段階Ｅ型式に相当か。

瓦質土器は数点出土している。69は盤である。古墳時代の須恵器杯Ｇに類似した、受け部を持つ。底部内外面に不定方向のナデ、口縁部内外面には横ナデが施され、底部に脚部が３本貼り付けられる。胎土は暗褐色で精良、焼成は良。71は鉢である。内外面とも横ナデを施し、外面は横ナデによって３条の凹線をめぐらせる。白色で精良、焼成はやや不良。74・75



第16図　ＳＤ03出土土器実測図

は釜である。74は内外面とも横ナデを施す。75は口縁部外面に横ナデ、口縁部内面のうち、口縁端部直下には横ハケ、その下にナナメハケを施す。胎土は白色で精良、焼成はやや不良である。77は風炉である。口縁部・肩部内外面に横ナデを施す。口縁部外面には蓮子状の立体的な紋様を作り出す。15世紀か。胎土は白灰色で精良、焼成はやや不良である。

須恵器は鉢が数点出土している。73は口縁端部直下外面に横ナデによって２条の凹線をめぐらせる。胎土に径１mm以下の砂粒を多く含む。色調は暗青灰色で、焼成は良である。

輸入陶磁器は青磁の破片資料が数点検出されたのみである。72は外面に蓮弁文を施す龍泉窯系青磁椀である。横田・森田分類の青磁椀Ｉ－５ａに相当[4]。

なお、今回は図示できなかったが、この他に滑石製石鍋、釘形鉄製品が少量出土している。

C．その他主要遺構（第17図・第18図）

前２節を除く遺構からの出土遺物はコンテナ３箱分である。この内、ピットからの出土遺物などは細片が多く、器形全体を復元して図化できる遺物は少ない。本節では主な遺構から検出された遺物の内、特に遺構の性格や年代の判断に寄与すると思われるものについて報告する。

ＳＤ11　92は龍泉窯系青磁で、鎬文有蓋壺となるものか。やや灰色がかった青緑色の釉が底部付近までかけられている。元代、13～14世紀か。

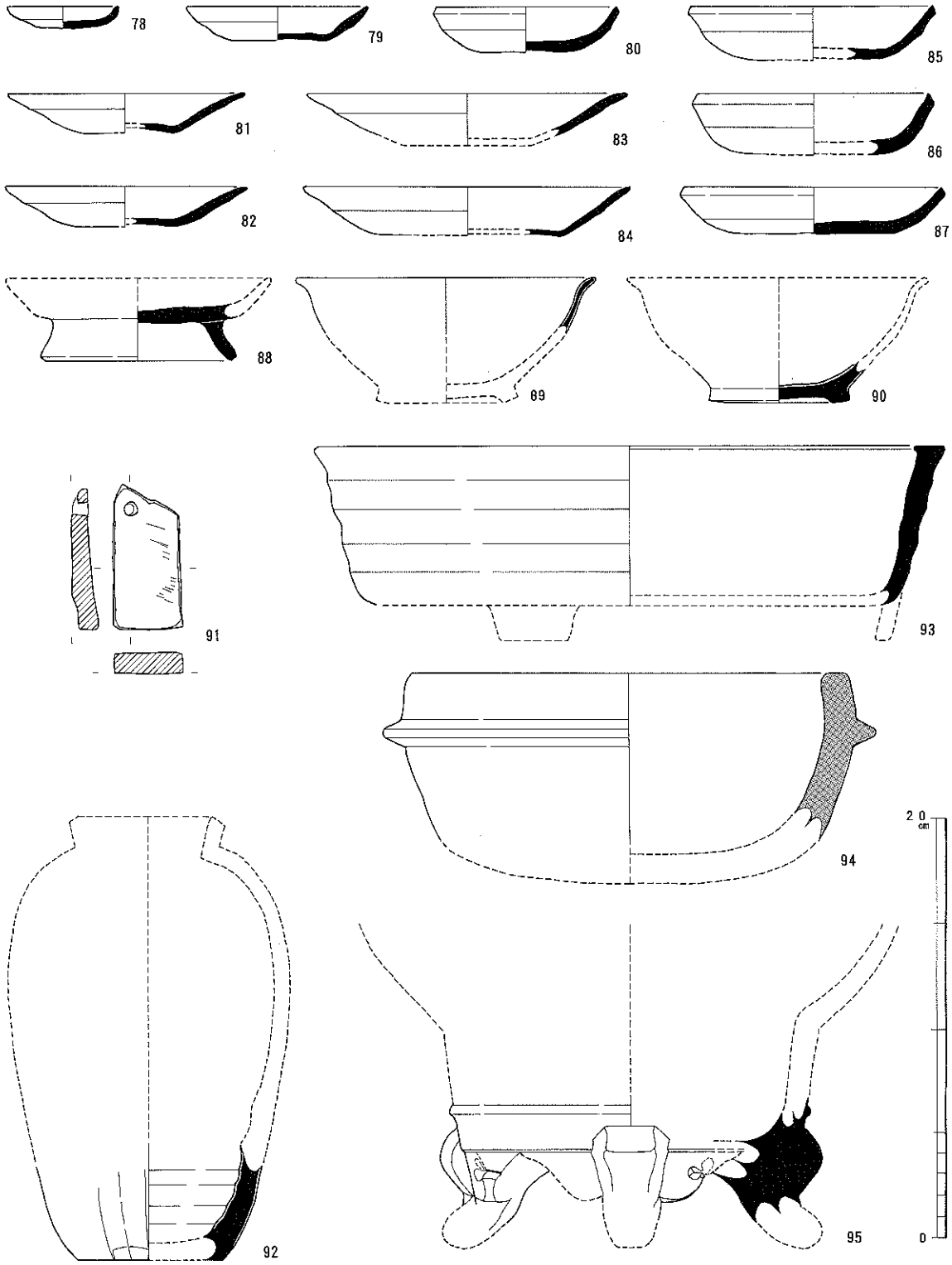
ＳＫ08　78は土師器のミニチュア皿である。内面に不定方向のナデを施し、口縁部内面を内湾させる。体部外面はわずかに外反し、浅い指頭圧痕が認められる。内面ナデ調整の際に、体部外面を押さえてナデの支点とした痕跡と思われる。胎土は精良で、色調は淡黄褐色を呈する。焼成は良である。91は砥石である。一端を切り落とし、鋭角を成す上部に円孔を穿つ。

ＳＫ09　96は信楽焼の摺鉢である。口縁部のつまみ出しが強く、内面には４条１単位の摺目をもつ。胎土に長石粒を多量に含み、色調は橙褐色。焼成は良である。15世紀。

ＳＫ10　98は信楽焼の摺鉢である。口縁部のつまみ出しが強く、内面には４条１単位の摺目をもつ。体部内面の底部際の摺目は使用によって擦り消されている。体部外面の底部際に指押さえと藤蔓弓の痕跡が認められる。胎土に長石粒を多量に含み、色調は橙褐色。焼成は良である。96とほぼ同形態を呈する。15世紀。

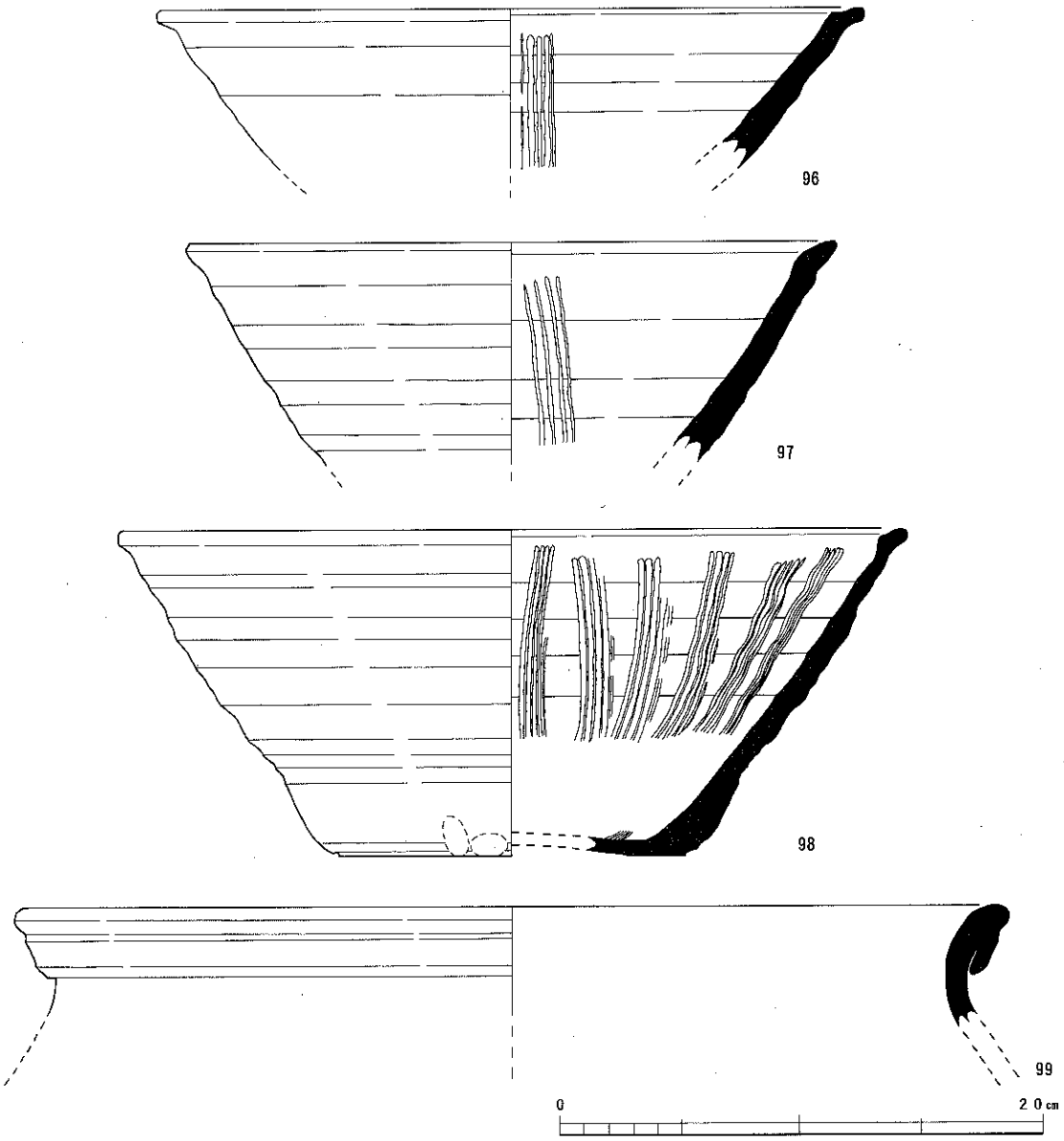
ＳＫ12　ＳＫ12から出土した土師器皿は径９㎝、径11㎝、径15㎝の３法量に大別できる。最も小さいもの(79)は、底部と体部の境に強い屈曲を持つ。同箇所の内面に強い横ナデを施すため、この部分の器壁は他に比して薄くなっている。口縁部内外面は外反させるが、口縁端部はつまみ上げられて直立気味である。径11㎝の皿（81・82）は79とほぼ同じ形態、調整痕跡をもつ。ただし、口縁部外面は強く横ナデされ、やや外反する。81は端部をつまみ上げるのに対し、82は口縁端部を丸く収める。径15㎝の皿（83・84）も79とほぼ同じ形態、調整痕跡をもつが、口縁部外面の横ナデは弱く、口縁端部を丸く収める。79～84は胎土に径１㎜以下の砂粒を若干含む。色調は80が黄褐色、他は淡黄褐色で、焼成は良である。これらは伊野氏分類Ｉａタイプに相当する。

ＳＸ07　80、85～87は土師器皿である。いずれも底部と体部の境に強い屈曲を持つ。内面は底部に一方向ナデを施した後、口縁部を横ナデし、内湾させる。口縁部外面は横ナデを施し、端部を面取りする。胎土に径１㎜以下の砂粒を若干含む。色調は黄褐色で、焼成は良である。88は土師器台付皿である。平底状の底部に、外方へ開く高台を貼り付ける。胎土に径１㎜以下の砂粒を多く含む。色調は黄褐色で、焼成は良である。97は信楽焼の摺鉢である。口縁部のつまみ出しが弱く、内面には４条１単位の摺目をもつ。胎土に長石粒を多量に含み、



第17図　出土遺物実測図
(78・91：SK08、79・81～84：SK12、80・85～90・93～95：SX07、92：SD11)

色調は淡橙褐色。焼成は良である。15世紀。99は信楽焼の甕である。ひしゃげた「N字」状縁帯外面に凹線を1条巡らせる。胎土に長石粒を多量に含む。焼き締め部分が脱落、変性している。色調は乳白色。焼成はやや不良である。15世紀。89は青磁椀である。体部は内湾す

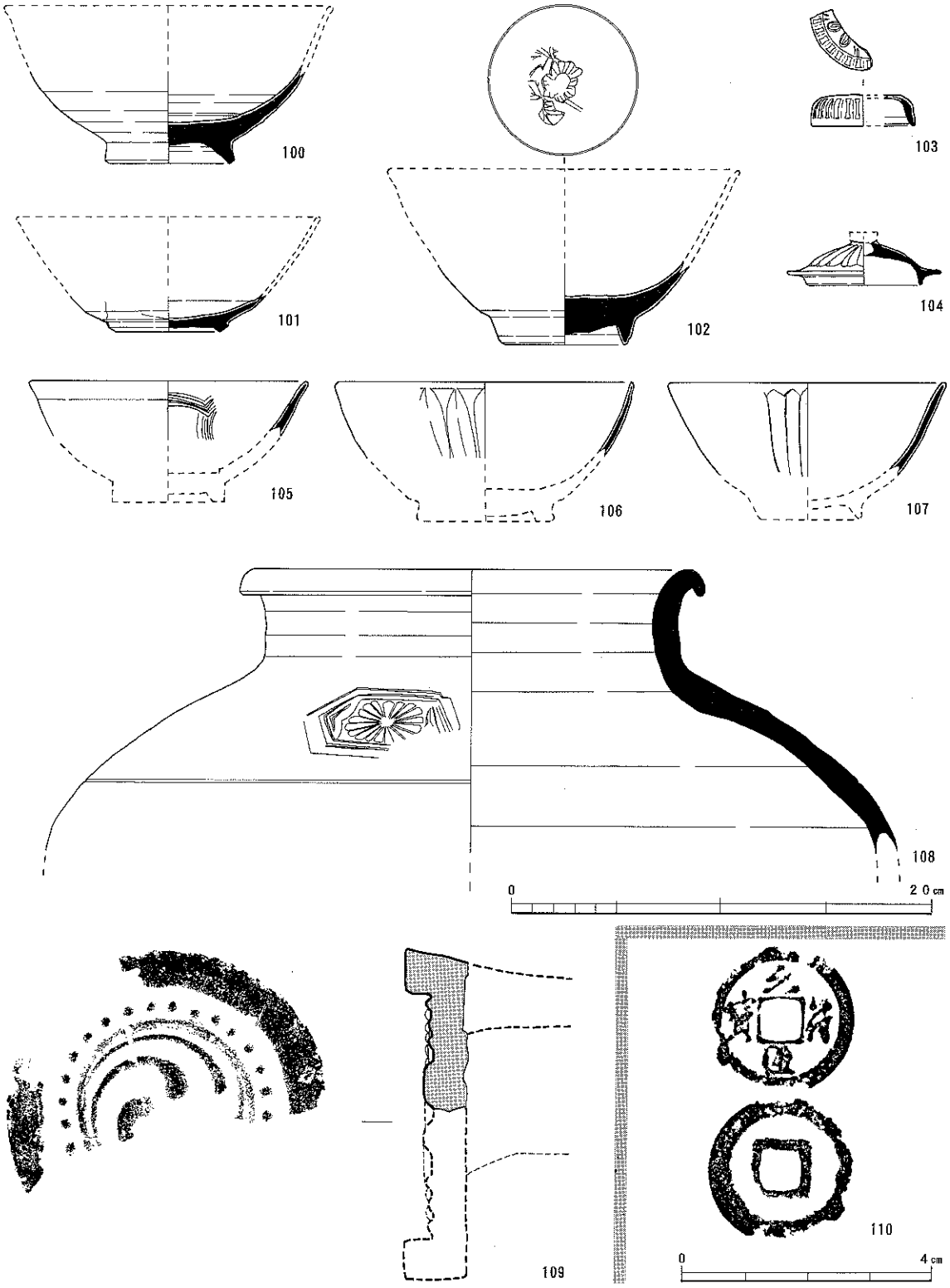


第18図　出土土器実測図
(96：SK09、97・99：SX07、98：SK10)

るが、口縁部は強く外反する。胎土は精良で、色調は灰褐色。焼成は良である。93は瓦質土器の浅鉢である。口縁部・体部内外面に横ナデを施す。体部外面には横ナデによって、3条の凹線が形成される。14世紀～15世紀。95は瓦質土器の風炉である。体部外面の下部に突帯を巡らせる。体部外面の縁辺には脚を貼り付ける。15世紀か。94は滑石製の石鍋である。口縁部の内外面ともに内湾し、推定される底径は、口径よりもやや小さくなる。色調は銀桃色である。14世紀か。

D．包含層（第19図）

包含層からはコンテナ７箱分の遺物が出土した。包含層遺物は土師器片が大部分を占めているが、これと共に輸入陶磁器片が多く検出された。そこで本節では、出土遺物について輸



第19図　包含層出土遺物実測図

入陶磁器を中心に報告する。

100・101は白磁椀である。100は高く直立した高台を持つ。底部内面見込みに段が存在する。釉は畳付部との境までかけられている。体部外面にはヘラ削りを施す。101は低い高台を持つ。底部内面見込みに段が存在する。釉の掛かり方は一様ではなく、釉がかけられる畳付部が存在する一方、釉がかけられない高台部もある。100・101ともに胎土は精良。色調は100が灰褐色、101は白灰色を呈する。焼成は良である。横田・森田編年Ⅱ期に相当。

102・105・106・107は龍泉窯系青磁椀である。105は口縁部が直立気味で、口縁端部はわずかに外反する。内面には片切り彫りの沈線が施されている。横田・森田分類の青磁椀Ⅰ－4類に該当。 106は口縁部～体部外面に細長い縞蓮弁文をもつ。口縁部は内湾する。胎土は精良、色調は白灰色を呈する。焼成は良である。南宋～元代。102は逆三角形状の低い高台をもつ。底部の器壁は極めて厚い。内部対面見込みに花紋様が施される。明代か。107は鎬のない細い蓮弁文をもつ。口縁部は直立する。胎土は精良で、色調は灰褐色。焼成は良である。明代15～16世紀か。

103は青白磁平型合子の蓋である。天井部に花文を浮き立たせる。

104は青白磁小壺の蓋である。鎬蓮弁文を施す。天井部の紐は欠落している。

108は肩部に菊印花文を施す壺である。胎土に長石粒を多量に含み、色調は灰褐色。焼成は良である。

瓦はコンテナ１箱分が出土した。うち軒丸瓦は１点のみであり、軒平瓦は検出されていない。109は三巴文を内区主文とする軒丸瓦である。外区内縁に珠文を密に施すが、珠文帯の外側圏線はみられない。外縁は直立縁である。復元直径約15㎝、色調は淡青灰色、硬質で、胎土に白色の砂粒を多く含む。

銭貨は１枚出土している。110は「元符通寶」（北宋、1098年）の小平銭である。書体は草書体である。外縁部が破損しているため、銭径は１ヶ所のみで計測可能で、約33.5㎜を測る。

Ⅳ. ま　と　め

今回の調査では11世紀末～12世紀初頭と14世紀を主とした、平安時代末期から江戸期にかけての遺構を検出した。このような中世を中心とした時期に、赤塚遺跡において集落跡が展開していたことを確認したのはこれが初めてであり、同時代に、中宇治と並んで栄えた木幡の一拠点として、赤塚一帯が機能していた事を明らかにした。

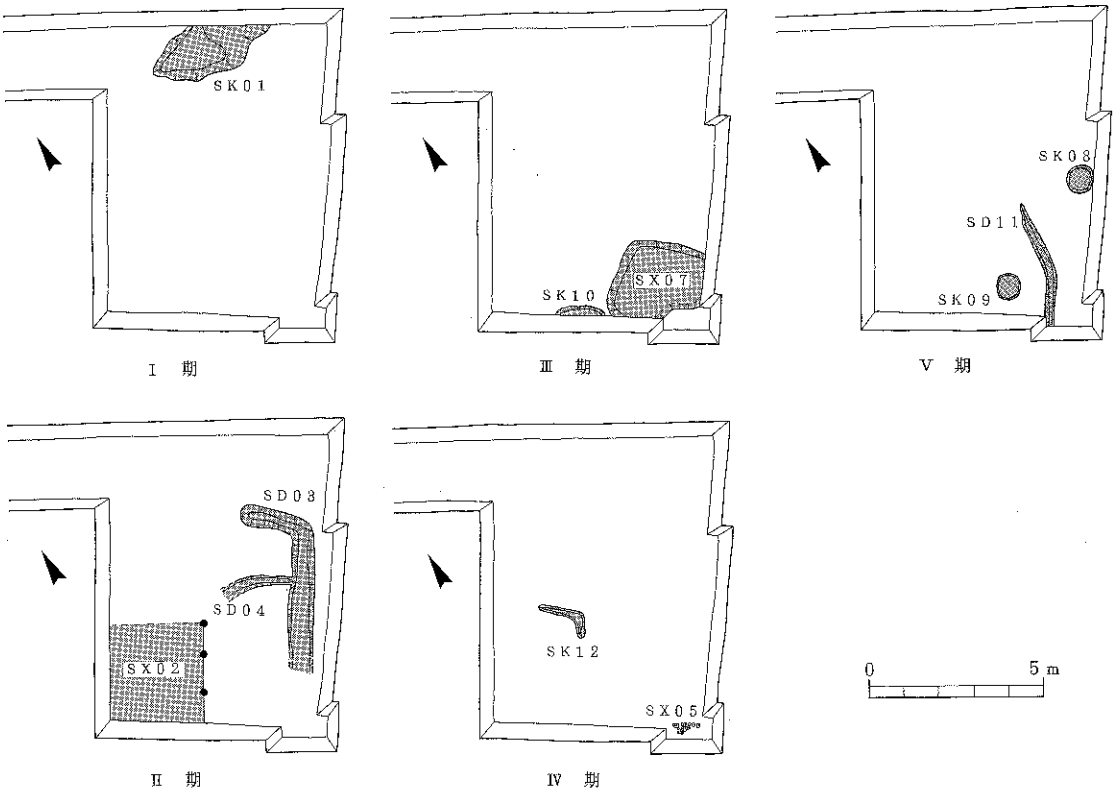
ここでは、前章までに報告した調査の概要を整理し、結びとしたい。

A．遺構の変遷

Ⅰ　期（11世紀末～12世紀初頭）　遺構としては、不正円形の土器廃棄土壙SK01を検出した。この中には砕片化した土師器皿や鍋類、瓦器、須恵器などが夥しく投棄されていた。これらは、明らかに生活痕跡として捉えられるものである。そのため、卑近な距離に建物が存在する事は疑いがない。また、これに伴って平坦地造成のための整地作業が行われている。

これらから、当該期において、急激に周辺整備が進められた状況をみることができる。これには、藤原道長の浄妙寺建立をはじめとする、摂関家やその社寺との関わりを背景とすることが推測できる。浄妙寺は、調査地から南南東に約400mの位置に立地している寺院で、藤原家累代の墓所である木幡墓の荒廃を嘆いた道長が、三昧を修めその霊を弔うために長保6年(1004)に建立した。時の栄華を誇った道長の意気込みからも窺えるように、当時は三昧堂を始めとし、多宝塔、鐘楼、僧坊などの諸堂に、大門、中門などの寺観を整えた荘厳な寺院であった。後に中世末の混乱に巻き込まれ、現在は灰塵に帰している。なお、浄妙寺跡は1966、1990年に発掘調査が行われており、三昧堂が三間四面堂であることを確認したほか、多宝塔の一部を検出するなど、その位置を確定している[5]。その周辺である赤塚開発の契機は、この浄妙寺の建立と発展に求められるものではないだろうか。今回の調査では、遺構と寺との関係を示す資料は得られなかったため、本遺構が寺の関係施設であるか、これとは別の集落遺跡であるかについては、今後の課題として残したが、青白磁、青磁類を豊富に持つことや、土師皿の多量使用状況などを考え合わせて見れば、一般集落に収まらない様相を持ち合わせていると言えよう。

Ⅱ　期（14世紀）　区画溝と考えられるＳＤ03や、構造物となる可能性のある石列ＳＸ02などがある。溝ＳＤ03は、調査地の東面に通る市道停車場道とはちょうど平行位置にある。この道路は古来、三十番神街道と呼ばれる街道で、六地蔵から石田にかけて、河原の分岐点を経ることなく近江・大和へ向かうことができるルートであり、中世以降に幹線的役割を果たすようになった南北短絡路と予想されている[6]。このような位置関係から溝ＳＤ03は、こ



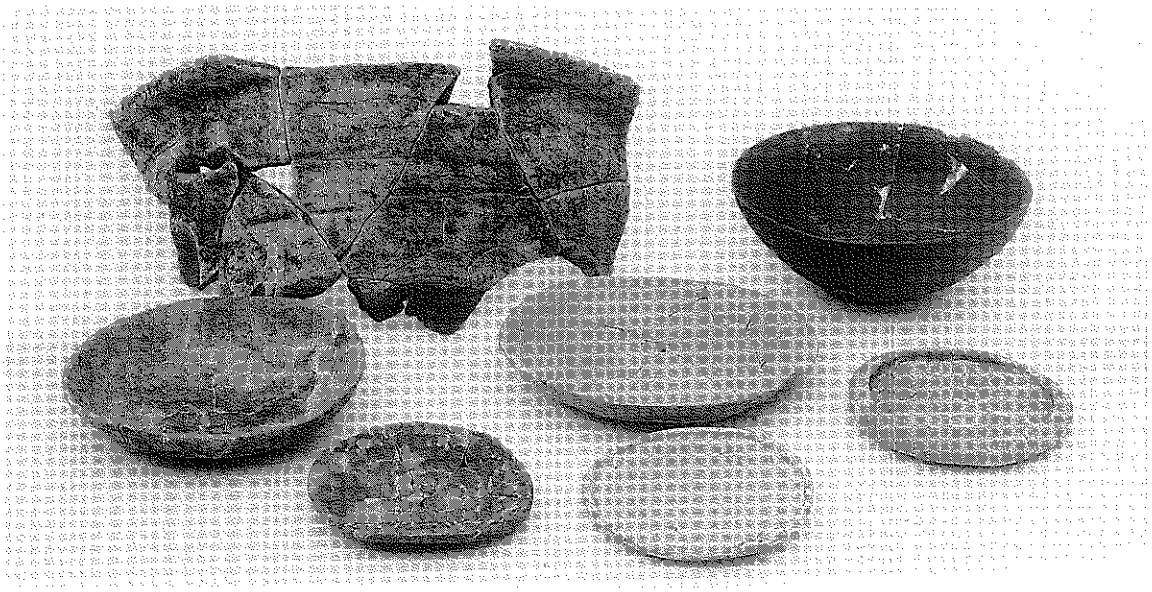
第20図　遺構変遷図

の街道とその内部を隔てる溝と考えられ、石列ＳＸ02は小規模な建物となり、これらは１軒の宅地跡になるものと思われる。建物の規模や様式は明らかではないため、それらをイメージするために、同時代の風景を伝える一遍上人絵伝を参考にしたい。同絵伝に描かれる大寺院の周囲には、寺域と築地で隔てられたところに門前町のにぎわいや、ひっそりとした独立僧坊がしばしば描かれている。今回検出した遺構が、これらに相当するものかについては検討資料が不足するが、今後の調査の中で明らかとなってこよう。また、少量ではあるが瓦が出土している。この建物に伴うものとするには出土量が少なく、付近に瓦葺きの別建物が存在していた可能性が高いと考えている。

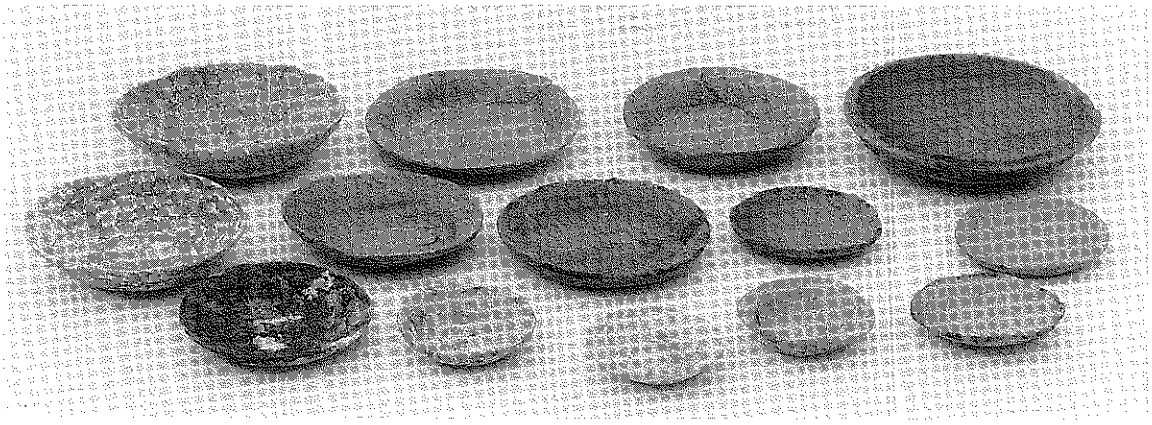
Ⅲ　期（15世紀）　落ち込みＳＸ07、土壙ＳＫ10がある。14世紀の宅地が完全に廃棄されたことが、区画溝ＳＤ03が壊されていることで分かる。この段階では、完形に近い土器類はあるものの、生活痕跡は稀薄になる。

Ⅳ　期（16世紀）　石列ＳＸ05、土壙ＳＫ12がある。石列ＳＸ05は前面の道に直交することを考えれば、祠のような小規模建物の基礎と考えて良いかもしれない。前段階同様、生活活動の稀薄な状況が続いたようである。

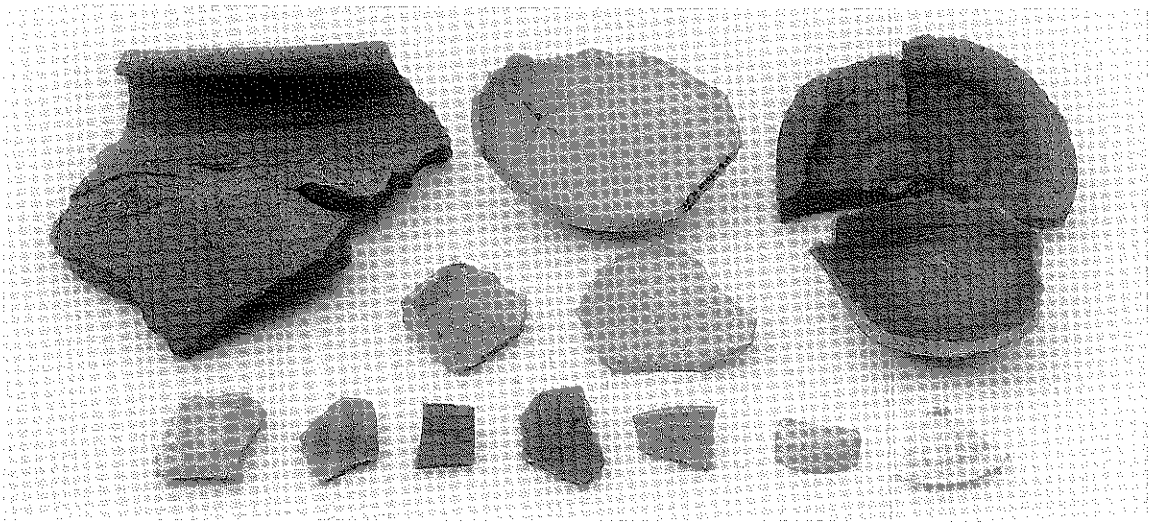
Ⅴ　期（近世～現代）　土壙ＳＫ08、溝ＳＤ11、土壙ＳＫ09がある。この段階では、畑として耕地化されたらしく、遺構や遺物の稀薄さからも肯首出来る状況にある。なお、近代においては茶畑として利用されていたことが、明治期の仮製地図から確認できる。



第21図　ＳＫ01出土土器



第22図　ＳＤ03出土土器



第23図　包含層出土陶器、陶磁器、瓦

B．おわりに

木幡は、浄妙寺にとどまらず、平安時代から院政期にかけて、数々の藤原摂関家の別業が営まれたほか、鎌倉時代以降には藤原教家の発願による木幡観音寺（1225・52～）や、木幡流専修念仏の拠点であった尊勝寺、不焼地蔵で著名な能化院などの諸寺が営まれることを見ても、大変な活況を呈していたといえる。これに加え交通の要衝としても、重要な役割を担っていた。今後、木幡地域の歴史が明らかとなることは、宇治の歴史にとどまらず当該期政治史の理解に直接影響を及ぼすものでもあり、その重要性が今後さらに増すものと考えられる。

『栄華物語』巻十五別紙　寛弘二年十月十九日の条に、浄妙寺に関する次の様な一節がある。

「この山の頂きを平らげさせ給ひて、高き石をば削り、短き所をば埋めさせ給ひなどして、やがて三昧堂を建てさせ給ふ。僧坊を左右に建てさせ給ひ、中に馬道をあけて、十二人の僧を住まわせ給ひ、夏冬の法服を賜ひ、やがてその邊たりの村、一つさととなさせ給て、水清く澄み、煙絶えずして、事の便を賜はせてはぐくみかへりみさせ給ふ程に、よろずの人ききつぎ棲み住す。」

今回の赤塚遺跡における成果は、まさにこの情景を彷彿とさせるものである。今後の更なる調査の進展が望まれる。

註

1）猿向敏一　「赤塚遺跡発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第14集　宇治市教育委員会　1989

2）伊野近富　「「かわらけ」考」『京都府埋蔵文化財論集』第１集　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　1987

3）近江俊秀　「大和型瓦器椀の編年と実年代の再検討」『古代文化』第43巻第10号　1991

4）横田賢次郎　森田勉　「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集４』　九州歴史資料館　1978

5）荒川史、浜中邦弘、西山恵子、杉山信三　『浄妙寺跡発掘調査報告』　宇治市教育委員会　1992

6）守屋茂、若原英式　「木幡」『宇治市史』第５巻　宇治市役所　1979

B．木幡古墳群 － 南山1－1，南山畑19他 － 発掘調査概要

Ⅰ．は　じ　め　に

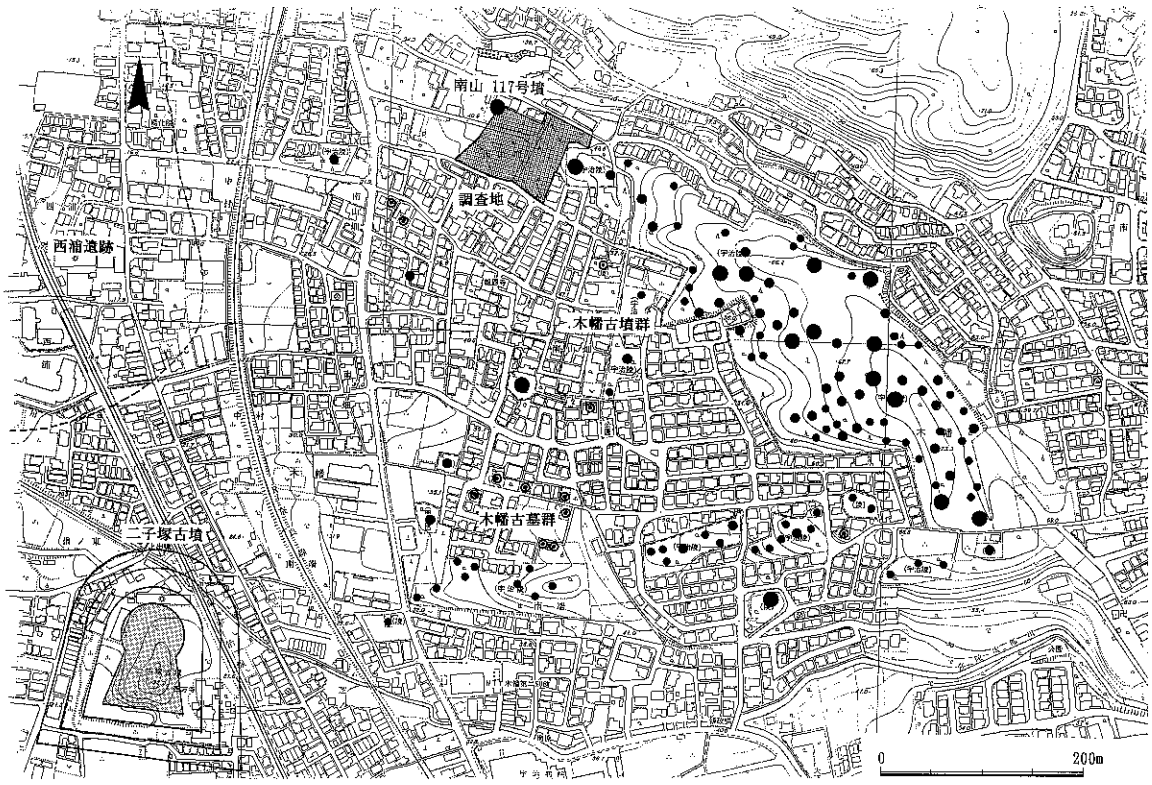
A．調査の経過

本報告は、宇治市木幡南山1-1、南山畑19、20、21、22、23各々の一部における共同住宅建設に先だって実施した、木幡古墳群発掘調査成果の概要である。

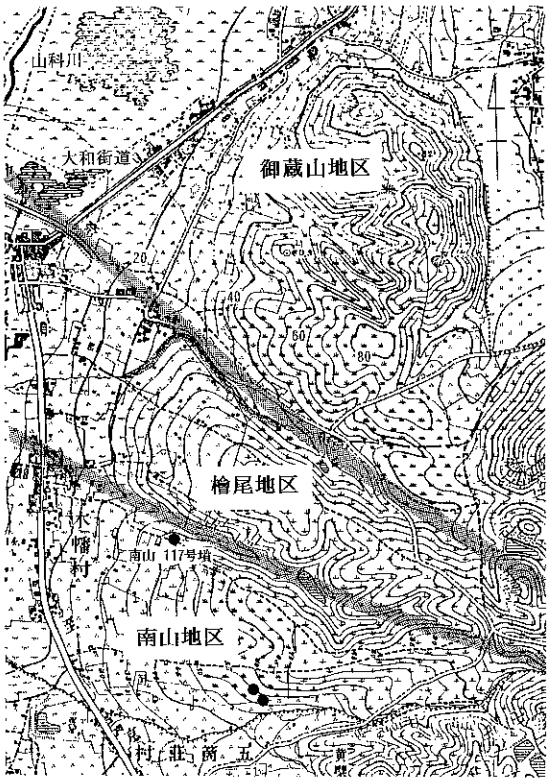
宇治市の北端に近い木幡地域は、ＪＲ奈良線を挟んで東側は醍醐山地から派生する標高100～10mの丘陵が、西側に標高10m～０mの平野が広がる土地である。かつて平野の西側には、山城地域の広大な面積を占めた遊水池・巨椋池が存在していた。

木幡地域は古墳時代後期、全長112mの前方後円墳・二子塚古墳の造営を峻矢に一躍歴史の表舞台に登場する。眼下に巨椋池を見下ろす木幡丘陵に営まれた木幡古墳群は、これに前後して造営が開始された山城地方最大の古墳群で、120基ほどの小円墳の総称である。

これらは、現在でも至る所でこんもりとした緑地帯として見ることができる。しかし、市内でも比較的開発の手が早く延びたこの地域にあって、これだけの古墳が今に残されているのは、平安時代後期にこの世の権力を一手に握った藤原一門の墓域と重なっていたため、明治10年に宮内庁により古墳群も含めた一帯が陵墓として治定されたためである。このため遺



第１図　調査地の位置



第２図　木幡古墳群地区別図

跡名を呼称する際は、古墳については木幡古墳群と呼び、墳墓については木幡墳墓群としている。

今回の調査地は宇治陵第29号である円墳に隣接する土地であり、かつ古墳群の中でも一番古墳が集中する尾根筋上にあたるが、全域がほぼ平坦化されていた。そのため試掘によって遺構の包蔵状況を把握したうえで、調査にとりかかることにした。

調査地の現況は造園用の植木園として利用されており、樹木の抜根の後に、調査を開始した。調査を進めたところ、古墳を１基確認したため、写真撮影と測量により記録を作成し、地元町内会への現地説明会を行って調査を終了した。調査期間は平成８年11月20日から平成９年１月31日までで、調査面積は440㎡である。

B．発見古墳の名称について

木幡古墳群が木幡一帯の丘陵に広く分布することは先述したが、その分布については地形から地区分けが可能である。木幡丘陵は北側を山科川、南側は弥陀次郎川に挟まれる地域と考えてよいが、地形的にはこの間に２つの解析谷が存在する。これらは御蔵山・赤塚・御園地域、檜尾・南山・北山畑地域、南山・南山畑・中村地域の各地域間を隔てている。そこで、この３支丘陵に分布している古墳群を、各々北より御蔵山地区、檜尾地区、南山地区と分け、新たに発見された古墳については、その地区内で番号を付したものを名称とすることにしたい。

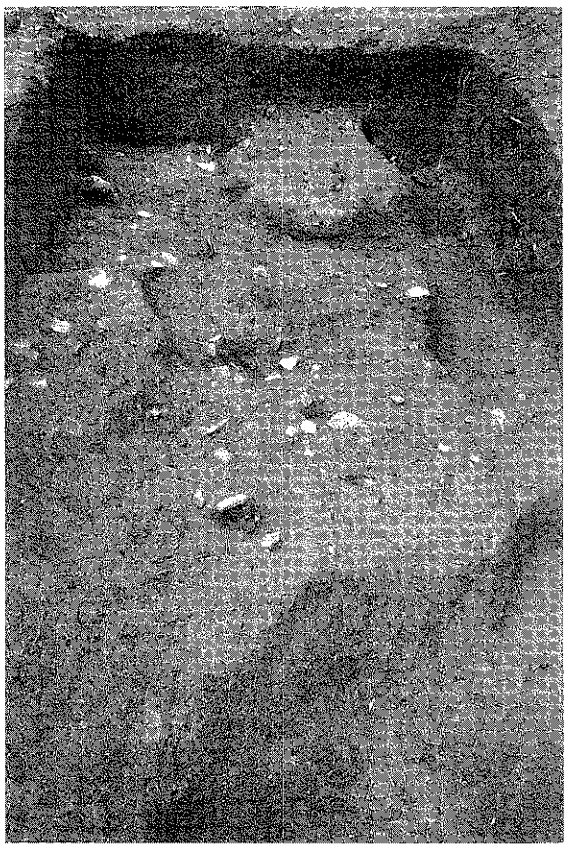
今回の発見古墳を含む南山地区には、114基と３地区中最も多くの古墳が集中している。また、『宇治市遺跡地図』にドットとして記載されている古墳以外にも、昭和38年、財団法人古代学協会による発掘調査によって発見された古墳が知られている。この調査成果については、平成５年に山田邦和氏によって当時の調査終了報告を基に紹介がなされている[1]。それによると、宇治陵第23号に西接する宇治市木幡南山７番地において、須恵器を副葬する木棺直葬らしい痕跡と横穴式石室の一部を確認したと結ばれている。これらを加えると、今回発見した古墳は同地区で117番目に確認されたこととなるため、これを南山117号墳と呼称することとしたい。

Ⅱ. 検 出 遺 構

A. 試掘の結果

試掘では主に、円墳である宇治陵第29号墓付近（B、C、Dトレンチ）と、尾根筋に当たる地点（A、Gトレンチ）を中心に7か所のトレンチを設定した。宇治陵第29号墓付近では、円墳の裾が調査地内まで延長してくるか否かを、全体としては地上の隆起に現れない古墳・墳墓の発見を主眼にした。その結果、Aトレンチにおいては埴輪・須恵器片を検出したほか、Cトレンチでは溝状の落ち込みを確認するなどの遺構、遺物を確認したため、これらの内容を確認する形に本調査のトレンチを設定することとした。以下に試掘トレンチでの調査結果について述べたい。

Aトレンチ　調査地内を貫く南山支丘陵の稜線上に設定した長さ38m×幅1.2mのトレンチで、東西端で2mに近い比高差がある。東端から尾根を下っていく方向で掘削を始めた。土層層序はおおよその地点で黒褐色土（造園置き土）、茶褐色土（近代表土）、暗赤褐色土（旧表土）、赤褐色土の地山となり、地山までの深さはおよそ0.6mほどであった。



第3図　試掘Aトレンチ埴輪出土状況（東から）

第4図　試掘Cトレンチ全景（西から）

掘削開始から28mの地点までは顕著な遺物、遺構とも検出されなかったが、それ以西に進むと茶褐色土中に埴輪片が含まれ始めた。茶褐色土上面で掘削を止め精査を行ったところ、西に向けて土色が暗茶褐色に変化し、そこには須恵器・埴輪の小片がたくさん含まれていた。そのためこれを古墳の周濠の一部であると判断し、本調査に移行するため一時掘削作業を中止した。

Bトレンチ　長さ9.0m×幅1.2mの円墳北側に設定したトレンチである。この地点は、周囲の等高線が不自然に回っているように、現代造園の置き土が0.7mと厚く、赤褐色粘質土、黄褐色粘質土、礫を多量に含む黄褐色土の順で堆積していた。深さ1.8mまで掘削を行った。赤褐色粘質土以下を地山と考えてよく、遺物は検出しなかった。置き土直下で地山であることから、この付近は植木園の造園より以前に切り土が行われたことが伺われた。

Cトレンチ　長さ10.0m×幅1.2mの円墳西側北寄に設定したトレンチである。東端部では、0.2mほどの置き土を除去した直下で、礫を含む黄褐色土が露出し、この地点でも切り土が及んでいることがわかった。しかしその後、西に掘削を進めたところ、礫を含む黄褐色土が溝状に大きく落ち込む地点を検出した。この落ち込みは緩やかなU字状を呈し、埋土は、赤褐色粘質土と黄褐色粘質土が互層となって堆積していた。埋土には、遺物は含まれなかった。そこで、この地点についても、落ち込みの性格を確認するため、本調査へ移行することとした。

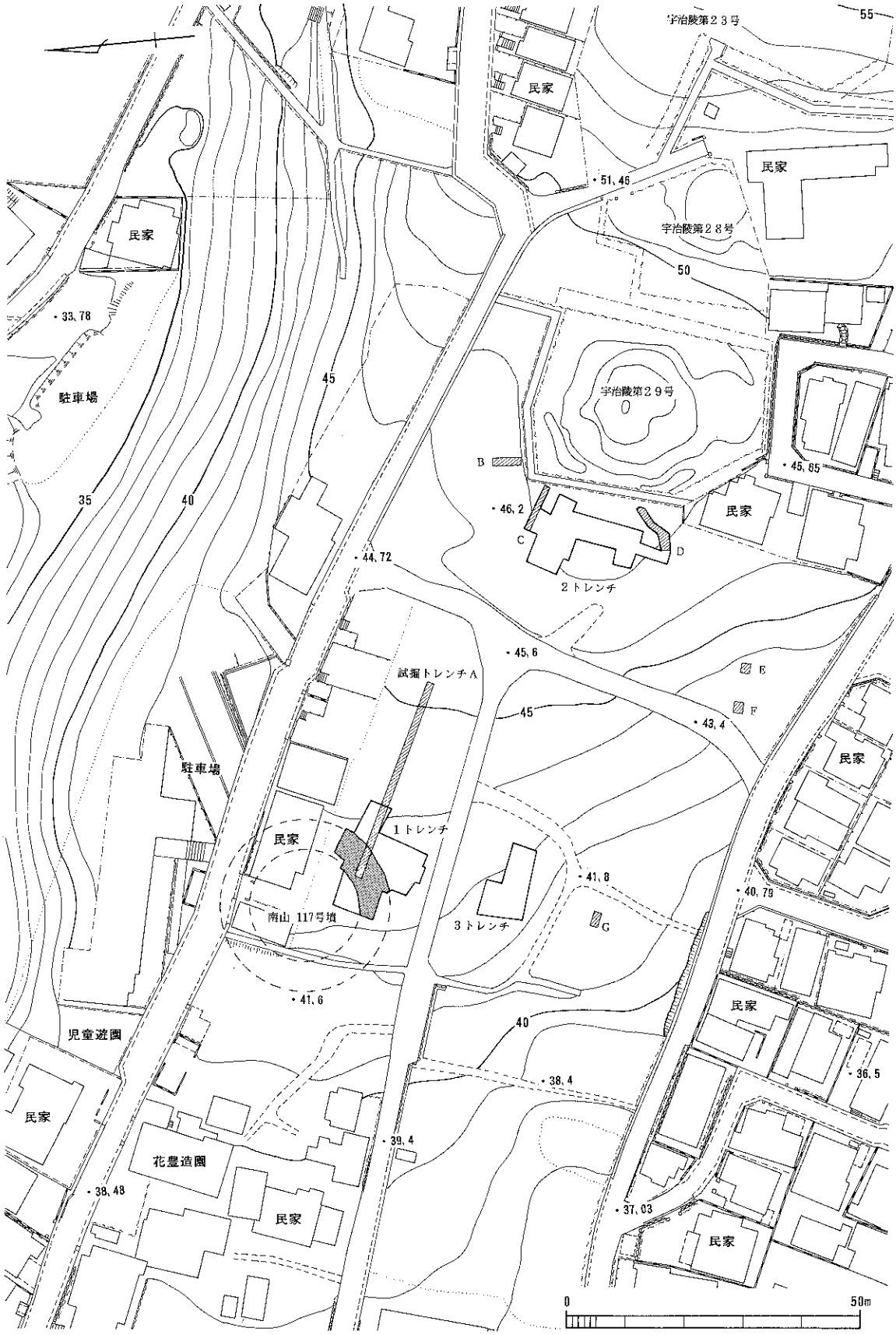
Dトレンチ　長さ8.4m×幅1.2mの円墳西側南寄に設定したトレンチである。0.3mの置き土を除去した直下に赤褐色粘質土の地山があらわれそのまま緩やかに傾斜するのみで、この地点についても遺構は確認されなかった。

E・Fトレンチ　おのおのが長さ6.0m×幅1.2m、長さ4.0m×幅1.2mのトレンチで、調査地東南端に設定した。丘陵南側斜面ではあるが、0.5mの置き土の直下で赤褐色粘質土の地山を検出した。Fトレンチ置き土直下で須恵器細片が1片出土したが、Dトレンチでの状況と考え合わせても、顕著な遺構が存在しないものと判断した。

Gトレンチ　長さ2.0m×幅1.2mのトレンチで調査地西南端に設定した。E・Fトレンチと同様、丘陵南側斜面に当たるが、0.5mの置き土下で赤褐色土の地山を確認したのみで、遺構・遺物とも検出しなかった。

B．調査の結果

以上の試掘成果を踏まえ、3か所にトレンチを設定した。1、3トレンチは古墳の全容を、2トレンチは、溝状の落ち込みの性格を確認することを目的とした。その結果、1トレンチでは直径18mの円墳1基を新たに発見し、埴輪を伴うことが確認される成果が得られた。また2、3トレンチでは、結果として遺構の検出はなかった。


宇治陵第２３号
55
民家
民家
51.46
宇治陵第２８号
50
民家
33.78
駐車場
45
宇治陵第２９号
B
45.65
35
40
46.2
民家
C
D
44.72
２トレンチ
45.6
試掘トレンチＡ
E
F
45
43.4
民家
駐車場
１トレンチ
民家
41.8
40.79
南山 117号墳
３トレンチ
G
41.6
民家
児童遊園
40
36.5
38.4
民家
39.4
花豊造園
38.48
民家
37.03
民家
0
50m

第５図　トレンチ配置図

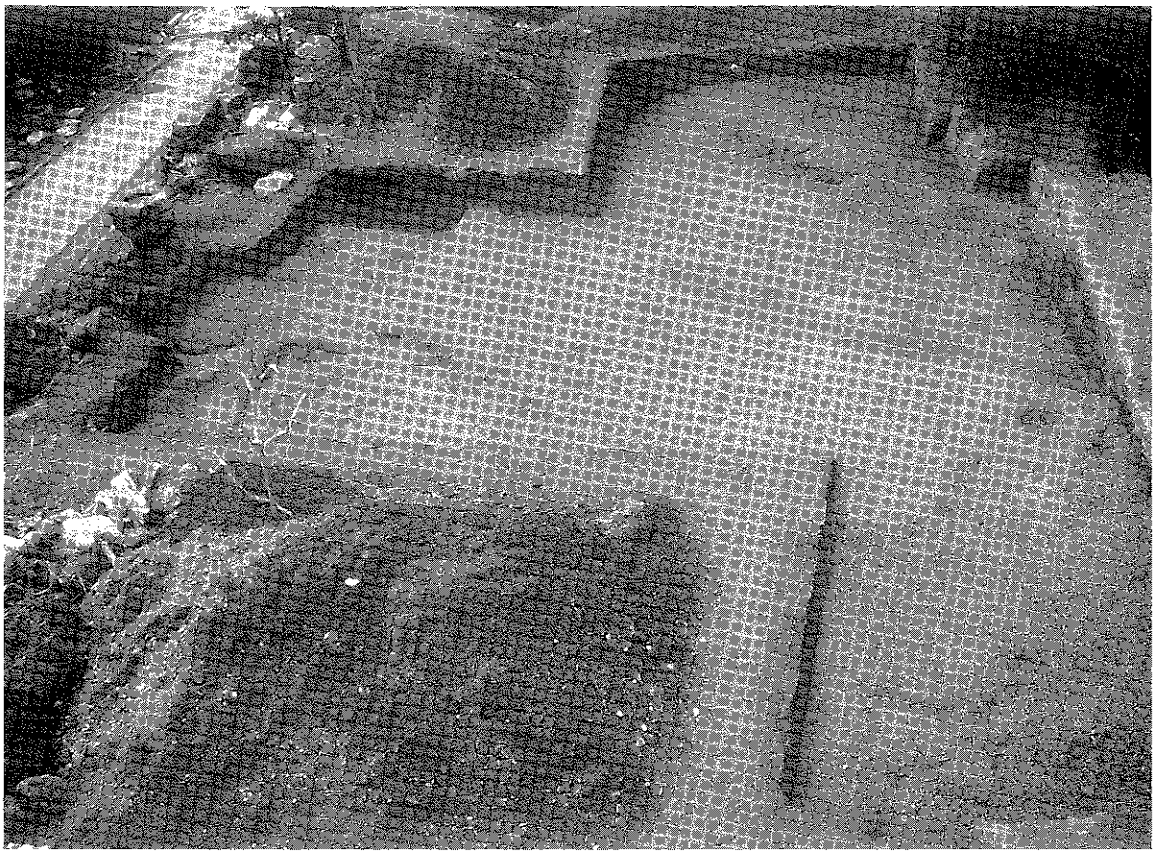
以下では各トレンチの説明を行いたい。

a．1トレンチ

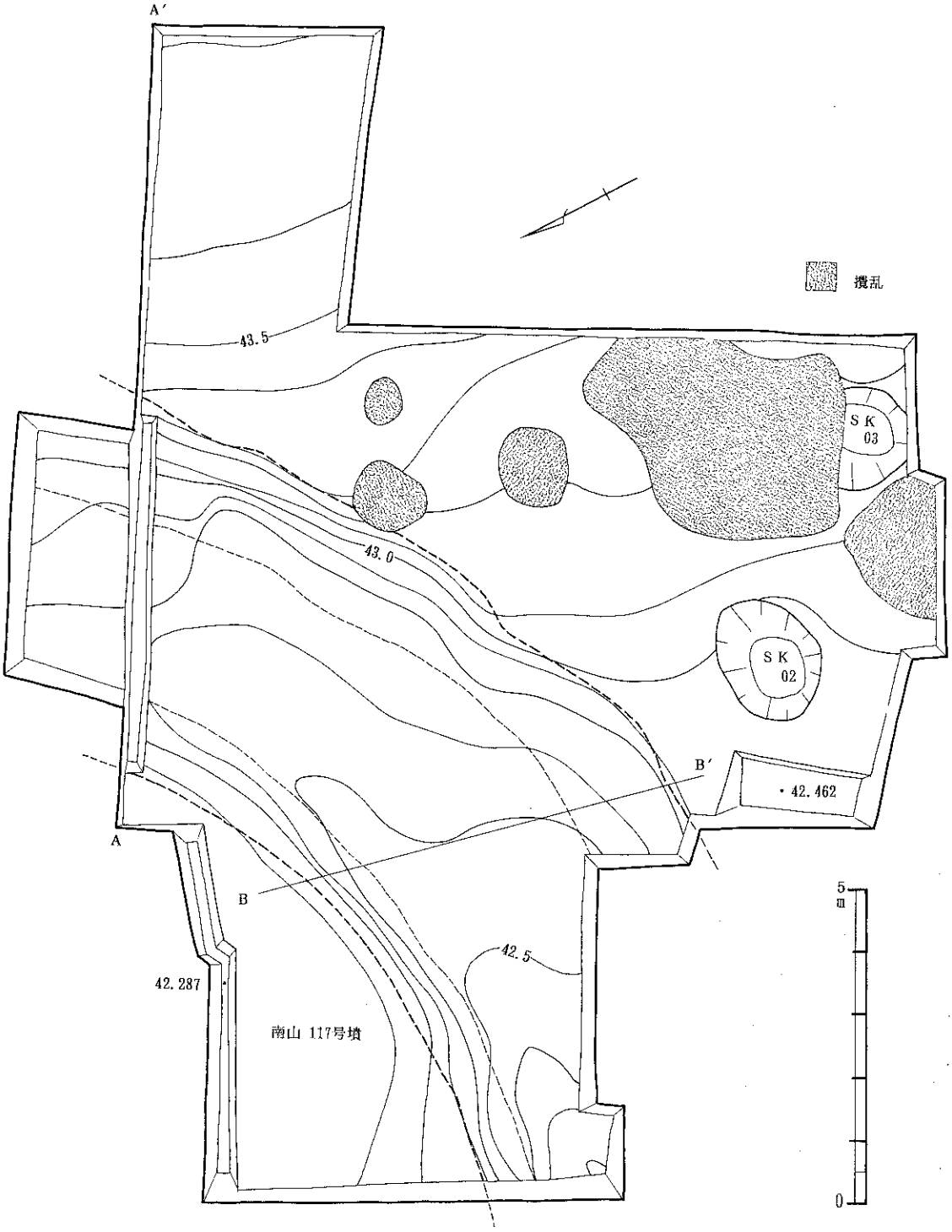
試掘Aトレンチでは周濠の一部をとらえたにとどまり、古墳本体である墳丘の位置、および規模については確認できなかった。そのため、調査地西端部において広範囲にトレンチを設定することにしたが、調査地中央の舗装道路を隔てたために1、3の2つのトレンチに分けることとなった。

植木の移動後、掘削は1トレンチから開始することにしたが、ここでは高さ6m近くもある植木の根巻作業が行われることもあったため、至る所で地山まで及ぶ大きな攪乱を受けていた。この攪乱土と表土である置き土を除去したところ、トレンチ全体に暗灰色で埴輪を多く含む包含層が現れた。一部で断ち割りを行った結果10cmほど下層で地山である赤褐色土の存在が確認でき、ここが遺構検出面であることが判断できた。そこで、遺物を取り上げながら包含層を除去し、赤褐色土面で精査を行ったところ、調査地北西部を中心として円弧を描く周濠の輪郭が確認できた。

南山117号墳　墳形は、直径18mの円墳と考えられる。全面積の約15%を検出した。調査地外部分で造り出しの付く可能性はあるが、木幡古墳群の構成を見た上では前方後円墳にな



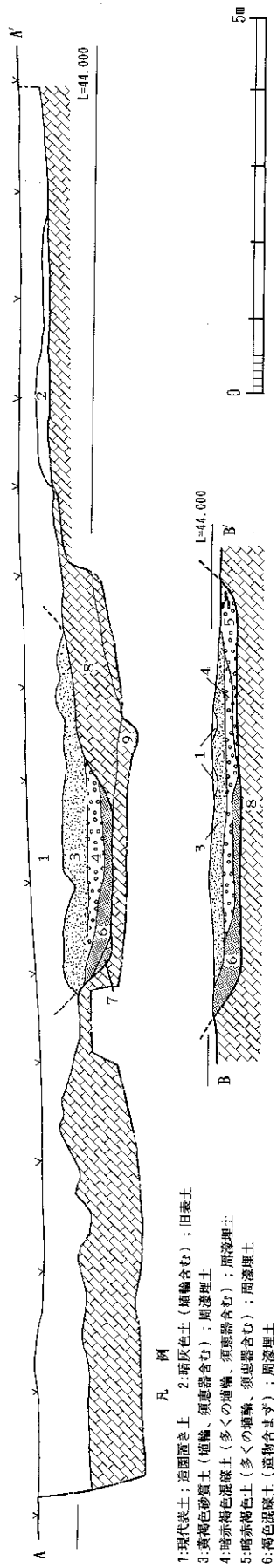
第6図　1トレンチ全景写真（東から）



第7図　1トレンチ実測図

る可能性は極めて低い。幅5.3mの周濠を持つ。墳丘中央は、ちょうど尾根の中心線上に位置する。封土は、地山以上は完全に失われており、築造方法については不明である。なお、葺石は見られない。

主体部構造については、これに関する遺構や構造部材を検出することはなかった。また、周囲に石室材の露出なども見られなかったため、主体部については全く手掛かりを得られな



第８図　１トレンチ断面図

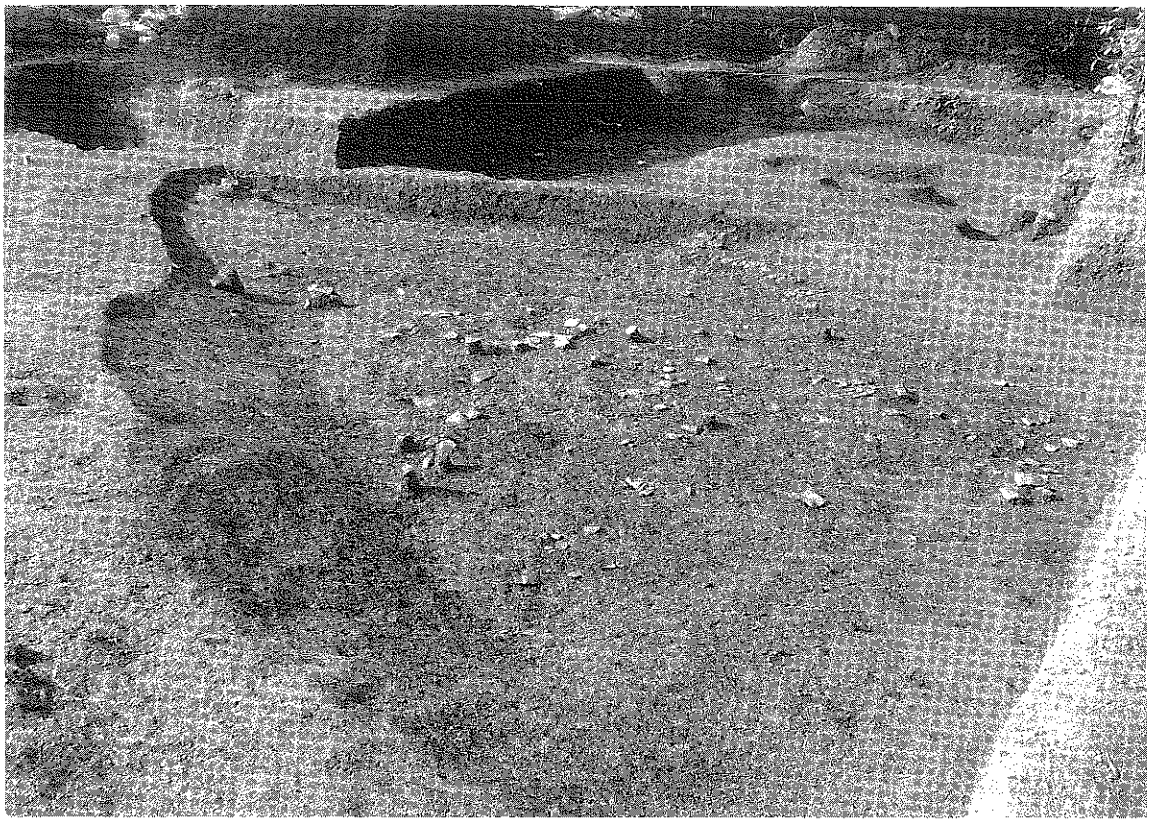
かったといってよい。

周濠は全周の約1/6を検出した。深さは残存部平均で約0.5ｍである。また古墳は丘陵斜面に位置するため、周濠底部は西側ほど低くなっている。周濠埋土は大きくは３層に分層できた（第８図）。層序は、上層より細片化した埴輪・須恵器片を含む黄褐色砂質土、埴輪、須恵器片などを多く含む暗赤褐色土、遺物を含まない褐色土である。最下層は自然堆積層と考えられる。中層である暗赤褐色土中の埴輪片には底部片も含まれている。この層に含まれる埴輪は比較的各個体片がまとまりをもって出土しており、それらの多くは接合した。中世羽釜片が含まれる。この上層である黄褐色砂質土に含まれる埴輪・須恵器片とは接合関係があるが、黄褐色砂質土中の埴輪片相互は接合しないものがほとんどであった。また、副葬品と考えられる遺物については、須恵器小片にその可能性が考えられる程度であった。

埴輪の出土状況については、原位置を保つものはなく、すべて周濠内に転落した状態で検出した。墳丘裾部でも据え付け痕の有無の確認を行ったが、その痕跡は見られなかった。また、数量的に見て埴輪が墳丘各段を囲繞していたとは考えにくいため、埴輪は墳頂部に並べられていたものと考えている。各埴輪の出土分布については第Ⅳ章で述べることにしたい。

土壙ＳＫ02　直径1.4ｍの円形土壙で深さは0.3ｍである。埋土が褐色土のため攪乱とは明瞭に区別できる。埴輪片を含んでいるが、上層攪乱時の混入で、時期が分かる遺物はない。

土壙ＳＫ03　直径約１ｍの円形土壙で、深さは約0.4ｍである。埋土は暗赤褐色土で、７世紀初頭ごろの須恵器長脛壺が１個体と、埴輪片が出土している。土壙の断面形態は摺鉢状で、須恵器も完形ではないことから土壙墓とは考えがたい。



第９図　周濠内４層（暗赤褐色土）遺物出土状況（北東から）

ｂ．２トレンチ

Ｃトレンチを南側へ拡張する形でトレンチを設定したが、結果として遺構は検出しなかった。土層の状況は、どの地点でもおおよそ0.2ｍの造園置き土直下で赤褐色粘質土の地山が、これをさらに0.2ｍ掘り下げると小礫の混じる黄褐色土が露出した。Ｃトレンチで検出した溝状の落ち込みは、地山層より下層で形成された自然地形と考えてよいもので、北へ傾斜する地形の一部が大きくくぼむような形となった。埋土も赤褐色粘質土、小礫の混じる黄褐色土であり地山層と一致する。木幡近辺の低丘陵の地質は大阪層群であり、周辺地形が形成される際の堆積作用によるものかと考えている。なお、２トレンチ全体において遺物の出土はなかった。

ｃ．３トレンチ

南山117号墳の範囲が、３トレンチの地点まで及ぶ可能性があったことから掘削を行った。その結果、南山117号墳は１トレンチ内に収まることが分かり、この他の遺構についても検出しなかった。埋土は、上層から0.5ｍの造園置き土、0.1ｍの暗褐色土、赤褐色土（地山）の順であった。ここで検出した暗褐色土は、１トレンチで検出した暗灰色土と同じ性格のものと考えられるが、古墳とはこれ程近い距離にもかかわらず埴輪、須恵器ともにまったく出土しなかった。

Ⅳ. 出 土 遺 物

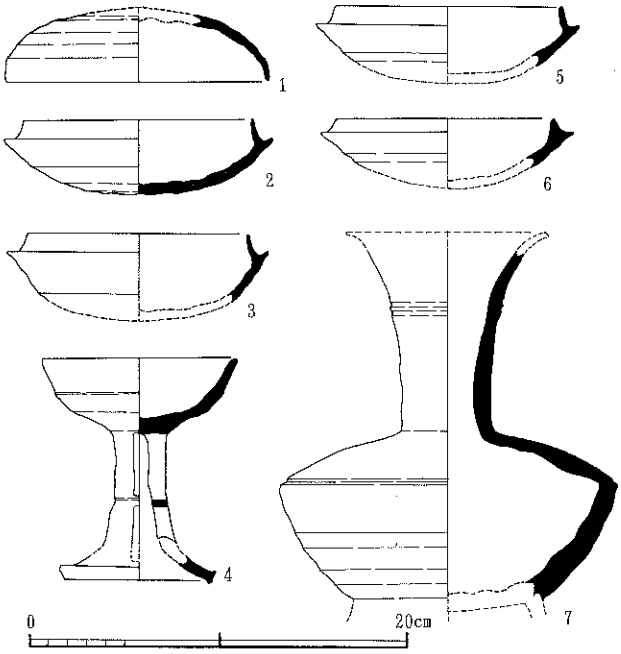
今回の調査で出土した遺物は、埴輪類と須恵器、土師器片があり、出土総量は整理箱にして約10箱である。多くが南山117号墳に伴うもので、周濠内より出土している。また、全出土遺物のなかでも埴輪類が約90%を占め、須恵器は少量である。これらは古墳時代後期中頃に位置付けられる。なお、周濠内には若干の中世土師器片があるが、図化可能なものがないためここでは割愛する。以下にそれぞれの説明を行なうこととする。

A. 南山117号墳

古墳の副葬品に関しては、今回の調査ではほとんど出土がなく、わずかに須恵器があるのみであった。この他には埴輪類がある。埴輪類については、原位置をとどめるものはなかったものの、一定量の資料は得られた。種類としては、円筒埴輪類（円筒埴輪、朝顔形埴輪）と形象埴輪類がある。

須 恵 器 杯（身、蓋）、高杯、甕、壺、器台がある。細片化が著しく、残存率が50%を上回る個体はない。このうち、図化可能なものは掲載するように努めた。

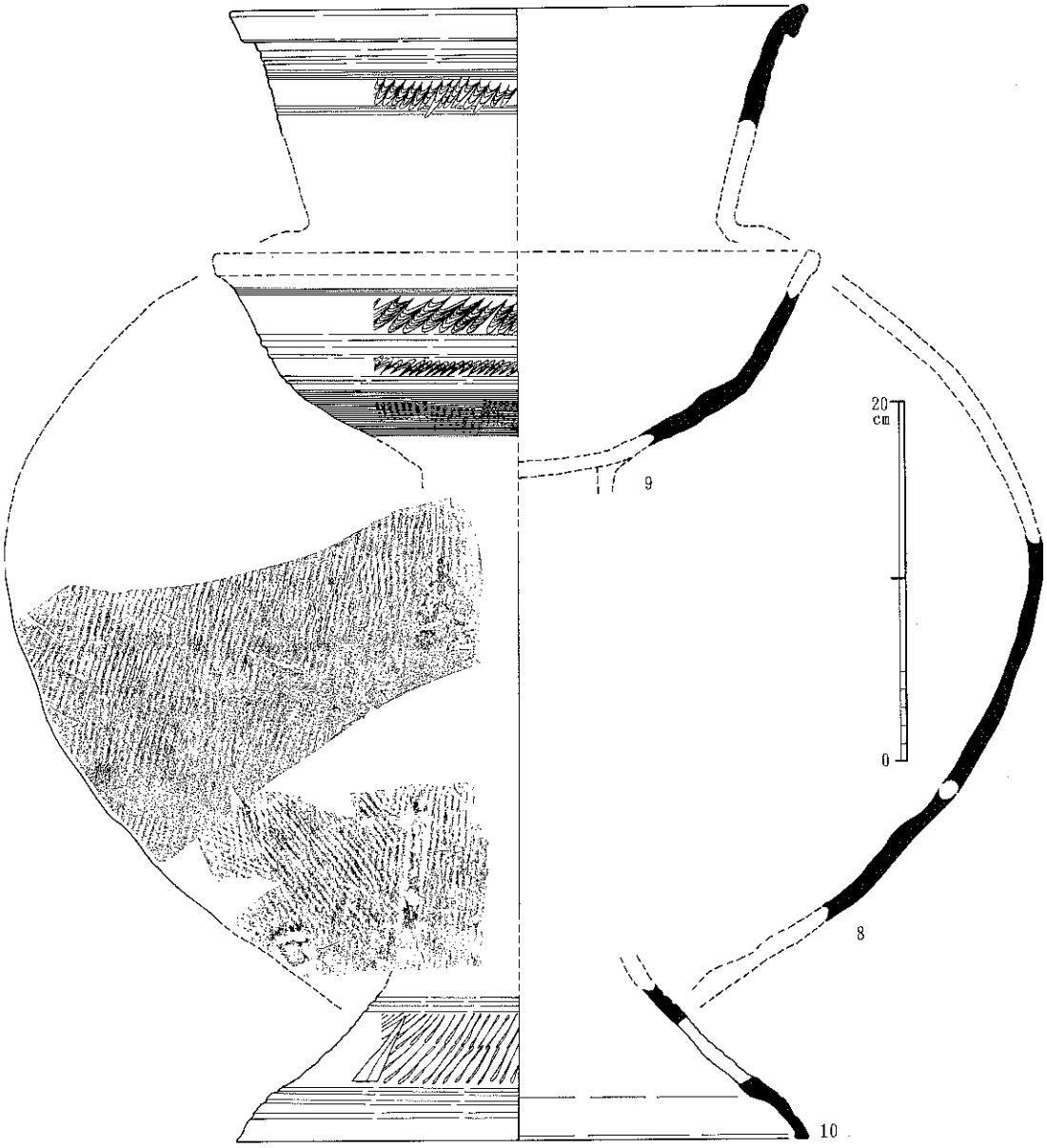
杯は、少なくとも蓋が3個体、身が6個体ある。1は口径14.0cmを測る。口縁端部は単純に収まっており、体部と天井部との境目には明瞭な屈曲を持たない。天井部にはヘラケズリが施される。杯身はそれぞれの口径が、2は12.0cm、3は12.0cm、5は12.0cm、6は11.6cmを測る。口縁端部は蓋同様単純に収めるものばかりであるが、立ち上がりの形態は、薄い器壁で直立気味に立ちあがるものと、断面三角形と厚く短めに立ちあがるものの2者がある。いずれも底部外面下半にはヘラケズリが施される。



第10図 出土土器実測図
（1～6：南山117号墳、7：SK03）

4は無蓋高杯で、脚部に2段の透かし穴を持つ。透かし穴は内面まで貫通している。残存率が低く、机上復元実測を行っている。口径は10.2cmを測る。

9、10は器台であるが、焼成からみて両者は別個体と考えられる。9は器台杯部片で、底部付近をタタキで整形した後、外面全体にカキメを施している。文様帯はこの



第11図　南山117号墳周濠出土土器実測図

後に施されるが、最上段の欠損以下が２条の波状文、２条の凹線、波状紋、２条の凹線で構成される。10は器台脚端部の最下段片で、脚柱部から緩やかに広がって端部に向かうが、途中でやや角度を持たせて垂下させる。下端面にはナデを施して明瞭に面を持たせる。底部径は31.0cmを測る。三角形の透かし穴を持つ。外面の文様構成は、残存部分の上方より２条の凹線、２帯のヘラ描き斜行文、３条の凹線が施されている。

８は大型の甕である。同一個体のものである口縁部片と体部片があるが、全体の割合からすると少なく、全形態を復するには至らない。口縁部は端部に向け緩やかに外反するが、端部外面下端に粘土を張り足して大きく肥厚させている。口径は32.0cmを測る。口縁部外面には全体にカキメを施した後、２条の凹線、波状紋、２条以上の凹線の文様帯が施される。体

部はかなり球形に近い形態のようであるが、頸部、底部ともに欠くため詳細は不明である。外面には平行タタキの痕跡が残っているが、内面は丁寧にナデ消されている。甕はこの他もう１個体あることが確認できる。

円筒埴輪　すべて川西宏幸氏編年の第Ⅴ期に比定できる埴輪である[2)]。完形に復するものはなかったが、基本的には３条突帯、４段構成の個体であると考えられる。これらの特徴的な点は、一見して須恵質と土師質のものがあることで、須恵質埴輪は多くが還元され青灰色を呈し、焼き歪みが著しい。円筒埴輪の数量は、図示した13個体のほかに整理箱に６箱の破片がある。また、ここで扱った中には、朝顔形埴輪底部片を含む可能性がある。

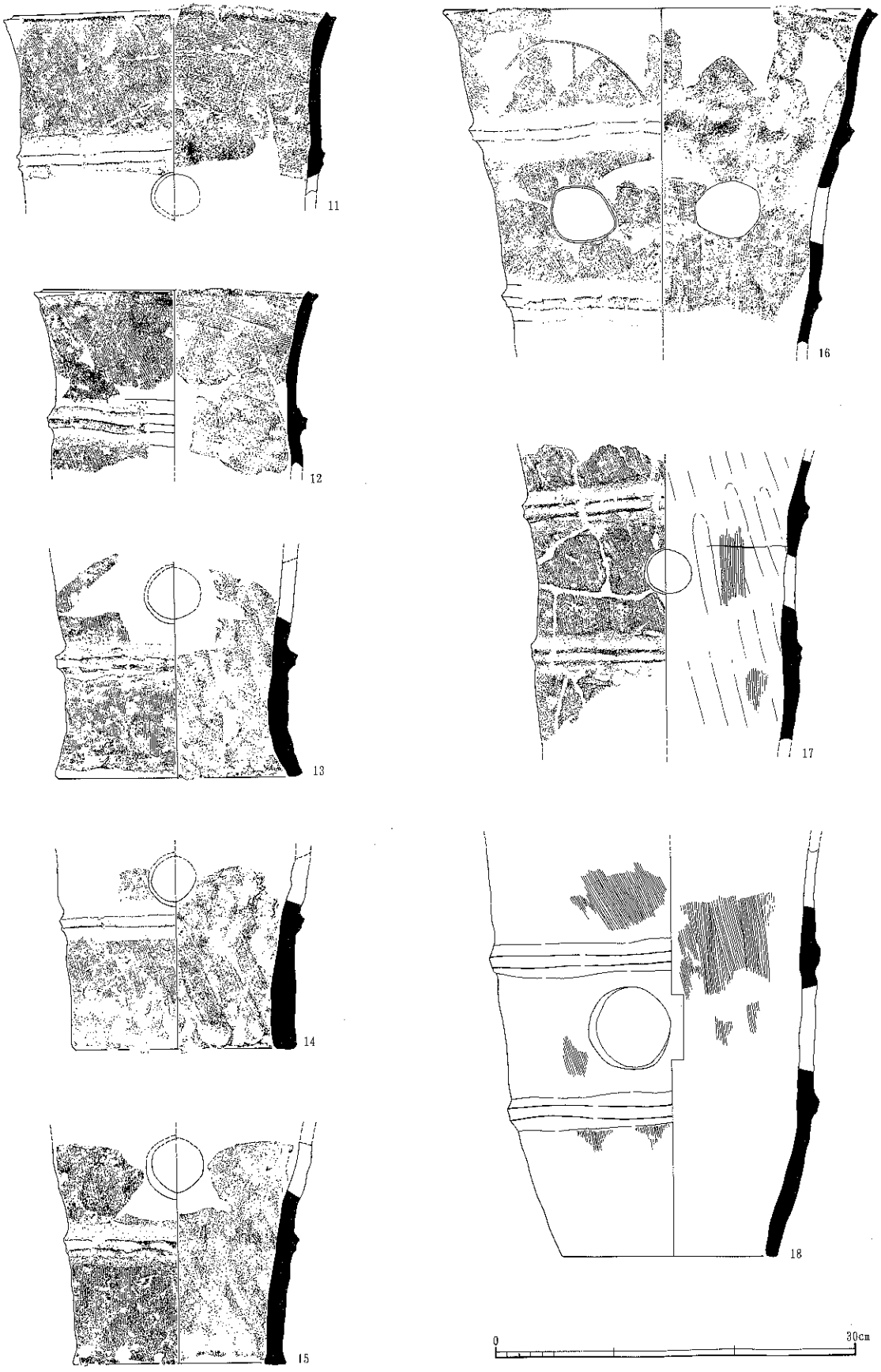
埴輪の全体的な形態については不明な点が多いが、底部から緩やかに外反して口縁部となるもので、特に著しい特徴は見られない。ただ、須恵質埴輪については、高温により楕円形を呈したり、波打って湾曲するなどして変形している。土師質のものは比較的正円形を呈する。透かし穴は２、３段目に確認でき、それぞれ直交して各段２個穿たれている。

法量については、個体間で極端な開きはなく、底部径で18.0～22.0cm間に収まる。口縁径は18.4～36.8cm間とやや開きがあるが、これは破片実測により歪みの修正ができない数値も含んでいるためで、平均は25～30cmの間にあると考えられる。突帯間幅は、口縁端部から最上段突帯間で10.5～12.0cmで1.5cmの差が、底部から第１段突帯間で9.5～12.0cmで2.5cmの差がある。中間段で12.3～14.3cmの差がある。

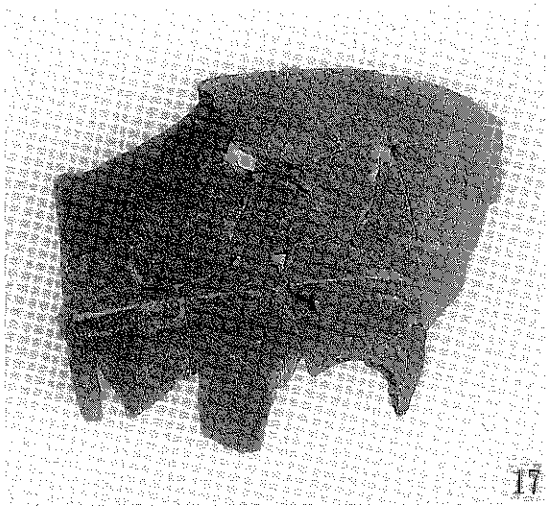
成形には、まず５cm前後の粘土板で基底部をつくり、その上に粘土紐を積み上げている。20には、粘土板を２枚組み合わせて接合した痕跡が残っている。外面調整はほとんどの個体

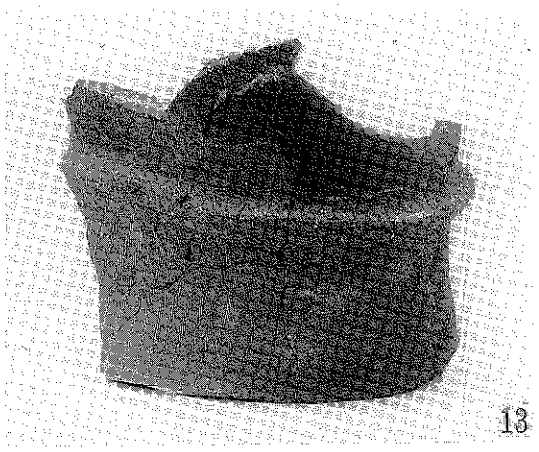
円筒埴輪												
No.	口径	底径	突帯間幅				焼成	底部内面	口縁部内面		ヘラ記号	その他
			最下段	第２段	最上段下	最上段		縦ハケ	横ハケ	縦ハケ		
11	25.6					12.0	須・硬		○	○	○	
12						10.8	須・硬		○	○		
13		20.0	9.5				須・硬					
14		20.0	10.8				須・硬	○				
15		18.0	10.0				須・硬					
16	36.8				14.3	10.5	須・硬			○	○	
17				12.5			土・硬					
18		18.0	12.0	12.5			土・軟	○				
19	21.0					11.6	須・硬		○	○	○	
20	18.0		11.0	12.3			須・硬					底部に板ナデ
21	22.6		10.3				土・軟					
朝顔形埴輪												
			右から口縁最上段より									
22	40.0			13.6	8.4	6.5	土・軟		○	○		
23	40.0		12.5	11.3	6.9	7.3	須・硬		○			

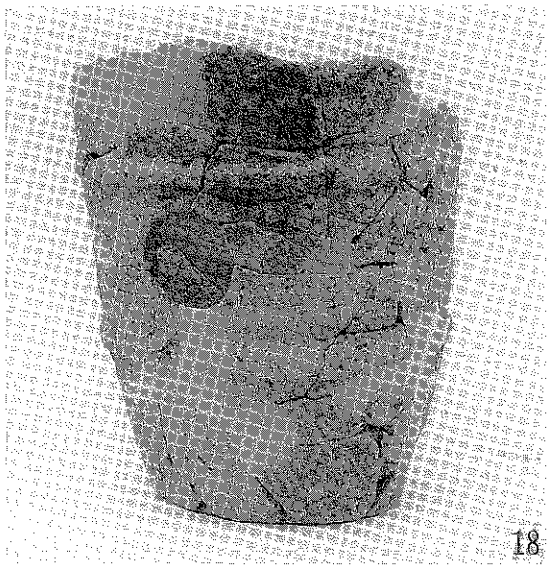
表１　円筒埴輪観察表

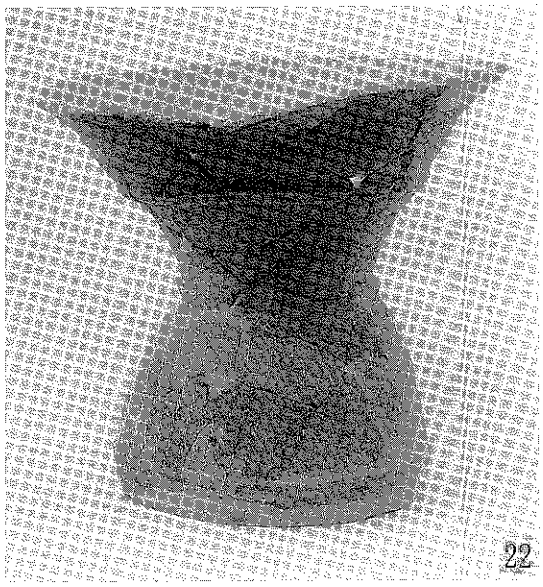


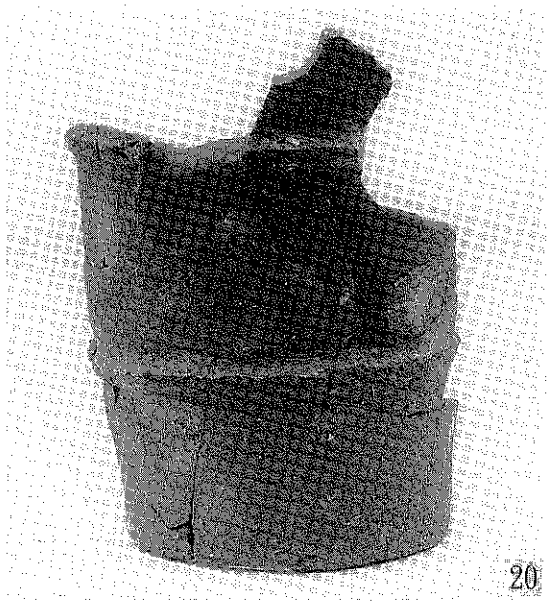
第12図　南山117号墳周濠出土埴輪実測図

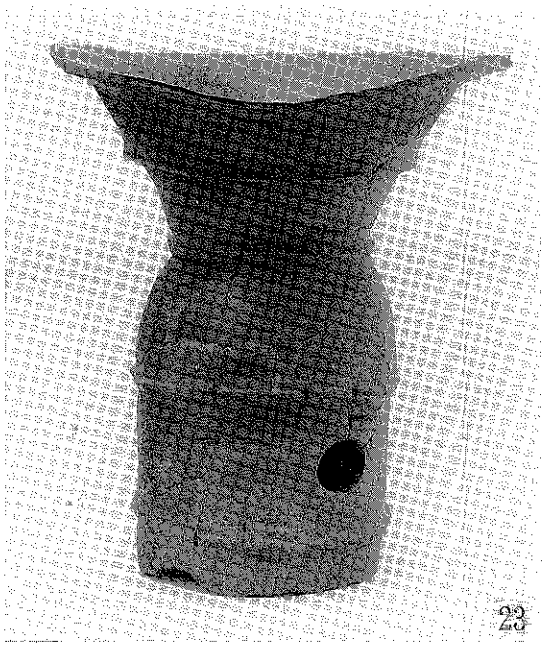




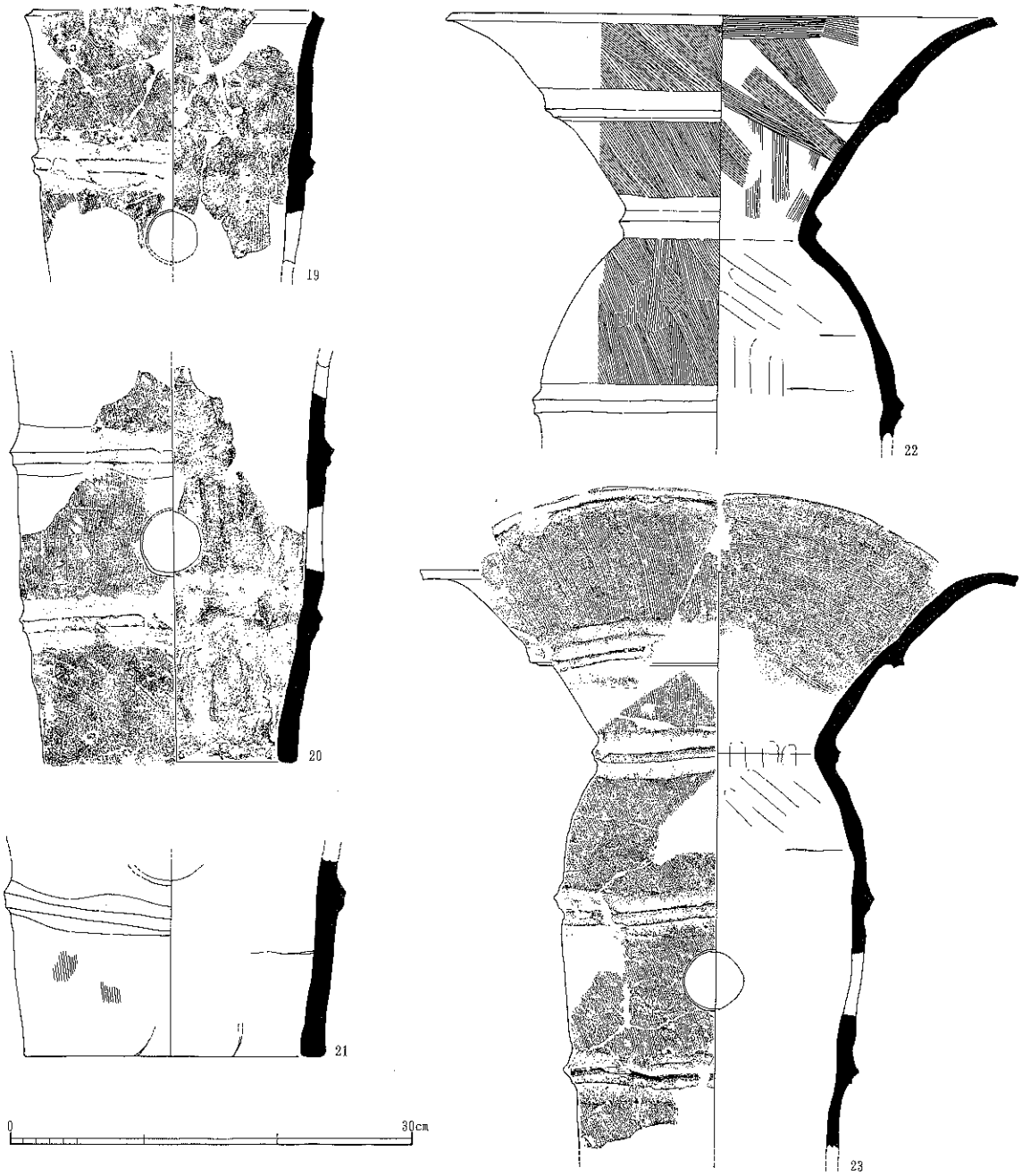








第13図　南山117号墳周濠出土埴輪写真



第14図　南山117号墳周濠出土埴輪実測図

が一次調整の縦ハケのみである。縦ハケは、第2段突帯を境に1度、また最上段突帯を境に1度方向の変化が見られ、これは接合痕によるへこみとも一致するため、最低3回以上の小工程を経て成形されたものと考えられる。縦ハケには、底部際から施されるもの(14)と、それよりやや上方から施されるもの（13,15)がある。この他、底部調整として、例外的に左方上がりに板ナデを施している個体があり(20)、これは第1段目の突帯にまで及んでいる。内面調整は基本的には縦ナデであるが、縦ナデのみのもの(13,15,20)、底部付近にのみ縦ハケを密に施すもの(14)、全面的ではあるが疎らに縦ハケを施すもの(19)、全面的に密に縦ハケを施すもの（18）がある。また、口縁部内面には、横ハケを施すもの(11,12,19)とナデのみ

のもの(16)がある。底面には、植物質の圧痕を残す個体が多い。

突帯は、突出度が低く上下を横ナデで器壁に密着させている。いわゆる「断続ナデ技法」は観察できない。また、水平に張り付けることを厳密に意識していないようで、波打っているものもある。突帯を貼り付けた厚みが、円筒部より盛り上がって残っている個体も多い。

ヘラ記号は、11、16、19の3個体のみに認められ、いずれも口縁部近くの外面に記されている。全体が完全に分かるものはないが、16は円弧の下に直線を記す傘状の記号が付されており、19も同様のものとなる可能性が高い。11にも、直線が垂直に記されたヘラ記号が見られる。

焼成は、黒斑を有するものはなくすべて窖窯焼成と考えられる。このなかでも須恵質と土師質のものがあるのは先述のとおりで、この質的違いや色調の違いは、焼成回の違いを反映していると考えられる。したがって、同質同色を呈する個体は同一焼成時のものの可能性が高い。須恵質のものは青灰色、赤褐色を呈し、土師質のものは、赤褐色、黄褐色をそれぞれ呈するものがある。須恵質のものは、どれも非常に硬質に焼き締まっているが、赤褐色のものに焼き歪みは見られない。土師質の埴輪には、軟質で摩滅が著しい個体が多く、焼きの良い個体は少ない。

朝顔形埴輪　2個体が確認できた。朝顔形埴輪についても、円筒部分については基本的に円筒埴輪の諸特徴に準ずる。肩部については、内面は縦ナデのみで、粘土の接合痕跡を顕著に残す。口縁部との境目には突帯を付すが、22は突帯の下端がつぶれて肩部の屈曲と一体化している。口縁部には、端部までの間に1条の突帯を持つ。この突帯を境に外面調整である縦ハケの方向をやや違えており、ここにも小工程が存在していることが分かる。縦ハケは23は放射状に規則的に施されているのに対し、22はやや横方向気味で、余り規則性を意識していない。この差は、内面調整のハケにも見られ、23は断続的にハケの動きを止めながら丁寧な横ハケを施しているのに対し、22は肩部から上方に向けては縦方向や斜め方向のハケを施し、端部にのみ横ハケを施しているという違いがある。

形象埴輪　形象埴輪類はわずか3片と少ないが、盾形埴輪、蓋形埴輪と考えられるものがある。焼成はいずれも土師質で軟質である。前者に相当するものは2片で、おのおの鰭部にあたることがわかり、鋸歯文の線刻がある。後者は蓋部と円筒部の接合部にあたるが、文様は施されていない。

B．SK03

須恵器壺1点と埴輪片がある。高台付きの長頸壺（7）は、肩部の屈曲線は比較的柔らかく、直上に1条の沈線を持つ。体部下半にはヘラケズリが施されている。7世紀初頭のものと考えられる。

Ⅳ. ま　と　め

前章までに今回の調査経過と概要について報告してきた。ここでは、南山117号墳のもつ内容をまとめ、木幡古墳群の中での位置付けを行って結びとしたい。

A．南山117号墳の概要

今回発見した南山117号墳は、全長18mの円墳で５m幅の周濠を持つ古墳である。墳丘は既に削平を受けており、主体部についても完全に失われている可能性が高い。また、検出面積は、復元規模の約10%であるため、墳形が前方後円墳となる可能性を完全には排除できないが、120基中の119基が円墳で構成される木幡古墳群全体のあり様を見てみるならば、その可能性は低いと言える。

出土遺物には須恵器と埴輪がある。須恵器は、杯においてはいずれも体部と天井部および底部との境に明瞭な稜線は見られず、全体的に浅く偏平化しているなどの特徴があり、これらを田辺氏陶邑編年に当てはめると[3]、ＴＫ43型式を中心とした時期に並行するものと考えられる。また、埴輪については、川西氏編年のＶ期に相当するものである。以上の点からすれば、本墳の築造時期は６世紀前葉から中葉ごろと考えられる。

B．埴輪の検討について

埴輪の分布と配列について　埴輪の平面分布は、第15図に示したとおりである。埴輪は、破片となって周濠全域から出土しており、原形を保って倒れ込んだような個体はない。しかし、破片の分布状況には一定のまとまりが見られたため、その単位ごとに取り上げを行った。

第15図にある点線の範囲は、この取り上げ時の単位を示したものである。ただ、整理の結果、この単位を越えて接合する個体はなかったため、各個体の分布状況と読み替えてよいものである。まとまりのあり様は、周濠内の各場所により若干の異なりが見られた。北西部では、数か所ごとに個体がまとまりを持って出土しているが、東端部では数個体が入り混じって散布していたため、明確にまとまりを見出だすことが困難であった。そのため、その範囲の中でまとまりを持つものについては個別に取り上げ、残りはその範囲内で一括して取り上げた。

この図のとおり、各種埴輪の配列状況の復元は不可能に近いが、形象埴輪についてはこの範囲外に樹立されていたものと考えられる。また、円筒埴輪については、須恵質埴輪が東端に集中する傾向が見られることが指摘できるが、須恵質、土師質が混ざって並んでいた可能性が高い。また、調査範囲内で検出した円筒埴輪底部片は７個体分で、同口縁部片は７個体分（朝顔形埴輪２個体分）であった。失われた個体を考慮するならば、10個体前後が調査範

囲内に落ち込んだ埴輪の実数に近い数値ではないだろうか。この数値を配列時状況に直接置き換えることはできないが、周濠全円周の約1/6を検出していることを考えれば、古墳全体で、60本以上は円筒埴輪が樹立されていたのではないかと試算している。

円筒埴輪の検討　今回の調査では、全形が復元できた個体がないため、型式的な取りまとめを十分に行えなかったが、とらえることのできた特徴を簡単に整理したい。

形　態	不明（全4段、突帯3段か）	
法　量	18～22cm（底部径）　高さ不明	
外面調整	A：縦ハケのみ B：縦ハケ＋板ナデ	a：底部端より施すもの b：底部端よりやや上方より施すもの
内面調整	Ⅰ：ナデ＋縦ハケ Ⅱ：ナデ＋口縁部横ハケ Ⅲ：ナデ＋横ハケ＋口縁部横ハケ	1：密なもの 2：粗なもの
ヘラ記号	傘状のものがあり	
焼　成	窖窯焼成	須恵質、土師質

表2　円筒埴輪の特徴

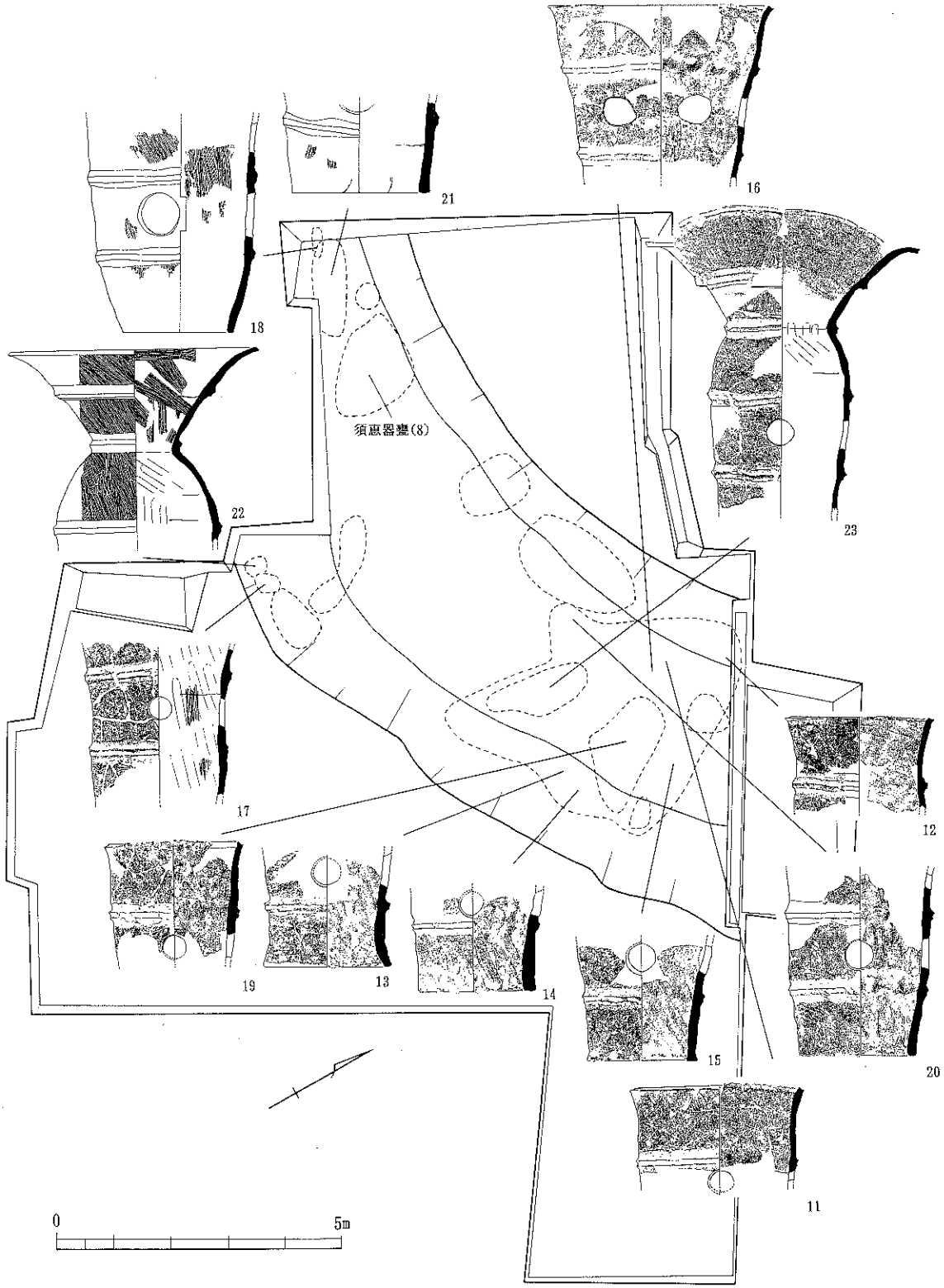
また、明瞭な断続ナデは観察できず、倒立技法は行わない個体が多い。

同時期の埴輪を持つ近接の古墳として、二子塚古墳がある。二子塚古墳は、外面に横ハケ調整を持つⅣ期の埴輪と、縦ハケ調整のみのⅤ期の埴輪とを合わせ持つが、後者は、外面縦ハケ調整が均一方向で始点を揃えて施される傾向にあり、突帯の断面形態は台形が志向されている特徴がある[4]。これらの点を比較するならば、本墳のもつ埴輪は二子塚よりも後出すると考えられる。また、近隣地域のⅤ期埴輪との詳細な比較は今後の課題であるが、最も後出する一群の埴輪となる可能性が高いと考えている。

C．南山117号墳の評価

南山117号墳を含む木幡古墳群は、府下最大規模の群集墳であり、山城地域の古墳時代後期を評価する上でも重要な存在であるといえる。しかし、陵墓として管理が行われているため、包蔵される内容については十分解明されていないことは先述した。この状況下にあって、南山117号墳が持つ内容は、木幡古墳群の規模や造営時期、ひいてはその成立背景を理解する上で大変有効なものとなったと考えている。

木幡古墳群の、一丘陵上に百基を超える古墳が集中するという分布密度は、数基から数十基単位の小古墳群を幾つかまとめて古墳群と呼称している府下南部のそれらと比べたとき、際立って異なった存在としてとらえられる。その中でも特に集中する地区を地形から観察すると、主尾根筋上に比較的規模の大きな古墳が累々と築かれ、これに派生する大小の尾根筋には、中小規模の古墳が地形同様に大規模古墳から派生するかのように並ぶという、規則的な配列をみることができる。それらはそれぞれ、一つずつの小枝群として捉えることも可能



第15図　埴輪出土位置図（埴輪は1/10）

である。

また、これらの主体部構造は、主尾根上のほとんどの古墳が、石材の抜き取り痕跡と考えられる大きな落ち込みを持っていることから、横穴式石室を内蔵していたことが分かる[5]。

抜き取り痕跡を持たない古墳については構造を決しがたいが、各枝群内の規模の大きな古墳が横穴式石室であることを考えるならば、同時期性の高い内容を持つと考えられる。

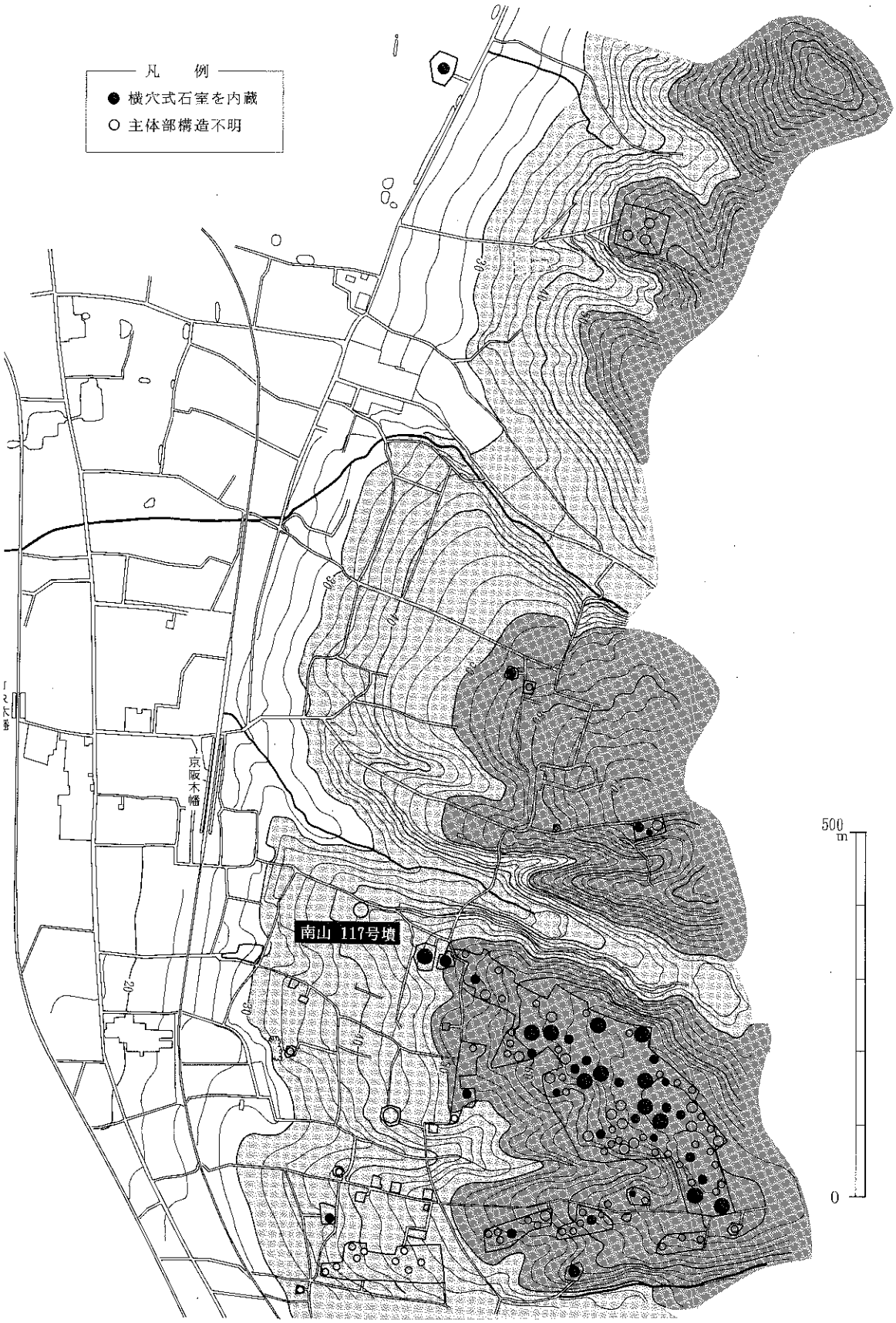
上述の状況を合わせ考えれば、南山地区の中でも集中的に存在する一帯の古墳は、ほぼ同時期、集中的に造営された群集墳であり、それは全国一斉に横穴式石室が採用され大小の古墳群が大造営される、6世紀後半から7世紀にかけてのものと理解できる。

さて、今回発見した南山117号墳は、群集墳地区の中の主尾根筋の末端に立地している。主体部構造については手掛かりを得ることができなかったが、埴輪を持つという畿内後期群集墳には多くは見られない内容を備えており、造営時期も6世紀中頃前後と考えられ、先述の群集墳地区よりも先立つものと考えて良い。ここで、群集墳と南山117号墳の内容を比べた時、造営時期と立地には相関関係があること、つまり群集墳に先立つ古墳は、それより標高の低い地域に求められており、時期を追って山上に向けて展開していった状況にあったことを見出だすことができる。したがって、木幡古墳群において密度高く古墳が集中する状況とは、後期後半の群集墳であると捉えられるものであり、その出現を準備した前段階の古墳群が、かつては低地部中心とした周囲に広く散在していたことを示唆するものと考えることができる。木幡古墳群の規模については、現在の数倍となる可能性があることが従来より想定されてきたが[6]、今回の発見は、この想定に現実的な証拠を提示できるものともなろう。

しかし、このような規模の木幡古墳群であるが、木幡地域では、その造営前代の古墳時代前中期を通じて、これに直接系譜を求められるような古墳は見られない。それゆえ、6世紀初頭、同地域に突如として造営される二子塚古墳の存在が、その成立背景を考える上で重要な関係にあると理解されてきた。

二子塚古墳は全長112mで二重周濠を持つ大型前方後円墳であり、古墳時代後期という時期にあっては全国的に見ても突出した規模を誇る。また、その墳形は継体真陵とされる大阪府今城塚古墳と相似形にあると指摘されており、被葬者像として、継体大王擁立過程の中で有力者となった大王直属の首長という評価がなされている。木幡古墳群は、その台頭を支えた家長層の墓地という被葬者像が従来より描かれてきたが、時期的に連動するものかどうかについては、確証はなかった。6世紀後半よりも遡る時期から造営開始されたことを明らかにした、南山117号墳の内容は、その考えをあらためて裏付けることができたと言えよう。

木幡古墳群では今後も資料の大幅な増加が望めないなかで、今回の成果は、その具体像により迫ることができたものとして、また、木幡の地域の役割を見直す上でも重要な成果となったと考えられる。



第16図　木幡古墳群古墳分布図

註）

1）山田邦和　「京都府宇治市木幡古墳群の意義」『角田文衛先生傘寿記念・古代世界の諸相』　晃洋書房　1994

2）川西宏幸　「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2・4号　日本考古学会　1978・1979

3）田辺昭三　『陶邑古窯址群Ⅰ』　平安学園考古学クラブ　1966

4）荒川史・杉本宏・福島孝行　『五ヶ庄二子塚古墳』宇治市埋蔵文化財発掘調査報告第2冊　宇治市教育委員会　1995

5）宇治市教育委員会編　『宇治市遺跡地図』（改訂版）　宇治市教育委員会　1986

6）平良泰久　『日本の古代遺跡　京都Ⅰ』　保育社　1986

C．一里山遺跡 － 広野町東裏45－1 － 発掘調査概要

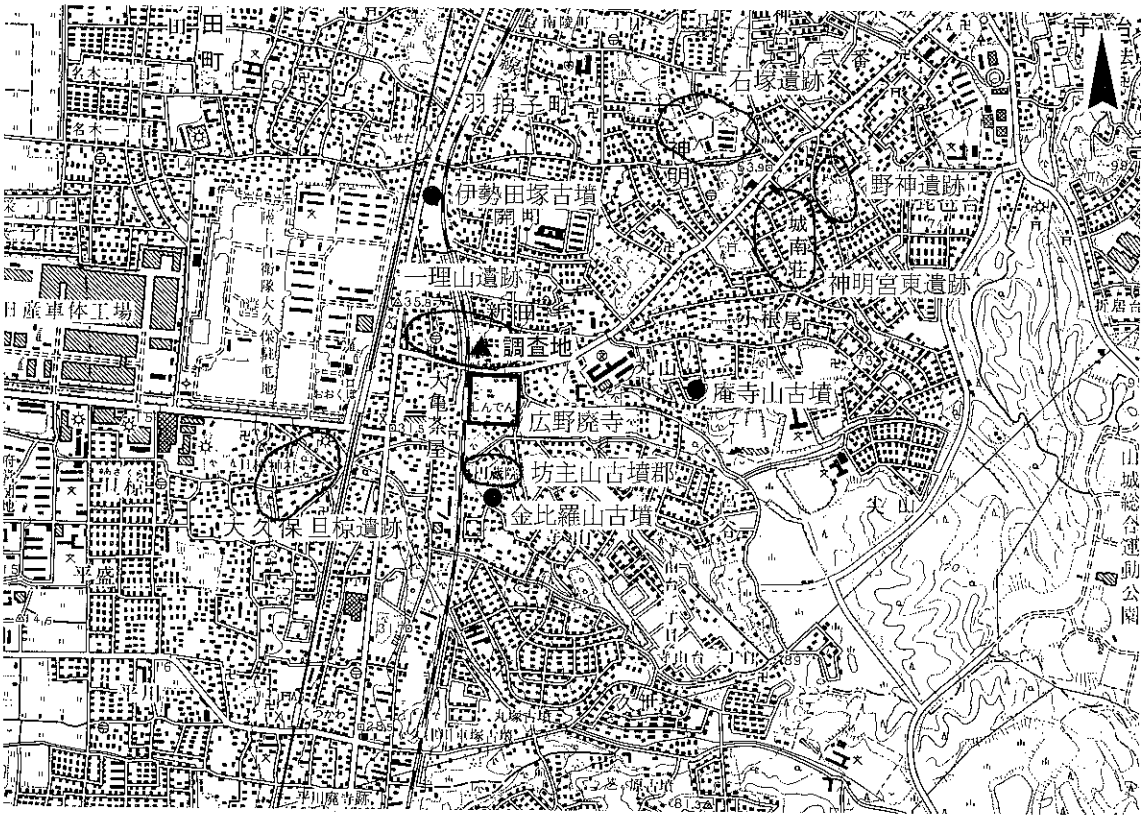
Ⅰ．は　じ　め　に

ここに報告するのは、宇治市広野町東裏45－１他において実施計画した一里山遺跡の発掘調査の成果概要である。

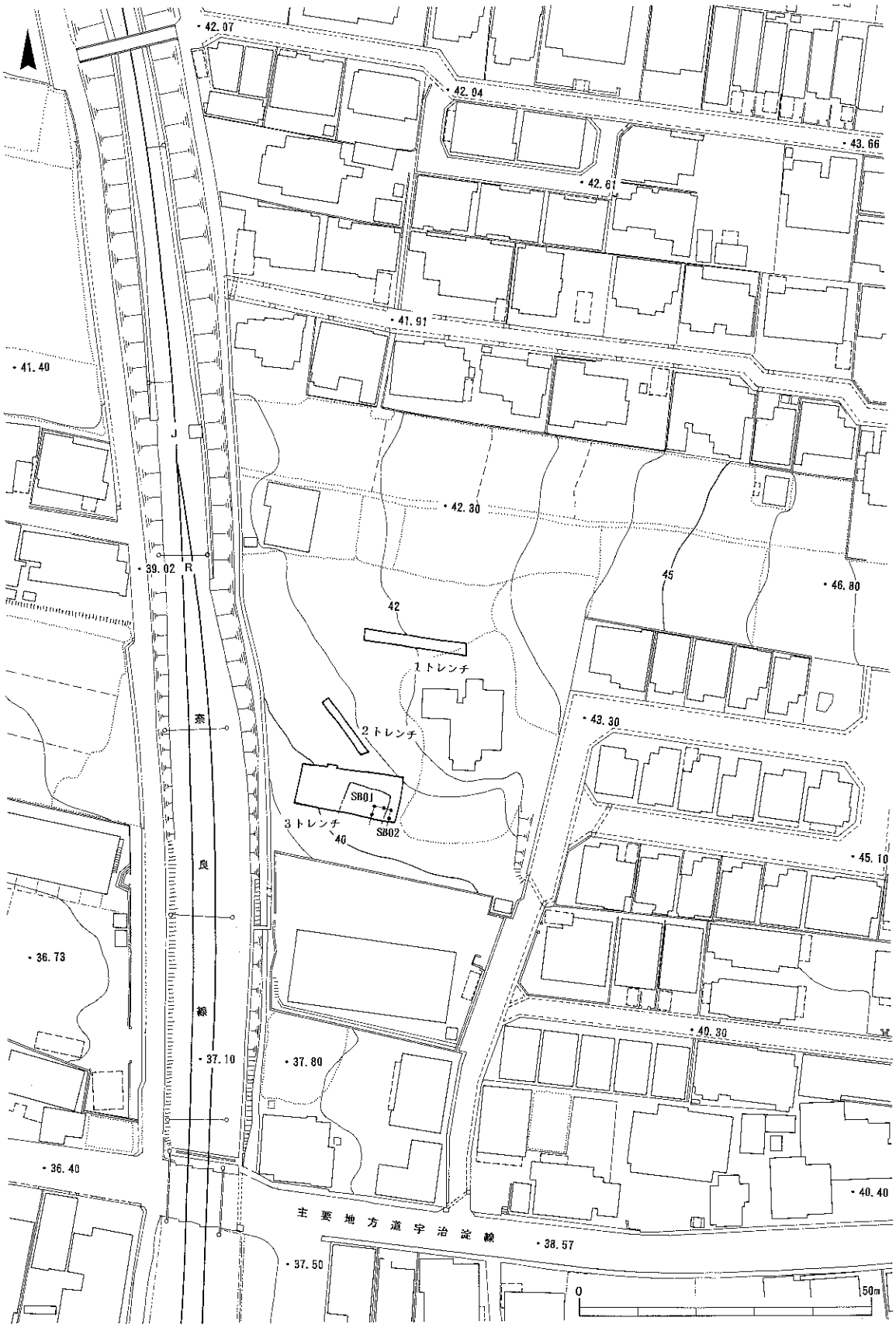
一里山遺跡は、西から東に緩傾斜する宇治丘陵が分岐した小丘陵の末端部に位置する。今回調査地は、その小丘陵の南緩斜面にあたる。

一里山遺跡は、本格的な発掘調査がこれまで一度もなく、調査地北側で表採された埴輪や須恵器から[1]、古墳時代前期から後期にかけての古墳群の存在が想定されてきた遺跡である。当遺跡の南には、白鳳時代創建の広野廃寺が隣接して所在する。広野廃寺はこれまで３回発掘調査が行われており、寺に関連した遺構・遺物が数多く検出されている。この広野廃寺発見の契機となった瓦が、調査地の南隣接地（小丘陵裾部）で表採されていることから、調査前の想定では、広野廃寺の瓦窯や寺の付属施設の検出が考えられた。

調査期間は平成８年10月22日から平成８年11月11日までののべ14日間で、発掘調査面積は約296㎡である。



第１図　調査地の位置（1：25,000）



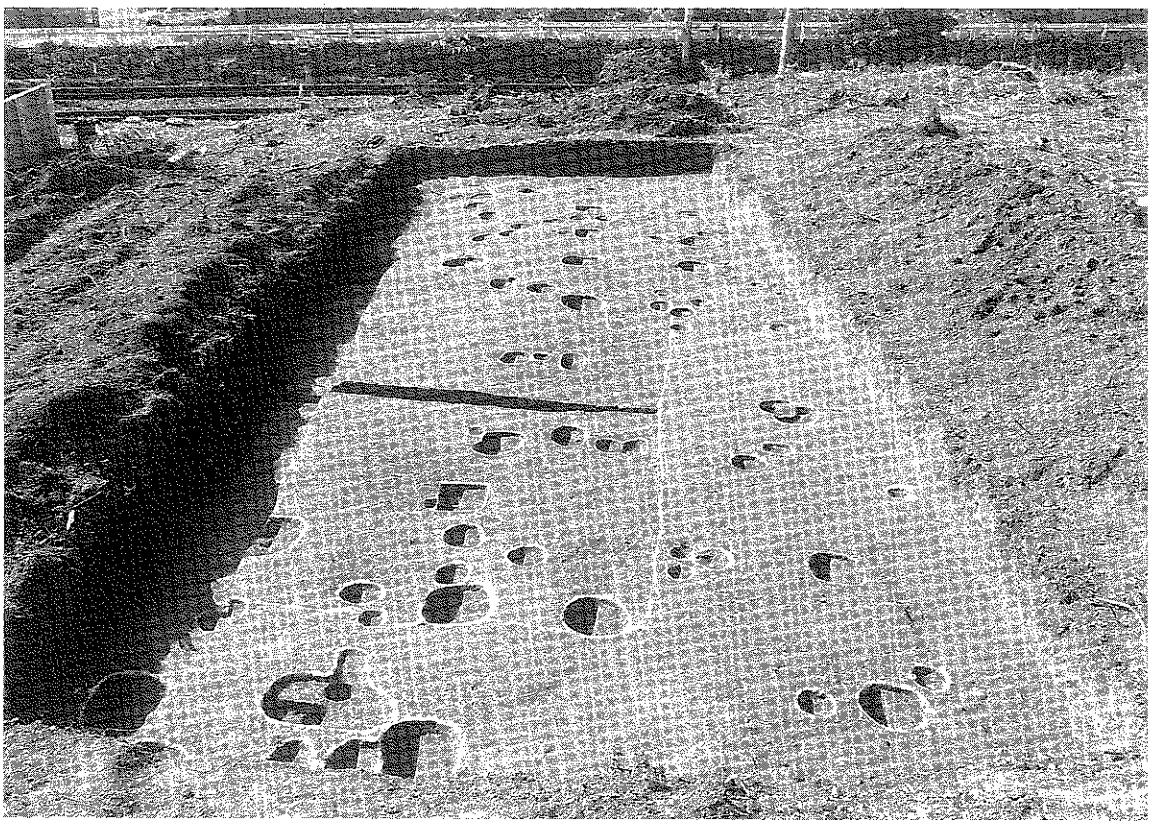
第2図　調査地周辺地形図

Ⅱ. 検　出　遺　構

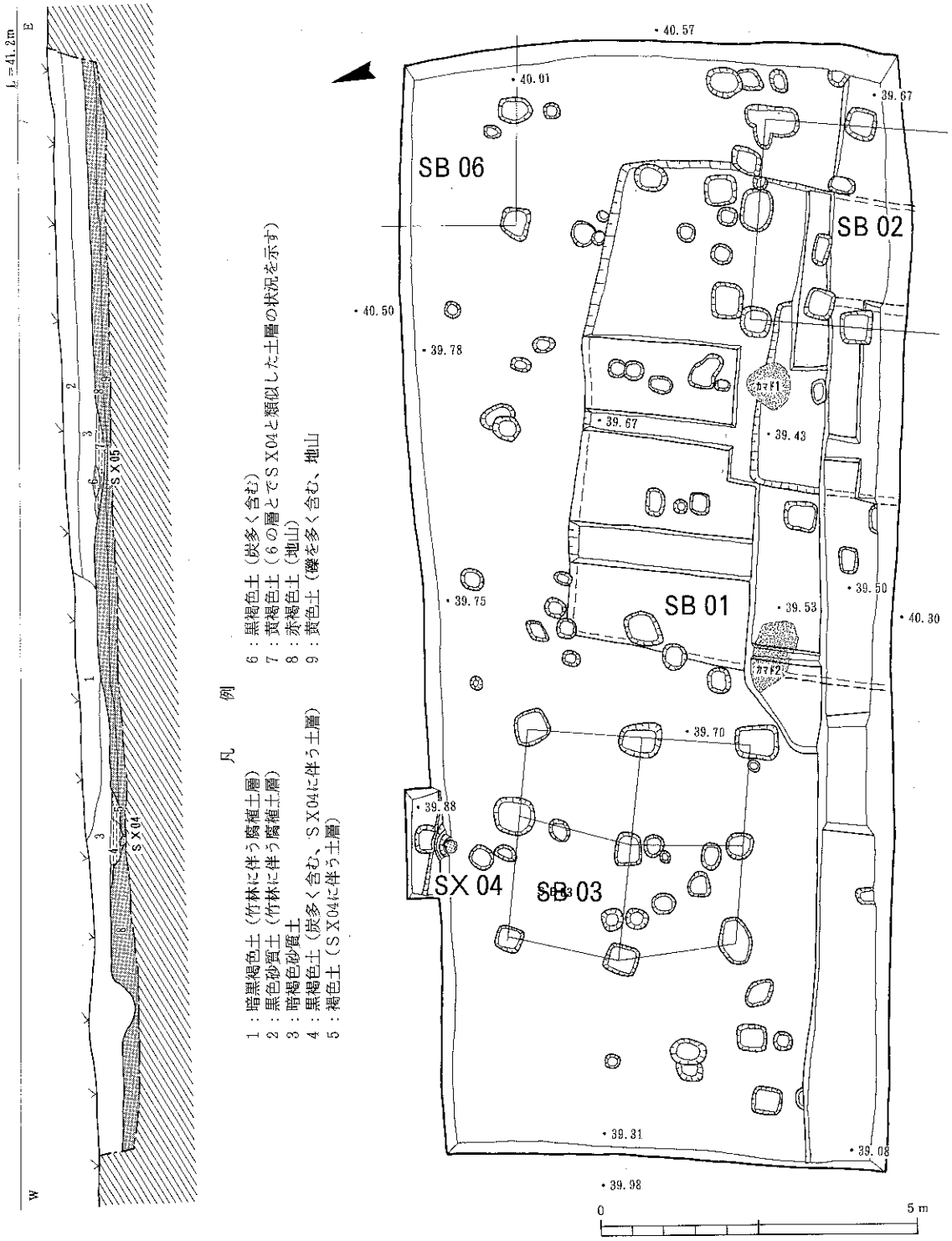
今回の調査地は前述したとおり、丘陵の南斜面に位置する。周辺の地形状況からみて当地は比較的旧地形を踏襲していると考えられた。調査はまず３ヶ所に細長いトレンチを設定して、遺構の有無確認を行った。トレンチ名は北側高所から順に１トレンチ、２トレンチ、３トレンチとした。１・２トレンチは、現地表下0.3m程で赤褐色系の土（地山）が確認できたが、土砂の流出が要因か、古墳期から奈良期の遺物はわずかに出土するものの遺構の検出には至らなかった。３トレンチは、最も標高が低い位置に設定したトレンチである。３トレンチでは表土と竹根の漸移層が0.5m強あり、それらを除去すると地山層の赤褐色系土が検出できた。３トレンチは斜面地の低い所に位置し、土が厚く堆積していたこともあってか、地山面付近で遺物が出土するとともに遺構が検出された。このため３トレンチを広げて重点的に調査を行った。検出された遺構は竪穴住居１棟、掘立柱建物３棟等であり、時期的には古墳時代後期から奈良時代までである。

以下３トレンチで検出された遺構の概要を順次説明していく。

竪穴住居ＳＢ01（第４～７図）　トレンチの南東部で検出された一辺が約7.8mの方形の竪

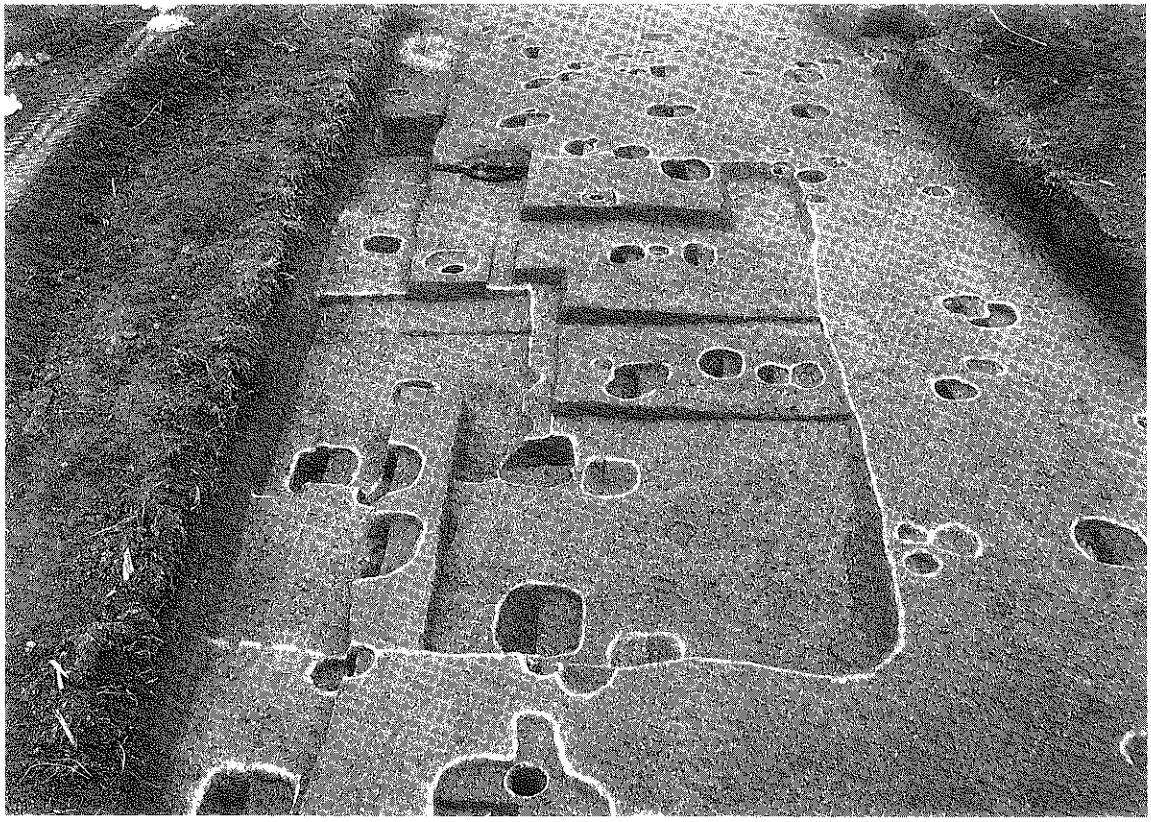


第３図　３トレンチ全景（東から）



第４図　３トレンチ実測図

穴住居である。今回のトレンチではその半分を検出したのみである。西壁面中央部にカマド２が付設される。主柱穴や貼床等の建物に伴う構造物は検出できなかった。竪穴住居のほぼ中央で、北壁中央にカマド１を付設した方形状の竪穴と想定される遺構が確認できた。竪穴の一辺は2.8m程で極めて小規模である。この遺構は竪穴住居ＳＢ01と同じく茶褐色の土で

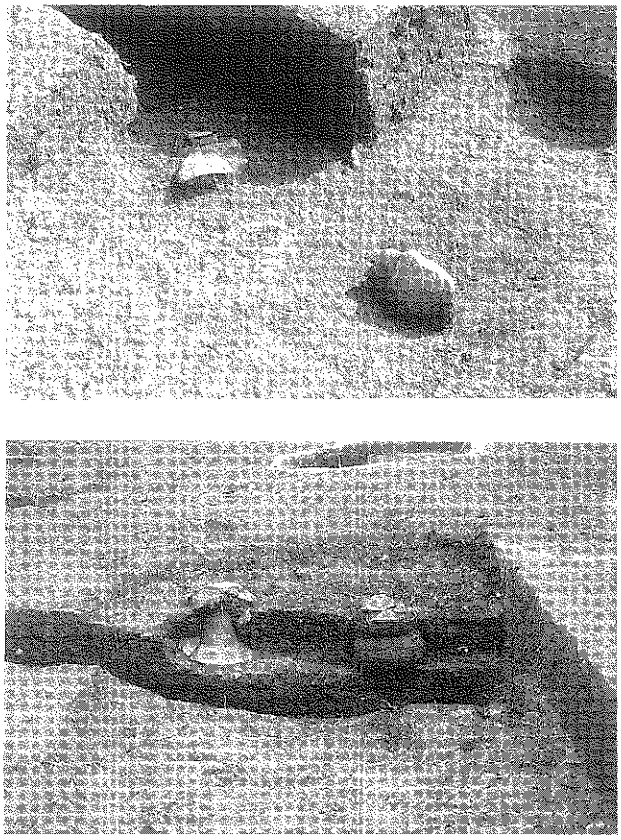


第５図　竪穴住居ＳＢ01（東から）

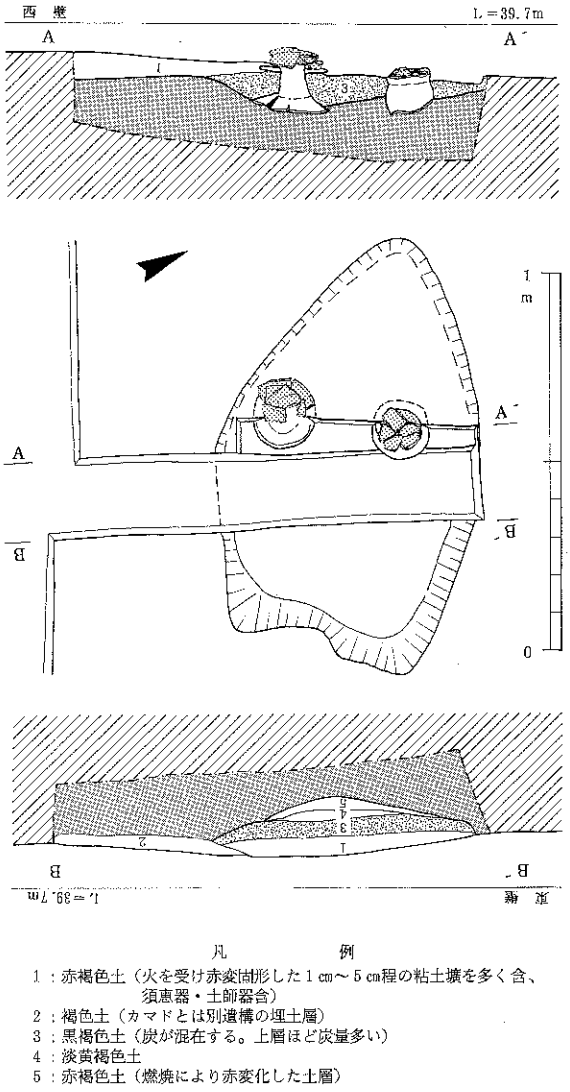
埋まっており、竪穴住居ＳＢ01に伴う遺構であると考えられる。

カマド１（第４～６図）　竪穴住居ＳＢ01の中央の竪穴北壁面で検出された。北壁中央部の壁面（地山）を削り出して形成する。燃焼部のほぼ中央に支脚の石が立てられていた。支脚石は砂岩質河原石と思われる。燃焼部床面には被熱痕跡がみられるものの、灰・炭は顕著にみられなかった。カマド壁面の状況は不明。支脚の東側に甑片が床面上に残存していた。

カマド２（第４～７図）　竪穴住居ＳＢ01の西壁面ほぼ中央部で検出された。壁面と床面（いずれも地山）を削り出して形成する。壁体の状況は不明であるが



第６図　カマドの出土状況（上がカマド１、下がカマド２）



第7図　カマド2実測図

全体としての遺存状況は良い。まず燃焼部の土層の状況を東壁断面でみる。燃焼部での最下層は赤褐色系の土である。これは被熱により土が赤変化したものである。その上層には淡黄褐色土が入り、その上層に炭・灰を多く含む黒褐色系の土層が形成されている。この状況からカマドの床面は補修が一度行われたとも考えられる。支脚は2つあり、破損して使用に耐えない土器を加工し、転用している。支脚上面にはいずれも土器片が置かれていた。土器片は接合可と不可がある。胎土・焼成から同一個体の可能性が高く、2つの支脚は同時期に使用されたものと判断される。

掘立柱建物ＳＢ02　トレンチ南東部で検出された南北棟の掘立柱建物。建物はトレンチ外に続くため、桁行が2間以上、梁間が2間としか分からない。柱間寸法は1.5m～1.7mを測る。堀方は方形で直径0.7 m程を測る。

掘立柱建物ＳＢ03　トレンチ西側で検出された総柱掘立柱建物である。柱筋は東西は揃うが、南北が揃わない。柱間寸法は1.4m～1.8mである。掘方は方形で直径が0.6m程を測る。東西柱筋は掘立柱建物ＳＢ01の北側柱筋と一致し、同時期の可能性が指摘できる。

掘立柱建物ＳＢ06　トレンチ北東部で検出された掘立柱建物である。一部の検出のため、詳細は不明。柱間寸法は2.8mである。掘方は方形で、直径約0.6mを測る。

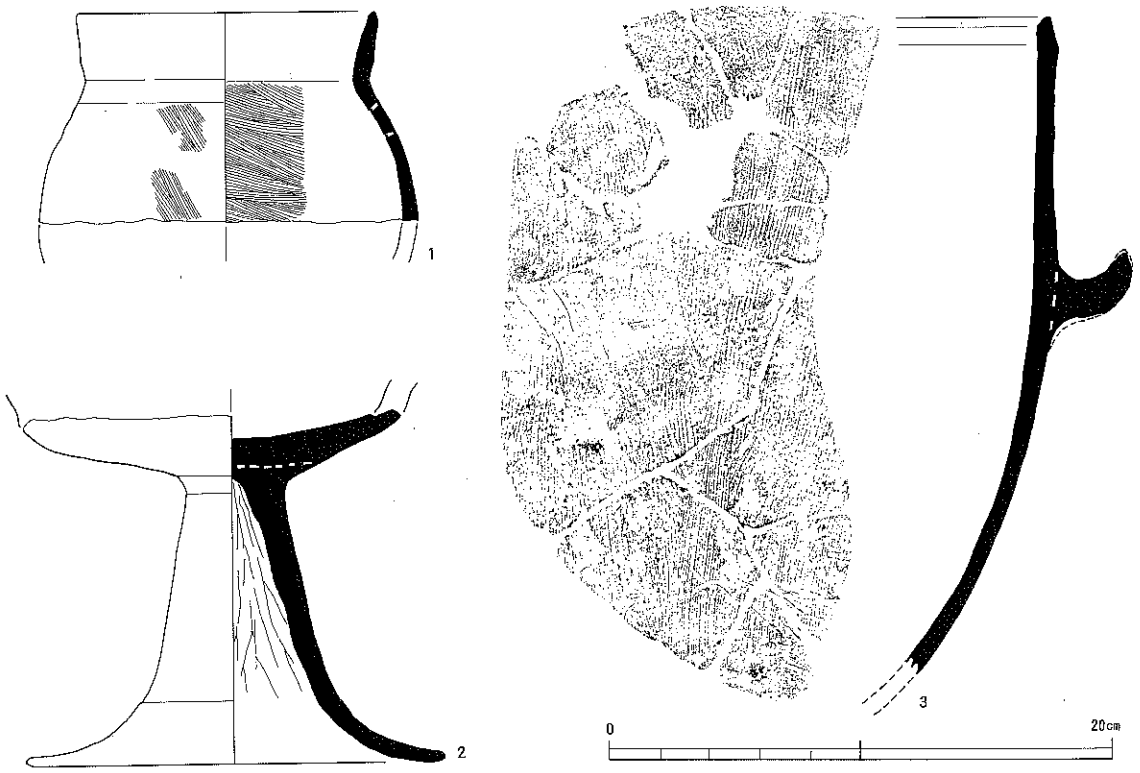
不明遺構ＳＸ04　トレンチ北壁西寄りで検出された遺構である。土層断面からみると二段構造に土壙を掘り、下段の土壙底面に口縁部を下にした小型の甕が配置される。下段床面には被熱痕跡は顕著に認められなかった。この甕から遺構検出面まで炭・灰を多く含む焼土が充填していた。カマド状の遺構と考えられるものの、その周囲には竪穴住居を想定させる痕跡は確認できなかった。

不明遺構ＳＸ05　トレンチ北壁東寄りで検出された遺構である。状況的に不明遺構ＳＸ04と同一の性格をもった遺構であると考えられる。土器の類は認められなかった。

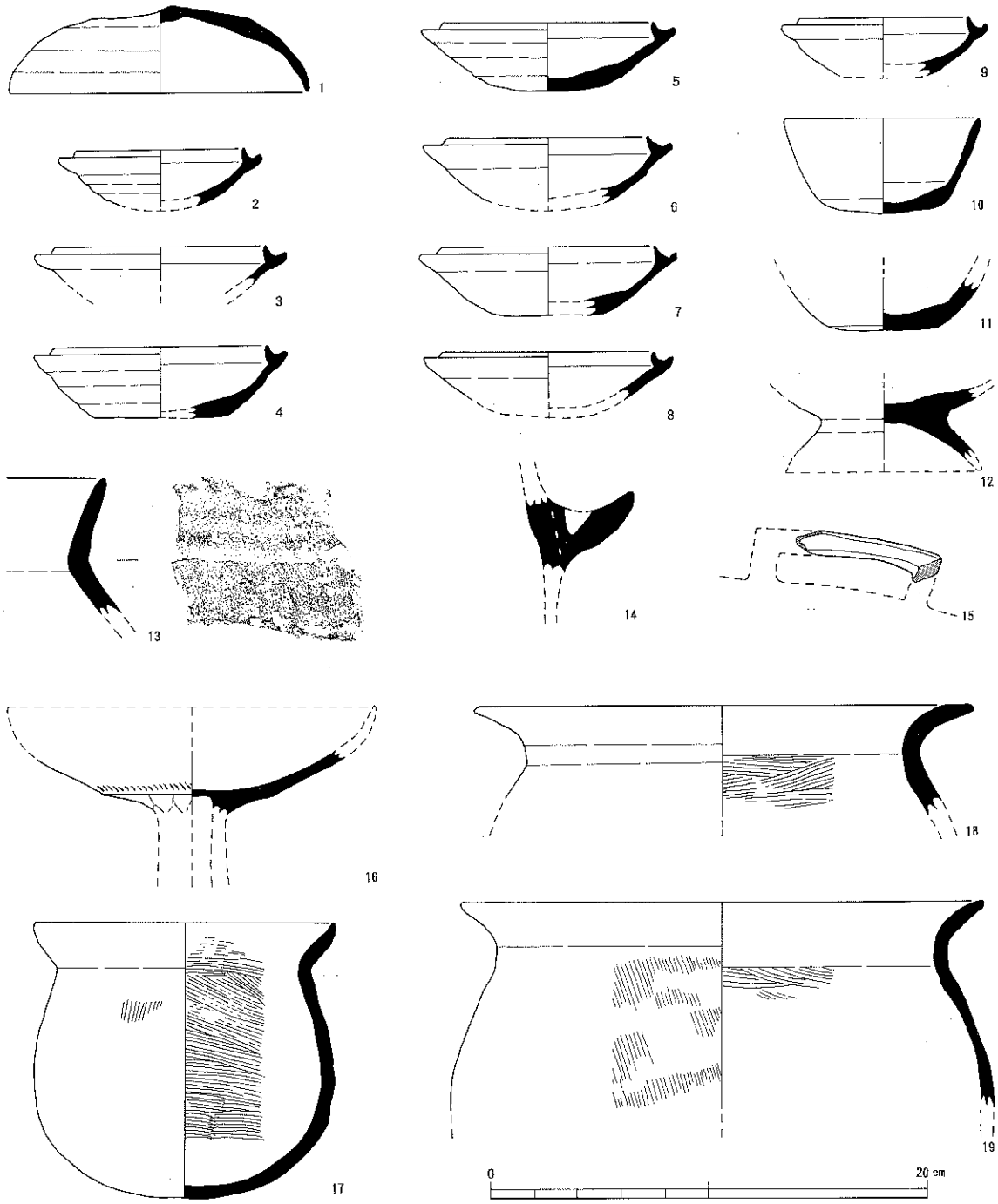
Ⅲ. 出 土 遺 物

今回の発掘調査で出土した遺物量は整理箱にして約３箱分である。種類は土師器と須恵器の土器類と耳環片１点がある。時代的には古墳時代中期から奈良時代にかけてのものがある。ここでは遺構に伴なって出土した遺物についてその概要を説明する。

竪穴住居ＳＢ01（第８図）　１と２はカマド２の支脚に転用された土器であり、この住居跡の年代を決定づける資料である。１は小型の甕である。口縁はやや内湾しながら外傾して立ち上がるものである。口縁端部は破損しており不明である。口径約12㎝を測る。外面には縦ハケ、内面には横ハケを施す。いずれも稠密なハケである。外面は火を受けていたためか表面剥離が著しい。胎土は細かく、茶褐色を呈する。支脚転用にはまず体部中程を打ち欠いて、破面をほぼ水平になるように研いだのではないかと考えられる。２は高杯である。杯部は破片の状況から二重口縁を呈すると考えられる。脚部では裾部半分、杯部でも底部半分を欠失する。支脚には二重口縁の屈曲部の粘土紐接合箇所を打ち欠き転用している。胎土は長石を多く含む。暗赤褐色。３はカマド２の近くで出土した甑片である。全体を復元する程の残りはない。内面は縦ハケ、外面は口縁部から把手部にかけて縦ハケの痕跡が明瞭に残る。口縁端部は内傾し、口縁部内外面には横ナデが施される。



第８図　竪穴住居ＳＢ01出土遺物（１と２が支脚専用土器）



第９図　出土遺物実測図

ＳＸ04（第９図17）　口縁を下にして使用された小型の甕である。口縁は外傾して立ち上がるもので、口径約13.5㎝を測る。体部は半分欠失する。外面は火を受けたためか、口縁部から体部中程にかけての表面剥離が著しい。外面は体部上半部は縦ハケ、下半部はケズリを施す。内面は横ハケを施し、底面はハケの後、ナデを施す。器高約13㎝を測る。茶褐色。

Ⅳ. ま　と　め

前章までに今回の発掘調査の経過、そして検出した遺構並びに出土した遺物の内容について概要を述べた。ここではこれらの成果を整理して本報告のまとめとしたい。

A．遺構の年代

今回の発掘で検出した主要遺構は、竪穴住居１棟と掘立柱建物３棟である。竪穴住居ＳＢ01は、カマドに伴う出土土器から概ね古墳時代中期に比定される[2)]。掘立柱建物はその時期決定が難しいが、竪穴住居ＳＢ01以外からの出土遺物で判断すると、３トレンチでは６世紀後半から７世紀後半頃まで（第９図）、１トレンチでは８世紀前半の杯が出土していることから、掘立柱建物群の築造時期は、現状では上限を６世紀後半、下限を８世紀前半に求めることができる。当遺跡が所在する小丘陵一帯には、若干の断続は認められつつも、概ね５世紀から８世紀前半の長期間、集落が展開していたことはほぼ間違いないといえる。

B．広野廃寺との関係

調査地南に展開する白鳳寺院・広野廃寺は、平成２年度の発掘調査で[3)]、中心伽藍は依然不明ながら、築地跡や寺院に伴う付属施設等の寺院周辺部の様相が明らかとなった。その調査成果に基づき、寺の概要を簡略すると川原寺式軒丸瓦を創建瓦として７世紀後半頃に造営が開始された。その後、奈良時代に大規模な改修をする。改修期の瓦は、平城宮式6235Ｂに比定されるもので、時期は平城宮Ⅲ期（天平17年から天平勝宝年間）にあたる。廃絶については寺院付属施設である井戸の廃絶時期が８世紀第３四半期頃に比定されることから、若干の問題は残るが、８世紀第３四半期頃の可能性が高いとされる。なお寺院前身遺構が検出されており、７世紀初頭から寺院造営直前まで当地に集落が展開していた。この調査成果と周辺の地形状況を踏まえながら、今回の調査成果を振り返ると、広野廃寺造営以前の当地には、かなり大規模な集落が展開したようである。設計された寺院伽藍地内に存在した集落が当然移転を余儀なくされたであろう。寺域は通常１町四方以上の広大な敷地を占めると想定されることからも、この時期すなわち７世紀後半の寺院造営直前の当地には、集落の大きな変動があったのである。今回の調査データからはこの転換期の状況を示すことはできないが、その影響下にあったことは十分に予測できる。また寺院造営後の建物群の性格であるが、これも一般集落とするのかもしくは寺の付属施設とするのか、前述との問題とも関わりあることであるが、これも明らかにできない。いずれの可能性も多分にある。ただ位置関係からは寺と何らかの有機的な関係があったことは間違いなかろう。現状ではいずれも８世紀段階で断絶しており、平安期に継続しないことは、注目すべき事実として受け止めておきたい。今後

の周辺の調査に期待する。

註)

1）鐘方正樹　「宇治市一里山出土の古式円筒埴輪」『京都考古』41号　京都考古刊行会　1985

猿向敏一　「宇治市一里山東古墳の須恵器」『京都考古』44号　京都考古刊行会　1987

2）土器の年代については以下の資料を参考にした。

竹原一彦・永澤拓史　「内里八丁遺跡」『京都府遺跡調査概報』第67冊　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　1995

鍋田勇「山城・丹波地域出土の韓式系土器と甑」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要』2　財団法人大阪府埋蔵文化財協会　1994

3）「広野廃寺発掘調査概報」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第17集　宇治市教育委員会　1991

D．槇島城跡 － 槇島町薗場35 － 発掘調査概要

Ⅰ．は　じ　め　に

A．調査の経過

本報告は、槇島町薗場35番地において、有限会社古川組の宅地造成の事前調査として実施した槇島城の発掘調査の概要である。

槇島城は、槇島町薗場・大幡・北内などにひろがる中世城館で、室町幕府十五代将軍足利義昭がこの城で織田信長に破れた、いわば室町幕府終焉の地として著名である。しかし現状では、城を示す痕跡を全くとどめておらず、詳細な城の位置・範囲などはわかっていないが、古い地籍図や地割などから大まかな城の範囲が推定されている。考古学的な調査では、この推定範囲内で数回の試掘調査や立会調査が行われているが、城であったことを裏付ける資料は見出だされていない。

調査は、平成８年４月３日から同年４月９日まで実施し、調査面積は110㎡である。

B．槇島城の歴史

琵琶湖を発し醍醐・笠取山地を流下してきた宇治川は、天ケ瀬の辺りから傾斜を強め、一気に宇治の谷口へ流れ出る。現在では豊臣秀吉の築堤により、槇島と五ケ庄の間を流れる流

第１図　調査前の状況

路一つになっているが、かつては槇島から小倉に流れるものが本流であり、そのほかにもいくつかの流路があったものと考えられている。槇島はその名のとおり、幾筋もの流れの中にあるまさしく島であったのだろう。

この地域には、宇治郷とともに宇治神社の社官を勤め、「長者」と呼ばれる人物が平安時代からいた。そしてこの「真木（槇）長者」が後の真木島氏になっていったものと考えられている。真木島氏としての文献での初見は、文和二年（1353）の真木島光経であろうが、この頃から真木島氏の活動が文献で知られるようになり、応永三年（1396）には真木島光忠が大徳寺如意庵に書状を送り、宇治辺のことについてはすべて自分に相談するよう要求するなど、宇治の地においては相応の力を持っていたことを示している。その後長禄二年（1458）頃には、真木島氏が幕府の奉公衆として将軍に拝謁しており、早くから将軍の直臣に加わっていたことがわかる。

槇島城は、もともと真木島氏の居館であったと思われるが、これに関する記事は応仁・文明の乱の最中である文明元年（1469）の『大乗院寺社雑事記』の記事が初見である。この記事は、興福寺の成身院光宣が東軍に加わるため、興福寺衆徒や山城国人を率い、槇島館へ入るというもので、この記事では「館」という言葉が使われている。

この後、「城」と標記されるようになるのは、文亀元年（1501）に槇島にいた細川政元被官の赤沢宗益に、近衛政家が贈物をした『後法興院記』の記述からである。赤沢宗益は、明応８年９月に久世郡域を攻略し、それ以後槇島に入城していたものと思われるが、この間槇島城の改修が行われ、「城」としての体裁が整えられたものと思われる。この文亀元年から文亀３年までの３年間は、槇島城の記事が最も多い時期であるが、これは時の管領細川政元が政務を執らず、籠居していたのが槇島城であったからである。このため将軍足利義澄は、この間３度も槇島城を訪れ、政元の上京を促している。

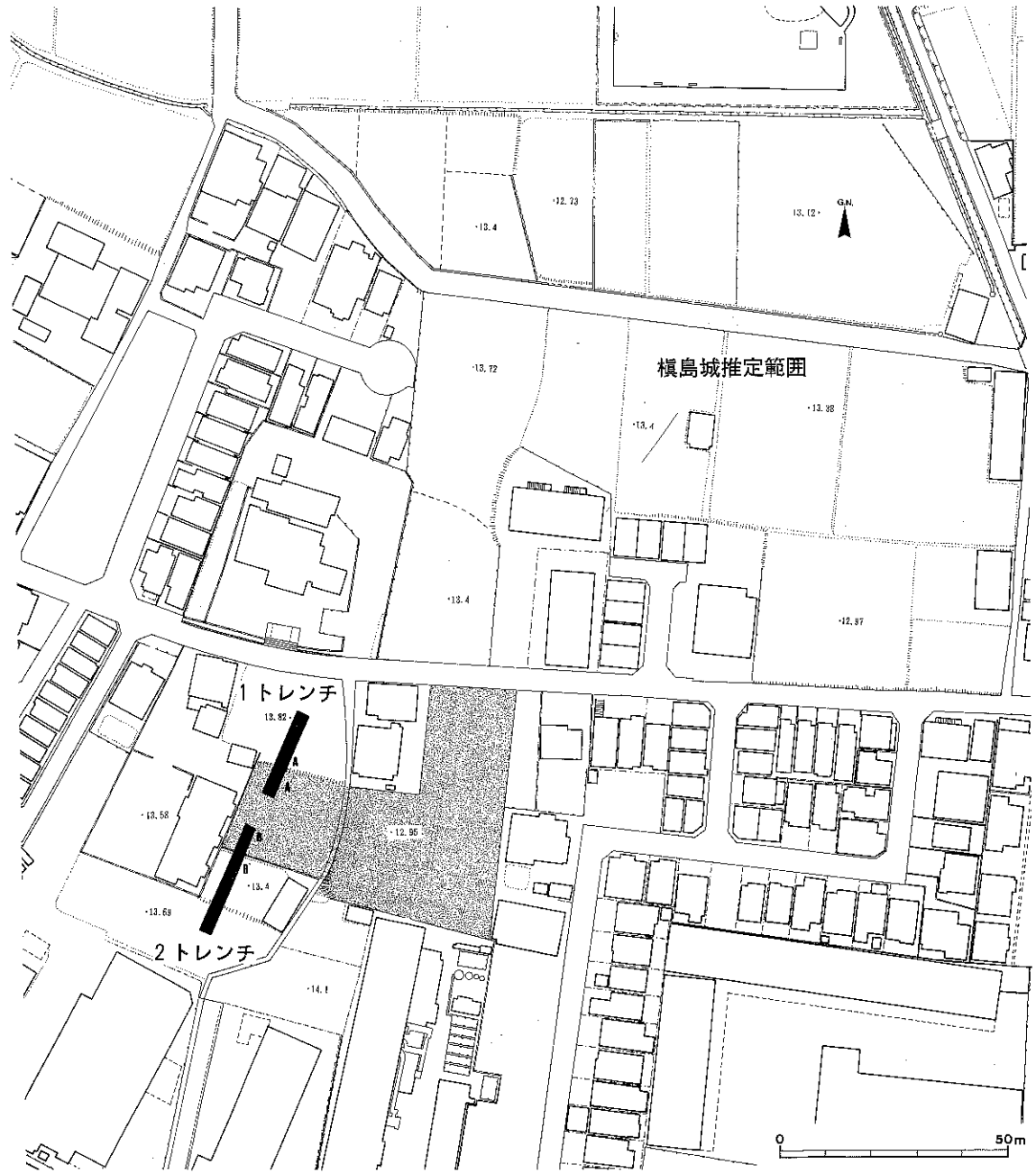
その後赤川宗益が槇島城を退去してからは、槇島城の記事は余り見られなくなるが、天正元年足利義昭が二条御所から槇島城に入城し、再び脚光を浴びることとなる。７月３日に入城した義昭に対し、織田信長は７月16日には五ケ庄・宇治に軍勢を派遣し、18日に総攻撃をかけた。義昭は前もって京都の河原者を使い城の修築を行っていたものの、その日の内に城は落ち、義昭は河内若江城に落ちていった。室町幕府の終焉である。

落城後、織田信長の家臣原田直政が入城し、その後明智光秀方の井戸良弘・羽柴秀吉方の浅野長吉・筒井順慶・一柳末安と城主は交替していくが、槇島城は南山城の拠点としての地位を保っている。しかし文禄３年の伏見城完成に伴い、宇治川の付け替えと槇島堤の工事が開始され、槇島城の意義は失われていく。槇島城がこの時に廃城になったかは明確でないが、以後記録に現れることはなく、槇島堤によって槇島城は命脈を絶たれたものと思われる。

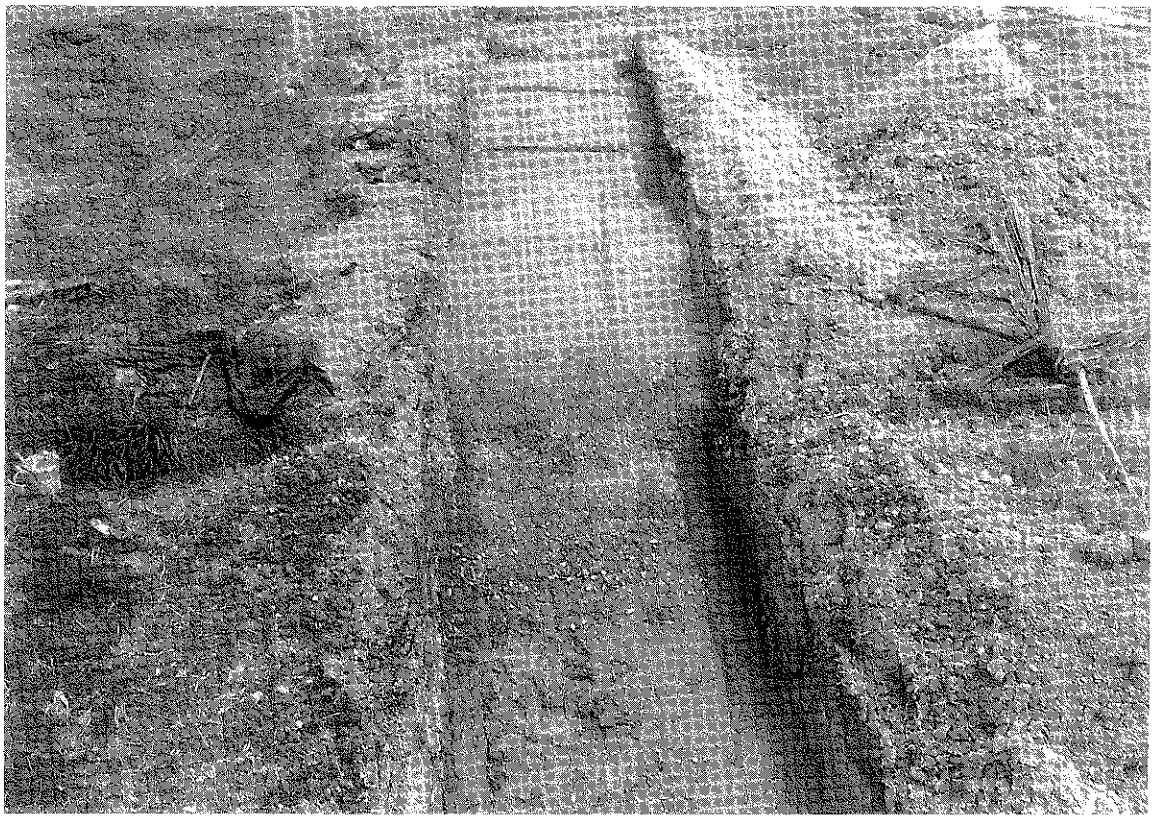
Ⅱ．調査の概要

A．遺構

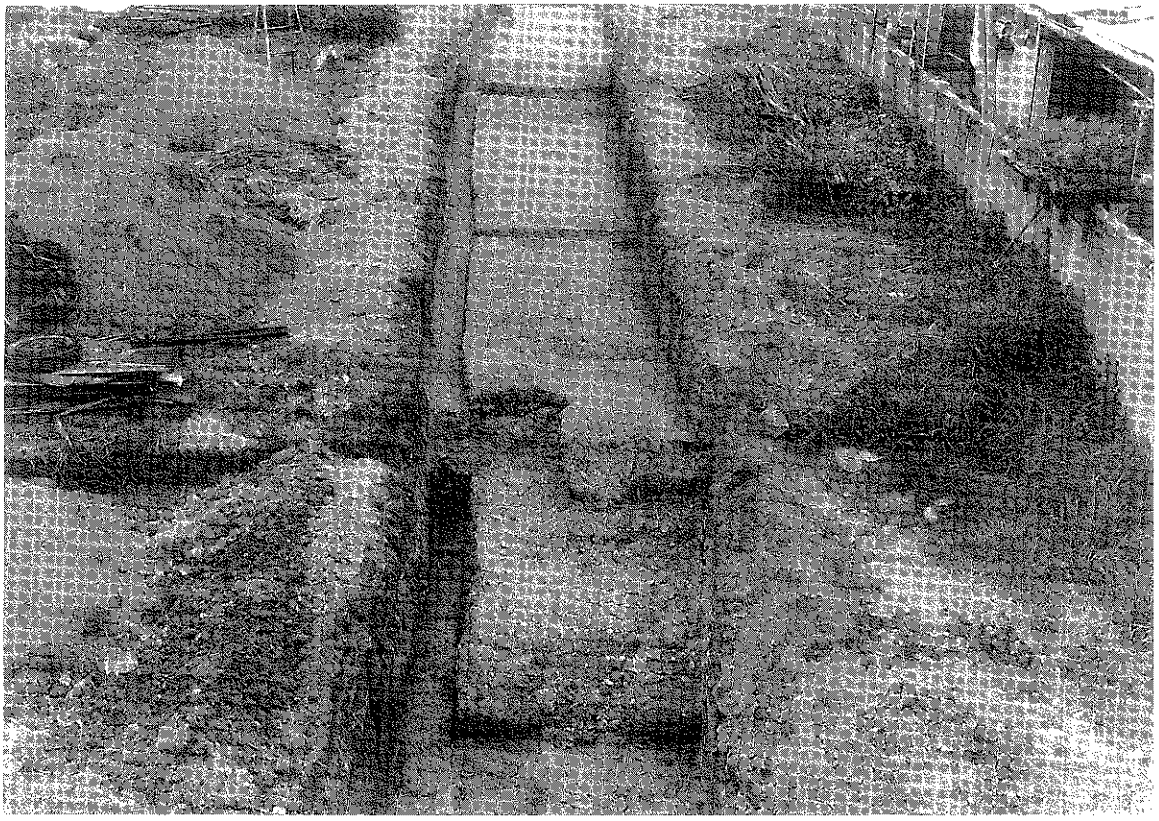
調査対象地の調査前の状況は、北と南に茶畑があり、中央に茶畑より一段低い幅約21mの水田があった。この水田はさらに東に伸び、L字状に北に曲がっている（第２図）。調査はこの一段低い水田が舟入などの施設になるのではないかとの予測のもとに、茶畑と水田との



第２図　槇島城の推定範囲と調査地の位置



第3図　1トレンチ全景



第4図　2トレンチ全景

境を中心としたトレンチ２本を設定して行った。

掘削の結果、茶畑の部分では耕作土の直下から安定した地層を検出したが、水田部分では青灰色シルトと砂の互層となっており、青灰色シルト層中には近世の遺物が包含されていることがわかった。

掘削は湧水のため、約１ｍにとどまったが、隣接する水田において工事が行われた際には、水田面から約２ｍ以上にわたって砂の堆積が認められ、本来はさらに深く掘り込まれた溝状の地形であったことが推測される。

この溝状遺構を土層断面から観察すると、北側の１トレンチではほとんどが北側からの流れ込み堆積の様相を呈しており、明確な護岸等の施設は認められない。しかし南側の２トレンチでは、現状の石垣の下層に垂直に下がる層の切れ目が認められることから、板もしくは杭などによる護岸があったのかもしれない。

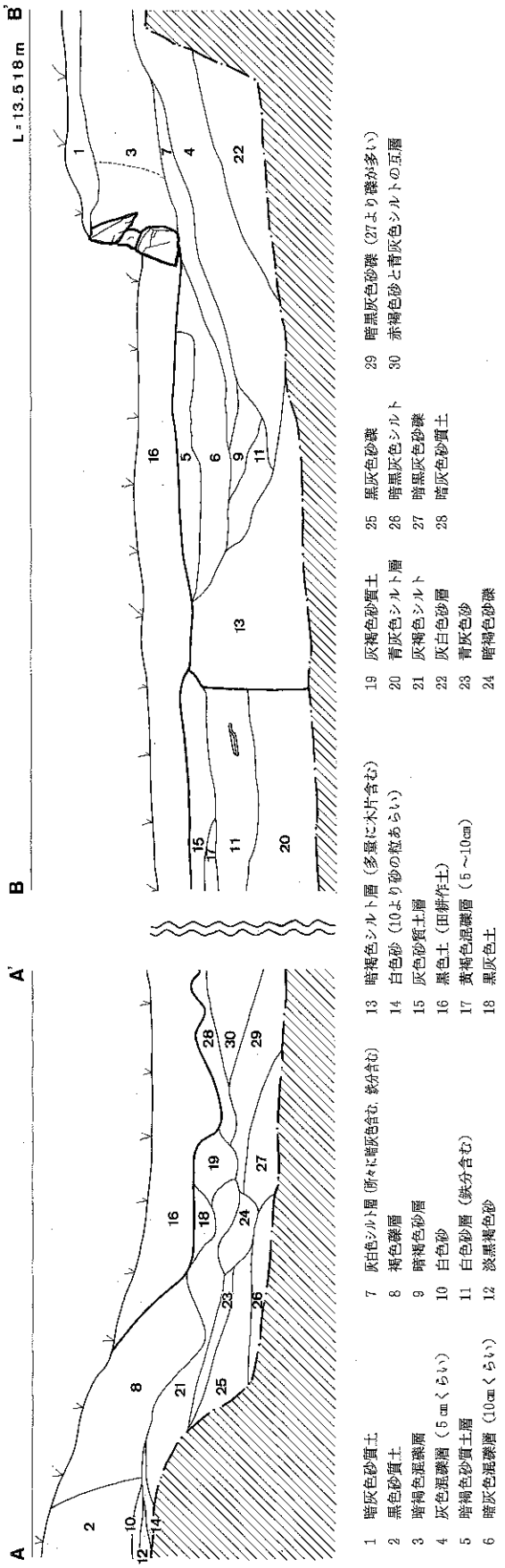
なお、茶畑の部分では遺構は検出していない。

B．遺物

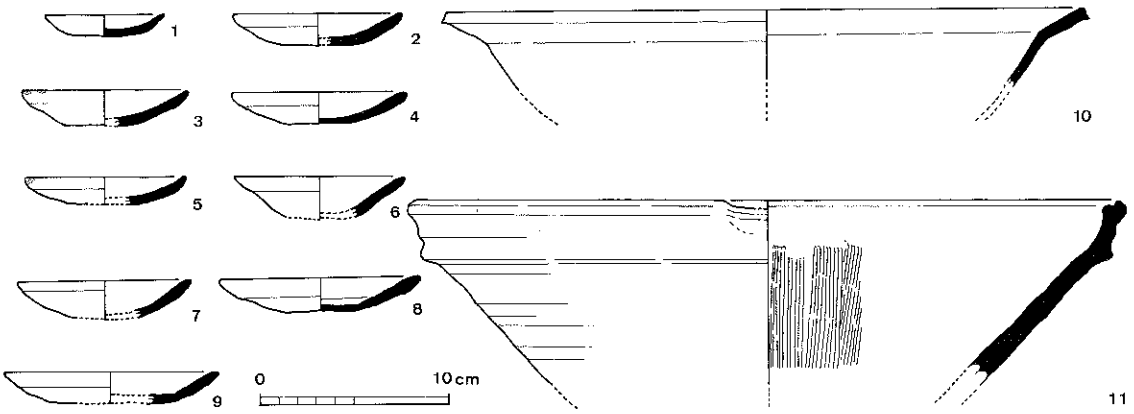
今回の調査で出土した遺物は、すべて溝状遺構の青灰色シルト層中、もしくは青灰色シルトにはさまれた腐植土層中から出土している。

出土した遺物には、土師器の皿・焙烙鍋、瓦、備前焼の壺、信楽焼の摺鉢、京焼の椀などがあるが、細片が多く図示し得るものは少ない（第６図）。

時期としては17世紀後半以降の遺物で占められる。



第５図　トレンチ断面図



第6図　出土遺物実測図

Ⅲ. ま　と　め

今回の槇島城の調査では、明確に中世までさかのぼり得る遺構の検出はできなかった。しかし、一段低い水田部分の造作は明らかに人為的なものであり、城に関連する遺構である可能性はかなり高いものと思われる。もしこの遺構が城に関連するものであるならば、現在推定されている槇島城の範囲がさらに西にひろがる事になる。『山城名勝志』によれば、城跡は方二町とされており、この記述とも合致する。

槇島城は、宇治市内の遺跡の中でも歴史の転換点に立つ重要な遺跡であるが、いまだにその具体的な姿を把握することができていない。その中で徐々に開発が進行している現在、周辺地域の十分な調査が痛感される。

抄　　録

ふりがな	うじしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいほう　だいさんじゅうきゅうしゅう
書　　名	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報　第39集
副書名	
巻　　次	
シリーズ名	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報
シリーズ番号	第39集
編著者名	吹田直子、荒川史、浜中邦弘
編集機関	宇治市教育委員会
所在地	〒611　宇治市宇治琵琶33番地
発行年月日	西暦1997年3月31日

所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡番号	北緯	東経	期間	面積	原因
あかつかいせき 赤塚遺跡	宇治市御園 69-1	26204	48	34° 55′ 51″	135° 48′ 20″	970829 ～ 971031	300㎡	共同住宅建設
こはたこふんぐん 木幡古墳群	宇治市木幡南山1-1，南山畑19，20，21，22，23の一部	26204	27	34° 55′ 11″	135° 48′ 12″	971120 ～ 980131	440㎡	共同住宅建設
いちりやまいせき 一里山遺跡	宇治市広野町東裏45-1	26204	91	34° 52′ 23″	135° 47′ 11″	971022 ～ 971111	296㎡	宅地造成
ままじまじょうあと 槇島城跡	宇治市槇島町薗場35番地	26204	21	34° 53′ 86″	135° 47′ 20″	9704 ～ 9704	110㎡	宅地造成

所集遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物	特記事項
赤 塚 遺 跡	集　落	中世～近世	溝 土壙 石列ほか	土師器・瓦器 輸入陶磁器 瓦・石製品ほか	
木幡古墳郡	古　墳 墳　墓	古墳～奈良	古墳	埴輪・須恵器 ほか	南山117号墳
一里山遺跡	集　落	古墳～奈良	竪穴住居 掘立柱建物 ほか	土師器・須恵器 ほか	
槇 島 城 跡	平　城	中世～近世	明確な遺構 はなし	土師器・陶器 ほか	

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報

－ 第39集 －

発行日　平成９年３月31日

発行者　宇治市教育委員会

〒611 宇治市宇治琵琶33番地

(0774) 22-3141 (代)

印　刷　有限会社　新進堂印刷所